井沢元彦

# 修道士の首

歴史ミステリー 織田信長推理帳

KODANSHA NOVELS

講談社ノベルス

# 修道士の首

歴史ミステリー 織田信長推理帳

井沢元彦

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

## 著者のことば

時代小説とミステリーを合体させた新しいジャンルを開拓したい——それが長年の念願でした。もちろん「捕物帳」という先行者がいるのは承知しています。それでも、あえて、「新しい」という言葉を使いたい。そして、その試みにもっともふさわしい人物、織田信長を主人公に選びました。信長の型破りな革新性に負けないシリーズにしたい、そう考えています。

修道士の首
歴史ミステリー 織田信長推理帳
井沢元彦

イB-02
講談社
620

井沢元彦（いざわ・もとひこ）

昭和29年名古屋生まれ。早稲田大学法学部卒。「猿丸幻視行」で江戸川乱歩賞受賞。歴史推理の若き担い手である。

ISBN4-06-181087-1
C0293 ¥620E (0)

定価620円

世は天正の時代、安土の城から天下を睥睨する織田信長の前に難事件が持ち込まれる。ヘルナンドという修道士が突然行方知れずとなり、直後から安土城下を金毛天狗なる妖怪が跳梁する。人を殺め、暗黒の闇に昇天する天狗の正体は誰？仕掛けは何？眼光鋭く金毛天狗を射る〝天下人〟の頭脳。冴えわたる織田信長の名推理。

KODANSHA NOVELS 大好評の既刊ベストセラーズ！

野坂昭如
背徳ごっこ 性の遍歴を描く長編 定価—680円

諸星澄子
誘拐者 書下ろし本格ミステリー 定価—620円

大沢在昌
野獣駆けろ 書下ろし都会派ハードボイルド 定価—620円

醍醐麻沙夫
殺人カーニバル 書下ろしバイオレンス・ロマン 定価—620円

川上宗薫
知りすぎた女 書下ろし本格ミステリー 定価—620円

志津三郎
刑事たちの伝説 書下ろしパロディ推理 定価—620円

喜多島 隆
殺しのヒットパレード 書下ろし青春推理 定価—660円

勝目 梓
絢爛たる檻 欲望の長編ロマン 定価—640円
女教師に捧げる鉄拳 ハード・バイオレンス 定価—600円
私設断頭台 バイオレンス・ロマン 定価—620円

連城三紀彦
敗北への凱旋 長編新探偵小説 定価—620円

南里征典
オリンピック殺人事件 書下ろし本格推理 定価—640円
天草は血染めの刃 書下ろし伝奇ロマン 定価—680円

阿井渉介
視聴率の身代金 書下ろしサラリーマン・サスペンス 定価—600円
卑弥呼殺人事件 書下ろし本格長編推理 定価—640円

斎藤 栄
日本国憲法殺人事件 長編本格推理 定価—640円

岡嶋二人
あした天気にしておくれ 書下ろし競馬ミステリー 定価—660円
七年目の脅迫状 書下ろし乱歩賞受賞第1作 定価—640円

有明夏夫
蔵屋敷の怪事件 新・大浪花職人往来 定価—620円

高柳芳夫
モスクワから来たスパイ 長編国際スパイ・ミステリー 定価—620円
ベルリンの夜に逃れて 長編国際スパイ・ミステリー 定価—600円

KODANSHA NOVELS

# 修道士の首

歴史ミステリー
織田信長推理帳

井沢元彦

講談社

# 修道士の首

井沢元彦

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

ブックデザイン＝市川英夫
カバーイラストレーション＝藤居正彦
本文イラストレーション＝西のぼる

目次

修道士の首——7
二つ玉の男——31
六点鐘は二度鳴る——55
王者の罪業——83
身中の虫——111
不動明王の剣——131
裁かれたアドニス——161

# 修道士（イルマン）の首

# 一

わたくしでございますか？　わたくしは前右大臣織田信長様の御城下安土にある神学校で、神にお仕え致しております修道士でございます。

安土は美しい町でございます。

都から十四レーグア（里）東の、琵琶湖のほとりにあり、安土城を中心に整然とした町並みが続いております。御城は信長様が三年の月日をかけ天下の名工を集めて築かれた、それは見事なもので、春の風やわらかなころ五層七重の天守が近くの西の湖の水面に写るさまは、まさに地上の楽園を思わせるものがございました。われらが師ルイス・フロイス様も、安土の町を日本で最も気品があり、位置と美観と建物と住民の気高さにおいて他のあらゆる町を凌駕している――とローマへ報告されております。町は長さ二十レーグア、幅が二ないし三レーグアで、信長様の楽市楽座の方針のためか商業がさかんでございます。もちろん天主の教えも信長様の庇護のもと、信者が増えてきております。安土セミナリオは城下の南の下豊浦というところの埋立地にございますが、当初は敷地も狭く教会の三階をセミナリオとして使っておりました。校長は司祭オルガンティーノ様で、ラテン語の教師にカリオン神父、メスキータ神父がおられます。またセミナリオでは音楽も希望者に教授することにしておりまして、オルガンやクラヴサン（チェンバロ）やハープなど、美しい音色が安土の町に流れるようになったのでございます。

信長様はことのほか西洋の音楽がお気に召され、よくセミナリオに演奏をお聞きにいらっしゃったものでした。

最初におみえになったのは、確か、主イエス・キリストの生誕より千五百八十年目（天正八年）の十一月、ちょうど万聖節の二日後でございました。わたくしども

はその日、いつものとおり朝五時半に起きミサと朝のお祈りをすませラテン語の学習を行なっておりました。わたくしは、一年ほど前に法華宗から改宗し熱心な信者となったシメオン修道士にラテン語の手ほどきをしておったのでございます。

わたくしとて改宗者でございますからラテン語が自由に使えるわけではございません。しかし、初歩の初歩ぐらいなら何とかわかりますし、この程度のことでカリオン様やメスキータ様のお手をわずらわせるわけには参りません。デウスの教えを奉ずる者にとってラテン語の学習は欠かせませんので、シメオン殿は熱心な生徒でした。

祈りの言葉を唱えるのも、聖歌を歌うのも、ラテン語が基本でしたし、なによりシメオン殿は直接自分の手で聖書を読みたいというのが大きな望みであったようで、その進歩の早さはおどろくべきものでした。

邪教ながらも法華宗と申しますのは他の仏教宗派と比べても戦闘的で異常な熱心さがございます。シメオン殿に申しわけないが、あるいはそれが今になって幸いしているのかもしれません。たとえば十一年前京の都で、フロイス様と朝山日乗と申す法華宗の僧とが信長様の前で宗論を戦わしたことがありました。

京の妙覚寺での宗論は、信長様や多数の諸侯の立ち合いのもと、フロイス様とローレンソ修道士が出席、法華宗側はあの日乗がまるで軍鶏のように目を光らせいまにも飛びつきそうな顔であらわれたのでございます。殿の御前でお二人は神の救いと恩寵をお説きになり、日本の神や仏は所詮只の人であり人々を救済することなど出来ぬと主張なさいました。これに対し日乗は唇を噛み、歯軋りし、激怒のあまり殿の御刀を奪って、

「この刀で殺してやる。もし霊魂があるというなら見せてみよ」

と無法にもローレンソ修道士に切りつけようと致しました。そこで信長様は日乗を取り抑えさせ、



「日乗、汝がなすべきは武器を執ることに非ず。根拠をあげ教法を弁護すべし」

とお叱りになったのでございます。

結局、この宗論は法華宗側の負けとなり、のちに、日乗は野垂れ死にをし、殿はますますわれらキリシタンに好意的になられたのでございますが、法華宗の仏僧どもは、その後も悪行改まらず、たびたび根も葉もない流言を飛ばし布教を妨害して参りました。魔法使い、天狗の手先等々、仏僧どもの虚言のため迷惑したこと数知れませぬ。しかし信長様の思し召しでセミナリオが開校されてからは、徐々ではありますがキリシタンに対する誤解や偏見がなくなってきたのも事実でございます。かつては邪教の熱心な信者であったシメオン殿が改宗され模範的な修道士となられたのも、そのあらわれでございましょう。

やせぎすで頬骨の出たシメオン殿とわたくしが、ラテン語の学習にひとくぎりをつけ、そろそろ食事をとろうかと思い始めたころ、突然、信長様がセミナリオにお出ましになったのでございます。わたくしどもは大慌てでお出迎えに走りましたが、殿は二階の祭具や十字架には目もくれず、まっすぐに三階へ登ってこられました。付き従うのはわずか五人、いずれも若い近習の方々で、中の一人は森蘭丸殿とおっしゃいまして御年十六歳におなりになる花も恥らう美少年でございました。

信長様は、フロイス様の表現を借りれば、中くらいの背丈、華奢な体軀で、髯は少なく、声は快闊、きわめて戦を好み、名誉心に富み、正義に厳格な方でございます。鷹狩り馬責めなどがお好きなわりには、青白く鼻筋の通ったお顔をお持ちです。御年は確か四十七歳と漏れうけたまわります。

信長様は西洋音楽が大変お気に入りで、まっすぐ三階にあがられたのも、色々な楽器が三階にあることを御存知だったからでしょう。信長様はオルガンやヴィオラやハープに手を触れられ、子供のように目を輝やかせてい

らっしゃいました。オルガンティーノ様が歓迎の言葉を述べられると、信長様はみなまで言わせず、

「パードレ、弾いてみせい」

とお命じになりました。

司祭様は手を打って楽器の演奏の巧みな者四人を呼びよせ、オルガン、ヴィオラ、ハープそれにクラヴサンにそれぞれつかせて、グレゴリオ聖歌の一節をお聞かせしました。

殿は目を閉じて御満悦の様子でしたが、ひととおりお聞きになると、楽器の構造に興味をもたれ司祭様に色々と御質問されました。特にその日、殿の興味を独占したのはイスパニアから到着したばかりのクラヴサンでございました。殿はクラヴサンの外蓋を開かせ金属の絃が張ってある内部をしげしげと御覧になりました。つくづく好奇心の旺盛な方でございます。

ところでクラヴサンを御存知でしょうか？　パードレの中にはチェンバロとお呼びになる方もいらっしゃるようですが、この楽器は木製の箱の中に琴のように張りめぐらした鉄製の絃を、横一列に並んだ鍵盤を押して、その先についている鳥の羽根軸や爪で引っかいて音を出すもので、強いて言えば日本の琴に似た音色をしております。信長様もオルガンと同じような鍵盤を使う楽器でありながら、音色がまったく違う点に深い興味を抱かれたのでございましょう。内部の構造を御覧になりながら、鍵盤を押させ、先の部分の爪が絃を下から上へ弾くさまを眺めて嬉しそうな表情をお見せになりました。

「お蘭、見るがよい」

と鍵の動きに合わせて、指で鉄の絃を弾いて音を出すさまは、とても天下人とは思えない無邪気さでございます。

お蘭と呼ばれた森殿も、シメオン殿も、クラヴサンの内部を見るのははじめてなのでしょうか、ひたすら殿の指先を見守っておったのでございます。

信長様はさらに一曲、クラヴサンだけの演奏を所望されましたので、演奏者の修道士ヘルナンド様は見事な手さばきで讃美歌をお弾きになりました。カンティガというマリア様の讃歌のようでございました。

ヘルナンド様はイスパニア生まれの若い修道士で、湖を思わせるような透き通った青い瞳と黄金の髪をお持ちで、初めて安土の町衆に姿をお見せになった時は、その見事な頭髪がひとしきり町の噂になったものでした。無知な町衆の中には、砂金をまぶしているのではないかと、ヘルナンド様の髪の毛を欲しがる者が少なくなかったと申します。

「見事じゃ、気に入ったぞ」

と信長様はヘルナンド様に用意の銀子をお与えになりました。ヘルナンド様は殿の御機嫌がよいのを幸い、受洗される意志がないかとお尋ねになりました。信長様はキリシタンの庇護者ではありましたが、御自身は信者ではなく、わたしどもは何度も洗礼を受けることをお勧めしていたのでございます。しかし、信長様はその時も、笑ってお答えにはなりませんでした。

## 二

とんでもない事件が起こったのは、八ヵ月ほどのちローマからの巡察使ヴァリニャーノ様が安土に御滞在中のときでした。

突然、ヘルナンド修道士が行方知れずとなったのです。その前夜ヘルナンド修道士は、オルガンティーノ様、ヴァリニャーノ様それにシメオン殿やわたくしと一日の反省と祈りをささげ寝床に入った筈でした。ところが五時半の朝の祈りにも姿を見せず、寝床はもぬけのから。外出の心当りもありません。もちろん外泊するような方でもありませんので、一同何かヘルナンド様の身に変事があったのではないかと八方手を尽くして探しました。しかし杳として行方は知れず、不安に苛まれた顔が礼拝堂の中に並ぶ次第となりました。

「行先について心当りはないか？」
こうお尋ねになったのはオルガンティーノ様でございました。誰も答えません。こんな場合は、信者のところへ行っている間に何か不都合があったのではないかと考えるのが普通のようでございますが、たとえそうだとしても、ヘルナンド様は平素から心がけがよい方で何らかの連絡をしてくる筈なのでございます。行先も告げずにいつの間にかいなくなったのは、まったく初めてでございました。もしや異教徒に襲われたのでは、いやいや悪い女に引っかかったのでは——など想像は悪い方へ悪い方へと進みました。
沈黙を破ったのはシメオン殿でした。
いかにも言いにくそうにシメオン殿は驚くべきことを語り始めました。ヘルナンド様が最近信仰に疑いを持って悩んでいたというのです。
「——果して神の救いなどがあるのだろうか、もし、その有無を知ることができるなら、悪魔に魂を売ってもよい。そう話しておいでした」
シメオン殿がそう言うと、オルガンティーノ様は信じられないように首を振り、
「なぜ、わたしに相談しないのだ。なぜだ？　あの気持のいい若者が……」
と絶句なさいました。
「——とても恐しくて相談できなかったのでしょう。わたくしにも、ふとお漏らしになったのですから」
オルガンティーノ様は激しく衝撃を受けられた御様子で、頭を抱え込んだまま椅子に座り込んでしまわれました。それを見て、ヴァリニャーノ様は胸のロザリオをまさぐり、一同に向って、
「ヘルナンドの無事を神に祈りましょう」
と声をかけられました。
しかし、その祈りは空しかったと言うべきでございましょうか、その日の午後からでございます、城下に〝金毛天狗〟の噂が流れるようになりましたのは。



城下の辻々に金毛碧眼黒カッパの男が現われ、人々に悪さをしかけるという噂でございます。ある者は突然眼の前に現われた金毛天狗に、殴られて財布を奪われたと申します。またある女は着物に墨をかけられ、ある子供は遊びの独楽を取り上げられるなど、その日を境に頻々として被害が出始めたのでございます。その金毛天狗なるものは、金髪に瞳は青く全身黒ずくめの服装で、ビロードのカッパを着ているという噂でした。当初は馬鹿げた噂として無視していたわたしどもでしたが、こうも被害が続出すると考えずにはいられなくなりました。すなわち、金毛天狗とはヘルナンド様の仕業ではないかということでございます。
ヘルナンド様の温厚で篤実な性格からみれば有り得ない筈のことでございましたが、金髪で青い眼の人間はざらにはおりませぬうえ、修道士の服装というのは御存知のように黒ずくめなのでございます。
事態を重く見たオルガンティーノ様の命令で、わたくしどもは手分けして町中を探しました。何しろ傍目には異様な風体でございますので、そうそう隠れるところがある筈はございません。ところが、どこを探しても見付からないのでございます。一同日々のお勤めもままならぬ有り様となりました。さらに悪いことは金毛天狗が伴天連の魔法使いだという根も葉もない噂が市中に流れたことでございます。このために、わたしどもが町を歩くと罵詈讒謗や小石までが飛んでくるようになりました。
ヘルナンド様が姿を消して三日目の夕方、わたくしが探索から戻って参りますと、オルガンティーノ様が額から血を流していらっしゃるではありませんか、わたくしは慌てて駆け寄りました。
「パードレ、どうなさったのです？」
「——案じてはなりません」
とオルガンティーノ様は微笑を浮かべておっしゃいました。わたくしはとりあえず血止めをし、包帯を巻いて

きりわかりました。信長様は御幼少の頃から、人々の噂話にはことのほか早耳だと聞いております。きょうの御来駕も噂を知ってのことに相違ありません。わたくしは肝の冷える思いでございました。信長様はワインを一杯召し上がると、すぐに外に出て馬に乗られました。そして馬上からオルガンティーノ様に、

「城下を騒がす者は早めに処置せい。ぐずぐずすると、キリシタンの評判が落ち、坊主どもを喜ばすことになる」

とおっしゃり城へお帰りになりました。

これが信長様のキリシタンに示す好意の限界だったのでございましょう。

しかし、それ以後もヘルナンド様の行方はまったくわからず、金毛天狗の跳梁はますますひどくなり、ついに人殺しまで犯すようになってしまったのでございます。それも殺されたのは、わたくしどもの身内ともいうべき修道士でございました。



手当を致しました。

「町の衆が石を投げたのですね？」

わたくしは憤慨して言いました。オルガンティーノ様はわたくしの興奮をたしなめるように、

「迷える小羊たちが誤解をしたのです。恨んではなりません」

とそれ以上の追求を封じました。

おり悪しく、そこに遠乗り帰りの信長様がお見えになったのです。いつものように蘭丸殿をはじめお供は数人でした。

「パードレ、額の傷はどうしたのだ？」

と信長様は無気味な笑いを浮かべてお尋ねになりました。オルガンティーノ様は笑って、つまずいてころんだと説明なさいました。それを聞くと信長様は、

「まあよい、そういうことにしておこう」

とおっしゃいました。

わたくしには信長様が何もかも御存知なのだと、はっ

亡くなったのはヘルナンド様と同じ頃イスパニアを出られたジョアン様でございます。ジョアン様は、ヘルナンド様失跡以来、人一倍お心を痛められ、毎日暇を見付けてはヘルナンド様の行方を探索されていたのですが、五日目の朝、城下の南のはずれにある浄厳院という寺の外側で死んでいるのが見つかりました。町役人の知らせを受けたわたくしはシメオン殿と、とるものもとりあえず駆け付けました。

ジョアン様は浄厳院の土塀に上半身をもたせかけるように死んでおりました。胸には槍の穂先のようなものが刺さり、これが致命傷となった模様です。わたくしは役人の許しを得て、ジョアン様の両手を組ませ、神に祈りを捧げたのでございます。

そのうち、シメオン殿がふと妙な顔をし、ひざまずいてジョアン様の右手をとりました。そして固く握られたその拳をわたくしに示したのでございます。

わたくしは思わず声をあげました。なぜならその手には金の毛が数本しっかりと握られていたからでございます。

具合の悪いことに役人もそれに気が付きました。

「――これだな、例のヘルナンドとか申す金毛天狗の毛は」

と役人は底意地の悪い目でわたくしどもを睨んで言いました。

「違います。ヘルナンド様は金毛天狗などではございません」

役人はわたくしどもの抗弁にはまったく耳を貸しませんでした。

わたくしどもはジョアン様の遺体を受け取ると、肩を落してセミナリオへ帰ったのでございます。

そして、その日、信長様はついに辻々に高札を立て、金毛天狗ことヘルナンド修道士を捕えるようにお命じになったのでございます。

## 三

幸いにも信長様のキリシタン全体に対する御気持は、金毛天狗騒ぎのあとも変りませんでした。殿はこの騒ぎをヘルナンド修道士の乱心によるものとみており、一人の乱心者が出たからといって考え方を変えたりはなさらないのです。このあたりが信長様が他の日本人と大きく違う点なのでございましょう。

さて、憎むべき金毛天狗の跳梁はいよいよ激しく、侍屋敷に火付を働いたり、他にも人を殺すなどの悪業を重ねるに至りました。わたくしはジョアン様がしっかりと握っていた金の髪の毛を見たのちも、ヘルナンド様が金毛天狗だとはどうしても信じられませんでした。しかし、或る日とうとうそれを信じなければならない日がやってきたのでございます。

その日、安土のとある屋敷町の一角に金毛天狗が出現致しました。夜更けに信長様の御家来衆が談合を済ませ、五人ほどで連れ立って家路につかれたところへ、大胆にも金毛天狗がぬっと現われたのでございます。

「おのれ、妖怪」

さすがは長年戦場で鍛えた方たちでございます。すぐに抜刀して切りかかったのですが、金毛天狗はきびすを返して逃げだしました。御家来衆が追いかけますと、金毛天狗は疾風のように走り、とある屋敷の角を曲りました。御家来衆はしめたと思ったに違いありません。その先は屋敷と屋敷に挟まれた行き止まりで、ついに金毛天狗を袋の鼠にしたように思われたのでしょう。金毛天狗の不意打ちを用心しつつ御家来衆が曲り角を曲られると、金毛天狗は行き止まりの築地塀を背にしてこちらを睨みつけていたそうでございます。

黒の修道服、黒のカッパ、その上にのっている金毛碧眼の顔は、まぎれもなくヘルナンド様の顔でした。いえ、わたくしは見たわけではございませんが、御家来衆

の中にキリシタンの信者がいたのでございます。その方の申されるには、ヘルナンド様は能の小面のような無表情な顔で両手を横に大きく拡げて、こちらを向いて立っていたそうでございます。その方は「ヘルナンド殿」と声をかけましたが、何の返事もなく、お仲間の御家来衆がかまわず一刀のもとに切り捨てようとなさいました。

ところが、ここで摩訶不思議なことが起こりました。なんとヘルナンド様は真っすぐ垂直に天に向って飛び上がったのです。そして、あっという間に暗闇の空へ消えてしまったのでございました。

剛勇をもって鳴る織田家の御家来衆も、これには腰を抜かし、ほうほうの体で御城へことの次第を知らせに走ったのでございました。

## 四

一夜明けて、噂を聞いたオルガンティーノ様はその路地へさっそくおもむかれました。わたくしもお供致しました。

既にそこには信長様がお見えになっており、しきりに御家来衆から昨夜の話をお聞きになっていました。

「喜左衛門、まちがいないのじゃな」

「確かに真っすぐ空へ向って昇っていったのでございます」

喜左衛門と呼ばれた侍は地面に平伏してはっきりと返答しました。

「ふうむ――」

信長様は小首を傾げつつ、路地の奥を御覧になりました。

そこは確かに三方を築地塀で囲まれ行き止まりになっていました。ただ突き当りの塀の内側に高い松の木が立っており、その太い枝が路地の方へ張り出していました。また左側の築地塀には小さな潜り戸が付いておりました。



「喜左衛門、誰かがあそこにいて伴天連を吊り上げたのではないのか」

信長様はお持ちになっていた鉄扇で、その松の枝を示しました。

「滅相もございません」

喜左衛門は心外といった表情で言いました。

「吊り上げたのなら縄のようなものが見える筈、そのようなものは一切目に触れておりませぬし、第一、松の上に人の気配などござらなんだ」

「されど、伴天連が天に昇ったのを見届けたわけではあるまい」

と信長様は微笑を浮かべておっしゃいました。喜左衛門がけげんな顔をすると、信長様は、

「昨夜は闇夜であった。月明りも星明りもない夜であれば、伴天連がどこまで昇って消えたか見届けられる筈はあるまい」

とさとすようにおっしゃり、今度は路地奥の潜り戸に手をかけられました。

「開かぬな、これは誰の屋敷じゃ」

「はっ、お取り立ての朝山源五右衛門殿の屋敷にございます」

と蘭丸殿が即座にお答えになりました。

「朝山が屋敷か――」

信長様が呟くようにおっしゃると、しばらく思案の御様子でした。

朝山殿は出雲の国に生まれ毛利氏に仕えたあと、新興の織田家に魅力を感じて随身されてきた方で、武芸だけでなく築城の才もあるところから五百石で召し抱えられたという話でございます。

信長様は朝山殿を呼ぶように蘭丸殿にお命じになりますと、初めて気付いたようにオルガンティーノ様を見て歩いてこられました。

「パードレ、その方の弟子に悩まされておるわ」

信長様は笑顔でおっしゃいましたが、オルガンティー

ノ様は恐縮のあまり身をかがめるようにして返事も口ごもりがちでした。

「その方どもの教義では、人間は死後昇天するというが、死なずに天に昇る方法があるのか？」

と信長様は皮肉げな表情でオルガンティーノ様にお尋ねになりました。

「とんでもございません。これは何かの計りごとかと――」

オルガンティーノ様はぼそぼそと消え入るような声で御返事なさいました。

そのうちに朝山源五右衛門殿がやってまいりました。口ひげをなまずのようにのばした見栄えのしない男でございます。殿はさっそく御下問になりました。

「朝山、昨夜この潜り戸は開いておったか？」

「いえ、かたく内側から閉ざしてございました、それが何か？」

朝山殿は不審気に問い返しました。

「それならばよいわ。昨夜、天狗がここで消えたそうな。その方にこころ当りはないか？」

「いえ、ございません」

朝山殿はすぐに首を振りました。

信長様はまたしばらく御思案の体でしたが、下がってよいとおっしゃると、急にオルガンティーノ様の方へお越しになりました。

「パードレ、明日はヴァリニャーノの歓送の宴を催したい」

何事かと身構えていたオルガンティーノ様は、それを聞いてほっとしたように肩の力をお抜きになりました。

「明日は盂蘭盆会ゆえ趣向がある。――城下の灯を一切消させた上で、城だけを提灯で飾る、見ものだぞ」

と信長様は持ち前の大声でおっしゃると、たちまち馬に乗りその場をあとにされました。



## 五

ヴァリニャーノ様をはじめとしたセミナリオの全員が、翌日の夜に御城に招かれました。

このところ相次いでいた金毛天狗の騒ぎで意気消沈していた安土の町衆も、その日ばかりは浮き浮きとした気分を隠せませんでした。

信長様はお祭り好きで、祭りの趣向を考えることでは日本国広しといえども右に出る方はいらっしゃいません。以前、将軍の御所を作る際、庭に大石を運び入れたことがございました。何の変哲もないこの石運びを、信長様は石を綿で包み囃子方をつけることによって、一つの祭りに変えてしまったのでございます。ただ石を運ぶということだけで、洛中はもとより近隣の諸国からも見物人が集まる騒ぎとなり、以後石運びはこの形式で行なわれるようになったのでございます。

今回、ヴァリニャーノ様の御出立に対して信長様はまたも奇抜な趣向をお考えになりました。夜も更けた頃、太鼓を合図に城下の灯を一斉に消し、安土城だけをともすというのでございます。もちろん御城の軒先という軒先には提灯を吊るし、まばゆいばかりの不夜城としようという御趣向でございまして、さすが天下人のお考えでございます。

わたくしどもは正直申して、盂蘭盆会にちなんだということが気に入りませんでした。何しろ異教の祭りでございますから。しかし、このところキリシタンと見れば白い目で見るようになった町衆が、久し振りに心を踊らしていることでもございますので、信長様のお招きを受け御城に参ったのでございます。

安土城は異教の装飾に満ちてはおりますが、天下無双の美しい城でございます。城の中央底部には宝塔が鎮座し、四階まで吹き抜けの空間がございます。各間には狩野永徳が力の限りを叩きつけた龍、獅子、松、唐の国の

聖賢などが描かれており、世界の国々を巡られたヴァリニャーノ様も最も美しい清潔な宮殿だと断言なさるほどでした。

ヴァリニャーノ様はまず四階の鳳凰の間に招かれ、信長様の接待を受けられました。鳳凰の間――その名のとおり部屋の障子はすべて鳳凰の絵が描かれているのでございますが、そこで、わたくしどもも御相伴にあずかり、豪華な食事のあとは歓談となりました。わたくしどもは酒は頂きませんでしたが、接待役の織田家の方々はかなり聞こし召された御様子で、そうなると話はどうしても金毛天狗のことになってまいります。

「なあ、パードレ殿。金毛天狗を退治するには、どのようにしたらよいのかのう?」

ヴァリニャーノ様やオルガンティーノ様は、このような質問にも嫌な顔一つせず適当にお答えになっていらっしゃいましたが、さすがに心中は穏やかではありません。なにしろ、あの金毛天狗の昇天以来、被害は出なくなったものの、伴天連は魔法を使い民を苦しめるとか、伴天連の体に触れれば呪いにとりつかれるなど、無責任な噂が広まり信者の数が減り続けていたのでございますから。

信長様はそんな様子を御覧になり、さっと立ち上がると太鼓を打つようにお命じになりました。

城下の灯りがみるみるうちに消えてゆきます。広い平野に灯りがともっているのは御城だけ、その城の姿が城下を流れる川や湖に写る様は夢のような美しさでございました。

「外から城を見るべきであったな」

信長様が呟くようにおっしゃいました。

確かにそうかもしれません。闇の中に照り輝く城の情景を見るには、外へ出た方がよかったかもしれません。

しばらく一同は外の景色を呆けたように眺めていました。四半刻もいたしますと、信長様は再び太鼓を打つようにお命じになりました。城下の灯りがともり始めました。



その時、わたしどもは恐しいものを見たのでございます。

ヘルナンド修道士が例の姿で空中に浮かんでいたのでございます。鳳凰の間から見ますと少し目の下、御城の外の林の間の何もないところに、ヘルナンド修道士が両手を広げ白い服をまとい空中にぽっかりと浮かんでいるのでございます。その姿が普通より多い城からの灯りと城下の灯りで、夜目にもはっきりと見えたのでございました。

人々は驚きあわて、ある者は仏の名を唱え、ある者は刀を把んで外へ飛び出し、城内のあちこちから女の悲鳴が聞こえて参りました。

信長様はまるでこのことを予期されていたかのように、少しも騒がず短く鋭い声で、

「鉄砲組」

とお命じになりました。

すると驚いたことには、あっという間に五十人ばかりの鉄砲組が御城の石垣のへりのところにあらわれ、すぐにヘルナンド修道士を射ち始めたのでございます。

わたくしにはその時はっきりとわかりました。初めから信長様は天狗をおびきよせるお考えで城下に触れを回したのだと。

ところがその後、さすがの信長様も目を丸くするようなことが起こりました。

体に弾丸が何発命中しても、ヘルナンド修道士は落ちもせず、空中に浮かんだままだったのです。

もちろん弾丸は何発も命中しています。わたくし自身、ヘルナンド修道士の白い服に弾丸が当ってはじけるさまが見えたのでございますから。なにしろ狙っているのは天下一の腕前を持つ織田家の鉄砲組です、万に一つもはずれるわけがございません。それなのにヘルナンド様の体からは血も流れず苦痛にうめく様子もございません。あまりの気味悪さに鉄砲組も射撃を中止し、ヘルナ

ンド様をじっと見つめました。
その時でございます、闇の底から響くような声が聞こえてきたのは。
「織田家に呪いあれ、安土城に呪いあれ、キリシタンを信ぜぬ者は滅びるぞ――」
ヘルナンド様のお声には似ていました。しかし、一体なんでヘルナンド様がこのようなことを。
その声で我に返った鉄砲組が再び射撃を開始しようとした時、ヘルナンド様の姿は急にかき消すように見えなくなってしまったのでございます。
「悪魔じゃ、悪魔の仕業じゃ」
オルガンティーノ様が震えながらおっしゃいました。
「パードレ、馬鹿なことを言うでない」
と信長様は不機嫌そうな顔をされて、
「この世には神もなければ悪魔もない。来世もなければ前世もない。あるのは今日只今の己のみ」
そう言い放つとさっさと奥の間に引き上げてしまわれました。

## 六

ヘルナンド様が討ち取られ首級があげられたという知らせが届いたのは、それからほんのわずか後のことでございました。
「討ち取ったのは誰ぞ？」
信長様は大して嬉しそうでもなく蘭丸殿にお尋ねになりました。
「朝山源五右衛門殿でございます」
「ふむ、朝山か。――よし首実検をする。一同を二の丸に集めい」
この御命令で、すぐに二の丸の広場にかがり火がたかれ、首実検の場が設けられました。
「朝山、いかにして討ち取ったぞ」
床几にどっかと腰をおろした信長様は、開口一番朝山



殿にお尋ねになりました。
「はっ、拙者、今夜は非番で屋敷におりましたが、御城の騒ぎを知り馳せ参じましたるところ、途中の辻で天狗めに会い一刀のもとに首をはねた次第にございまする」
それを聞くと信長様は立ち上がり、御前に据えられているヘルナンド様の生首と、黒の修道服を着た胴体を見比べておられましたが、やおら手を伸ばすと首を両手でお把みになり、あろうことか舌でペロリと生首の額を舐められたのでございます。これには一同度肝を抜かれました。
「ふむ、良き酒の味がする――」
信長様はそう呟かれると、オルガンティーノ様の方を向かれ、
「パードレ、確かに修道士ヘルナンドの首に相違ないか？」
「相違ございません」
オルガンティーノ様は悲しみを振り払うような声でお答えになりました。
「気の毒であったな」
信長様はそうおっしゃると、声を一段高くされて、
「皆の者、この体をよく見よ」
と戸板の上にのせられたヘルナンド様の胴体の修道服を引きちぎられました。驚いたことには、その体にはまるで鉄砲傷がなかったのでございます。
「お蘭、これを何と見る？」
問われた蘭丸殿も目をぱちくりさせて、
「狐狸妖怪のなせる術、わたくしにはわかりませぬ」
とお答えになりました。
信長様は大声でお笑いになり、そしておっしゃいました。
「お蘭よ、皆の者も、よく聞け。この世に妖怪などおらぬ。すべてはまやかし。まやかしにはタネというものがある」
そして表情を引きしめられ、御前にまかり出ている朝

山源五右衛門殿をじろりと睨み付けられました。
「源五右衛門、策が過ぎたの」
信長様は冷ややかにおっしゃいました。
源五右衛門殿は無表情で、
「なんのことか、拙者にはとんと――」
「だまれ、源五右衛門。そちの奸策がわからぬ信長と思うてか」
そう浴びせられても源五右衛門殿は「一向に存じませぬ」と突っぱねたのでございます。
「あくまでしらを切るなら申してきかそう。そちはキリシタンに恨みを抱いておったのだ」
と信長様は今度の一件の解明をお始めになられました。
「そこで、そちはキリシタンの評判を失墜させるため修道士ヘルナンドを拉致し、衣服を奪って身につけ市中で狼藉を働いたのだ。金髪はおそらく鬘でも作ったのであろうよ。だが容易にキリシタンの信用が墜ちぬのを知ったそちは、修道士ジョアンを殺害、その手にヘルナンドの頭から引き抜いた髪をつかませ、ヘルナンドの仕業に見せかけた。さらにヘルナンドも殺害し、その首を使ってあのような手妻を見せた。この首を見よ」
と信長様は再びヘルナンド様の首を持ち上げました。
「この首は只今はねられたものではない。そちは二日前にヘルナンドの首をはね、まずそれを使ってヘルナンド昇天の場を作り出したのだ。この首の脳天には小さな穴があいておる。ここに畳針を用いて細い糸を通し首をぶらさげた。そして首の下に竹のような軽いもので作った胴体の張子をくくりつけておく、張子にはもちろん修道服を着せておくのだ。この吊り下げ首を、あの路地の松の枝に滑車で下げておき、お前はヘルナンドに化け人前に姿を現わし、路地にかけ込んで潜り戸から屋敷の中へ逃げ込む。そして吊り下げて置いたヘルナンドの首と張子の胴体を侍どもの目の前で塀の内側から滑車を使って引き上げたのだ。そのためにお前は闇夜を待っていた。



闇夜ならば松の枝の中でヘルナンドの姿を見失ってしまうからだ。そして、今宵も同じ手を使った。おそらく、林の木と木の間に黒く塗った縄をはり、その縄に同じ糸で首をつるしたのであろう。今宵は遠目で見せるため、ヘルナンドの着衣を白に変えた。だが、こうも素早く鉄砲で射たれるとは思わなかったであろう。胴体に鉄砲傷がないのが、あの体が張子であったことの何よりの証拠じゃ。首と胴はあれ以前に離れていた筈。だとすれば、首を今切ったと称する者が、今度の一件の下手人に相違ない。首は美酒につけておけば、少しの間はもつからの。違うか、源五右衛門？」
源五右衛門殿はこの期に及んでも表情をまったく変えずに、
「殿、しからばお尋ね致すが、拙者がそのような馬鹿な真似をしたところで、一体何の得になるとおおせられるのか？」
と問い返して参りました。
「日乗よ。そちは朝山日乗の縁者であろう。日乗もそちも出雲国朝山氏の出だ。今回のことはキリシタンへの意趣晴らしと、魑魅魍魎が嫌いなわしにキリシタンを禁じさせるのが目的であろう。信ぜねば呪いがかかるなどと言い、わしの反撥を利用しようなどとは、なかなか芸が細かいのう」
信長様は皮肉に満ちた口調で源五右衛門殿に最後の言葉を与えられました。
わたくしどもは驚きで声も出ませんでした。あの驕慢な法華宗の行者、フロイス様との宗論に破れ野垂れ死したと風の便りに聞く日乗の縁者が今度の黒幕だったとは。さすがの源五右衛門殿もすべてを見透され返す言葉もない有り様でした。
「もはや、これまで。かくなるうえは伴天連坊主を一人でも多く地獄の道連れにしてくれる、典馬、参るぞ」
真赤な顔で源五右衛門殿が叫ぶと、突然、わたくしのとなりにいたシメオン殿がオルガンティーノ様に飛びか

# 二つ玉の男

かろうとしたのです。わたくしが止めようとした時、轟然たる銃声が響きわたり源五右衛門殿とシメオン殿は大地に倒れ血を流していました。

天下一の織田家鉄砲組は今度こそ期待にたがわぬ働きをしたのでございます。あらかじめ信長様は鉄砲組を伏せて万一の場合に備えていらしたのでした。

シメオン殿が法華宗の間者であることに気が付いたのは、それからしばらくたって冷たい夜風が肌に感じられるようになってからのことでございました。

ふと、蘭丸殿が信長様と話されている声が聞こえてまいりました。

「殿、首を吊ったのはわかりますが、あのような重い首を何を使って吊るしたのでございましょう？　夜目とは申せ、見えぬほど細く、しかも重い首を吊れる縄がございますか？」

「お蘭、一度見たものは忘れてはいかぬな」

と信長様は慈父のような微笑を浮かべ、こうおっしゃいました。

「クラヴサンの絃を使ったのだ。細く堅く目立たない色ではないか、もちろん贋修道士が盗んだのだ。ヘルナンドがいなくなれば、クラヴサンの絃が無くなっていることに、気付く者は少ないのでな」

まったく信長様は恐ろしい方でございます。

# 一

その年、元亀元年（一五七〇）は、信長様にとって幸運と厄難が続けざまにやってきた年でございました。

幸運というのは他でもございません。

その二年前、足利将軍家の血をひく義昭様を奉じて西上の軍を起こし、見事に成功されたことに始まる織田家の栄えでございます。

義昭様を将軍の位に就けて、その後楯として天下に号令するためには、どうしても避けて通れない関門がございまして、それは近江の国の勢力でございました。

そのうち北近江は、信長様の御妹である、お市の方が領主浅井長政殿に嫁しておられ、両家は姻戚の間ですので問題はないのですが、問題は南近江の六角承禎でございます。

六角氏と申せば、佐々木源氏の血統を誇る名門中の名門でございます。残念ながら、家柄では、織田家など到底太刀打ちはできません。しかも、この六角氏、三好党でございました。京に根を張る三好一族は、足利家の一族の義栄殿を将軍の座にまつり上げ、同じく天下に号令することを狙っておりました。しかも、形ばかりとはいえ、義栄殿は既に朝廷から将軍職を宣下されており、一足先に将軍の座に就いていたのでございます。

このため、新将軍を立てるため京に入ろうとする織田家と対立したのは止むを得ないことでございました。

何よりも、六角家の当主承禎は信長様を馬鹿にしきっておりました。承禎は信長様より十三年長でございます。

片や名門、片や成り上りの出来星大名、しかし兵力の差は歴然としていた筈でございまして、目のある者が見れば六角は織田家と同盟を結ぶべきでございましたでしょう。

しかし、そこが名門のおごりと申しましょうか、承禎

は本城である観音寺城や箕作城などの防備を固くして、徹底的に織田軍の上洛を邪魔する作戦に出たのでございます。

これが、二年前の九月のことでした。

義昭様を奉じて岐阜城を出発した信長様は、その月の十一日に尾張、美濃、伊勢、三河の四ヵ国から動員した兵およそ六万と共に近江の愛智川に着陣。そして翌十二日には、最前線の箕作城攻めにかかったのでございます。

信長様がまず箕作城から攻めかかったのは理由がございます。

これは上洛への第一戦ですので、まず勝ちを収める必要があったのでございます。

敵の本城の観音寺城は天下に名を轟かせた堅固な城でございます。もし、この城から取りかかり攻めあぐねるようなことにでもなれば、織田・六角のいずれにつくか迷っている近隣の豪族の態度にも悪影響がございます。

そこで、信長様は守勢六千と攻めやすい箕作城を先にしたというわけなのです。

戦いは十二日の申の刻（午後四時頃）から始まり、満を持した織田勢は火のように攻めかかりました。城兵の防戦もなかなか見事でしたが、応援の三河の松平勢の奮戦もあり、日が沈む頃には城内から降伏の申し入れがありました。

まず一勝をと考えておられた信長様が、これを承知したのは言うまでもありません。

信長様は意気揚々と城に入り、明日は観音寺城を攻めると布令を出されました。

そして、その翌日前代未聞の珍事が起こったのでございます。

翌朝、あの堅固な観音寺城はもぬけのからとなりました。六角承禎は織田軍の強さに度肝を抜かれ、前夜のうちに城を捨てて退散したのでございます。

いかに恐れたとはいえ、一国一城の主が城を捨てて逃げ出すなど言語道断のことでございます。

まったく信長様は運の強い御方と申せましょう。承禎が本気で籠城戦に出れば、織田家と仲の悪い北陸の名門朝倉家も援軍を出したかもしれません。織田家と同盟の形をとっている浅井家は、朝倉家とは深い付き合いがあり、もし朝倉・六角の同盟が成立していたら、浅井家はその同盟に味方したに違いありません。これは推測ではなく、現にそれから二年後織田家が朝倉攻めを行なうと、浅井家では織田との同盟を解消し、反旗をひるがえしたぐらいでございます。

承禎に断固籠城をいとわない勇気があれば、織田家の運命は決して開かれることはなかったのでございます。

しかし、承禎の武士にあるまじき臆病のおかげで、信長様の上洛にはもはや敵はなく、その年の九月二十六日、諸国の大名のすべてが望んで果し得なかった夢――上洛を果したのでございます。

それにひきかえ承禎は希代の臆病者として、織田家のみならず天下の物笑いとなったのですが、そのとき唯一人信長様は、敵を軽んずる言葉をたしなめて、

「臆病者こそ恐ろしい。臆病者は執念深いからだ。この信長を生涯の怨敵としてつけ狙うかもしれぬ。臆病者は無茶をせぬゆえ、かえって油断できんのだ」

そうおっしゃいました。

世間では信長様を、田楽狭間で今川義元を討ち取ったやり方を見て、むこうみずな猪武者と思っております。

しかし、それはとんでもない思い違いでございまして、信長様は決して冒険というものをなさらない御方なのでございます。

戦いは必ず勝算を得てから行ないます。

当り前のことだとおっしゃらないで下さい。言うは易し行うは難しの典型でございまして、諸国の武将の方々も『勝敗は時の運』とばかりに、戦いを始める方がほとんどでございます。

信長様は違います。

まず諜者を放ち、敵の内情・戦力・兵糧などを詳しく調べ、必ず勝てると見極めてから戦いを挑みます。万一、事前の計算に狂いがあれば、ただちに戦いを中止します。その意志の固さといったら想像もできないほどのものでございます。

では、田楽狭間の合戦の時はどうしたとおっしゃるのですか、あれは一か八かの奇襲以外に方法がなかったのでして、信長様はそれ以後決してあのような戦い方をなさいません。

六角攻めに際しても、充分に敵を調べた上で戦いを進めたのでございます。

さすがの信長様も、承禎が城を捨てて逃げるところまでは読み切れませんでした。先程も申しましたように、承禎が徹底抗戦に出れば、織田家は戦略上窮地に立たされる可能性もあり、信長様にとって、この点だけが心配の種だったのでしたが、承禎の恥も外聞もない逃亡という望外の事態に、兵をほとんど損じることがなく上洛できたのは誠に幸運でございました。

しかし、承禎の性格に対する信長様の危惧はやはり現実のものとなりました。まさに危機一髪の事態が信長様を待ちかまえていたのでございます。

## 二

年が明けて、永禄十二年一月、三好三人衆が将軍義昭様を京の本圀寺に襲うという事件が起こりました。

信長様はこれを聞くやいなや、大雪の中を大将自ら先頭をきるという、得意の一騎駆けで走り、わずか二日で京に入りました。もっとも賊は既に近隣から駆けつけた諸将によって、蹴散らされておりました。

そこで信長様は義昭様のために御所を造営され、逆賊の手からお守りする手立てを整えました。

付け加えますれば、この年の四月、我らが師パードレ・フロイス様が初めて信長様にお目通りし、布教を許



可されております。

これは余談でございますが、この頃から信長様の胸に一つの決意が芽生えたと推察致します。

これは北陸の朝倉氏の完全討滅でございます。

朝倉氏は、信長様が何よりも嫌っておいでの比叡山延暦寺の僧兵どもとも結び付きがあり、いつかは対決しなければならない強敵でございました。

そして信長様は問題の年、元亀元年四月二十日、ついに朝倉征伐の軍を起されたのでした。

信長様はこのことを友軍の浅井家には知らせずにおかれました。

何故かと申しますと、浅井家と朝倉家は昔から深いつながりがあるため、むしろ知らせずに朝倉を滅ぼしてしまい、事後承諾の形にしてしまえばよい。それなら浅井も納得せざるを得まいとお考えだったのでございます。

ところが、これが見事に裏目に出ました。

朝倉の領国越前を攻めた織田軍の背後を、浅井軍が塞いだのでございます。浅井家では織田家との姻戚関係より、朝倉家との長年の友誼を重んじた結果でした。

これが信長様にとって、どのように危険な事態かおわかりになりますでしょうか？

越前から京へ戻るためには、まず北近江を通るのが順当なところでございますが、この辺一帯を支配する浅井氏がにわかに敵に回ったのでございます。しかも、この浅井に呼応して、もう一人兵を挙げた武将がおりました。

あの六角承禎でございます。

六角は何といっても鎌倉以来の名家、古くからの領主でございましたから、この挙兵に応じる者が少なくありません。近江の有力な地侍や琵琶湖に巣喰う湖賊など比叡山の応援もあって、六角方につきました。

こうなると信長様はまさに袋のねずみといった形でございまして、どうにもならないところに追い詰められた

のでございます。
この窮地は、信長様の配下の切れ者木下藤吉郎殿によって救われました。
木下殿は自ら最も危険な殿軍の将を買って出て、決死の覚悟で巧妙な退却戦を行ない、見事に全軍を返すと共に信長様を無事京へ逃れさせたのでございます。
信長様は越前から、わずかな供廻りを連れて近江の朽木谷という難所を越えて京にたどりつかれました。
しかし、常勝織田軍という美名は、この遠征の失敗によってかなり傷付けられました。
その証拠に、六角氏追放以来、おだやかに治まっていた南近江で一揆が頻発したのでございます。
もちろん、これを陰で煽動しているのは、あの男六角承禎でした。
承禎は正攻法ではかなわぬと見たのか、百姓や郷民を動かし、織田の屋台骨をゆるがすという陰険な手段に出たのでございました。

そのうちに、煽動された一揆勢は織田方の守山城に攻め寄せました。
しかし、この城は織田方の猛将稲葉一鉄殿が守っており、稲葉殿は鎧袖一触、一揆勢をものの見事に退治したのでした。
承禎は重ね重ねの不首尾に腹が煮えくりかえったに違いありません。
怒りに震えた承禎は、ついに最後の手段に踏み切ったのでございます。

## 三

「何、鉄砲の名人がわしを狙っておると申すのか？」
京の宿舎で諜者の報告を受けた信長様は意外そうにおっしゃいました。
「はい、承禎めが大金を投じて傭いいれたそうでございます」



庭で平伏した諜者はそのように言上致しました。
「承禎め、ついにそのような手立てに出たか」
と、信長様はむしろ愉快そうに縁側に座り込むと、
「その者の名は、存じおるか？」
「はい、比叡山の僧兵あがりで、杉谷の善住坊と申す男でございます」
「坊主か――」
信長様は吐き捨てるようにおっしゃると、かたわらに控えていたお気に入りの小姓万見仙千代殿に、
「仙千代、わしの命を狙う坊主がまた一人増えたぞ」
信長様は、口では仏の教えを説きながら陰で悦楽の限りをつくしている坊主どもを、激しく憎んでおられました。
後に比叡山を焼き打ちされたのも、この憎しみからでございましょう。
「殿、御用心なされませ。善住坊とか申す男のことは、わたくしも聞き及んでおります」

仙千代殿が心配そうにおっしゃいました。
「ほう、仙千代も知っておるのか、その男、どんな男だ？」
信長様のお尋ねに仙千代殿は善住坊についての噂を逐一申し上げました。
善住坊は幼い頃から鉄砲に興味を持ち、長年比叡の山で修業を重ねたそうでございます。
飛ぶ鳥を狙っても決して逃すことはなく、天下一の鉄砲名人と自称しておりました。
「二つ玉の善住坊というのが、異名でございます」
「二つ玉？」
信長様はけげんな顔で問い返されました。
「はい、その異名には理由がございます――」
仙千代殿は詳しく説明されました。
善住坊は金で人を射つことを引き受け、それをなりわいにしております。
この男は妙な癖がございました。

とてつもない長い距離、鉄砲玉が届くとは信じられないほど遠くから、目標の人間をただの一発で仕留めます。そして、そのまま逃げればよいものを、その場でただちにもう一発天に向けて放ち『天下一鉄砲名人杉谷善住坊が何某を討ち取った』と大音声で自己の存在を誇示するのでございます。はじめの一発と次の一発、合わせて二発射つことから〝二つ玉〟という名が起ったのでございます。

「そのような馬鹿なことがあるか！」

叱りつけるように信長様はおっしゃいました。

信長様の疑問はもっともでございます。

まず第一に、そのように自分の位置を明らかにしてしまえば、敵につかまる可能性が高くなります。狙撃というものは、あくまで物陰から行ない、成功すれば敵が驚き騒いでいる間に逃げるのが常道です。第二に、続いてもう一発射つということでございます。もう一挺鉄砲があるならともかく、一挺の鉄砲で間を置かずに二発続けて射つというのはかなり難しいことなのでございます。

鉄砲を放つ手順を申し上げましょう。

まず火蓋を開け合薬（焔硝）を銃の中に入れ、銃口からは鉛玉を入れます。そして棚杖という棒を銃口から指し込み玉と火薬を突き固めたうえ、再び火蓋を開いて口薬（点火用の火薬）を入れ、火縄を点じて火縄ばさみにはさみます。そして火蓋を開いたまま引き金を引くと、口薬に点火し弾丸が発射されるという、実に複雑な手順を踏まねばなりません。従って、たとえ名人といえども、続けて何発も放つ必要がある時は、あらかじめ火縄に点火した銃を何挺も置いておき、次々にとりかえて射ったものでした。

一挺の鉄砲で間を置かず、二発の玉を射つということの難しさが、これでおわかりになったかと存じます。

「その善住坊と申す者は、どれぐらい離れた的を射ち抜けるのだ？」



信長様はお尋ねになりました。

「それが――」

仙千代殿が珍しく口ごもりました。

信長様はそういう態度を嫌われます。

ぐずぐずしたことは最も嫌いな方なのです。

「どうした、早く申せ」

「それが、噂では、三百間（約五百四十メートル）とか申します」

「何、三百間だと」

あまりのことに信長様は笑い出しました。

それも無理はございません。

人間業でそんな遠くの的を射ち抜ける筈がないのでございます。

普通の鉄砲で鉛玉を飛ばすと致しましょう。まず余程の名人でも百間（約百八十メートル）先の的を射ち抜けるかどうか、まず無理でございます。三百間先の的など夢物語と申せましょう。ただ玉を届かすというだけなら、望みもございましょうが、正確に的を射ち抜くなど出来る筈もございません。何故なら、遠くに玉を届かすためには大量の火薬を銃に詰めなければなりませんが、火薬の量が増えれば増えるほど発射の時の反動が大きくなり、的に当たりにくくなります。それに三百間も飛ばせば、いかに鉄砲玉とはいえ勢いがなくなり風に流されたり、当初の狙いより沈んだり致します。火薬の量も増やせばいいというものではなく、あまり多いと反動で肩の骨が折れ、下手をすれば銃身が炸裂して命を失うことにもなりかねません。この炸裂を防ぐための〝ネジ〟の仕組みが日本人にはわからず、鉄砲が初めて日本に伝来した種子島の鍛冶は、その仕組みを知るために娘を異国人に差し出したということですが、そのネジの仕組みをもってしても、あまり火薬が多ければ銃身の炸裂を防ぎようはありません。

この火薬の量をどれぐらいにするかを決めるのも、鉄砲の射ち方を習得する際の重要な項目でございます。

信長様が鉄砲の名人であることは、申し上げましたでしょうか？

幼ない頃から大の鉄砲好きであった信長様は、師を求め毎日のように稽古に励まれました。今では鉄砲上手を揃えた織田家の中でも、一、二を争う使い手でございます。

「仙千代、案ずるな。その善住坊とか申す者、おそらく大ボラ吹きのたわけ者であろう。三百間先の的など狙える筈がない」

鉄砲に自信をお持ちの信長様は、はっきりとおっしゃいました。

しかし、その数日後、信長様の心胆を寒からしめるような事件が起こったのでございます。

## 四

それは信長様が帝の御所の修理を監督され、その帰りにある寺で茶の湯を楽しまれた時のことでございました。

座敷の中で行なわれている茶会の周囲は、もちろん家中から選りすぐられた一騎当千の侍の方々で固められておりました。

善住坊が信長様を狙っているということは、既に家中の主だった人間には知らされておりました。

従って警固の方々も、善住坊の気配には充分に注意を払っていた筈でございます。

何事もなく時がたち、ちょうど暮六つの鐘が鳴った時でございました。

ぐわぁーんと、空気を引き裂くような鋭く大きな銃声が庭に轟いたかと思うと、警固の侍の一人村上相兵衛殿が、胸を射ち抜かれて倒れたのでございます。

「曲者だ！」

たちまち大騒ぎになりました。

信長様も座敷から外へ飛び出し、御小姓方が慌てて信

長様の前に人垣を作りました。もちろん狙撃を防ぐためでございます。

「曲者はどうした！」

信長様が御家来衆を怒鳴りつけると、まるでそれに呼応するかのように、もう一発銃声が致しました。

今度は少し離れたところからのようだったので一同がその方向を見ますと、何と塀の外のはるか向うにある裏山の中腹で、こちらに向って手を振っている僧衣の男がおったのでございます。

「ひっ捕えよ、奴こそ、杉谷善住坊に相違なし」

信長様は歯がみして悔やしがり、そのように命じられたのでございますが、善住坊もさる者、馬を用意しておりすぐにその場を去りまんまと逃げおおせたのでございます。

善住坊が鉄砲を放ったと見られる地点、そこから射ち殺された武士の位置まで、確かに三百間あったのでございました。

その位置にある松の木の幹に貼られていた紙、そこに書かれてあった内容ほど信長様を怒らせたものはございません。

それには次のように書かれてあったのでございます。

天下一鉄砲名人　杉谷善住坊見参
遠当　三百間
近日中　御機嫌伺参上仕候

近日中に御機嫌を伺いに参上するとは、人も無げなふるまいではございませんか。

並の武将なら怒りに我を忘れて、敵の思う壺にはまったかもしれません。

しかし、信長様はその紙を怒りにまかせて引き裂いたあとは、信じられないほど冷静な行動をとられました。

まず、あれほどお好きだった鷹狩りや馬責めなどの外出、つまりむざむざと善住坊の的になるような行為はすべて取り止められました。

信長様といえば、常に戦いには先頭に立ち、文字通りの陣頭指揮で織田軍を動かされておりましたが、これも中止されました。

善住坊という化物のような射手がいる限り、どこで狙われるのかわからないのですから、これは当然の措置といえましょうが、それにしても尋常の用心深さではございません。

天下を取る人間には、異常ともいえるほどの強い忍耐力が必要なのでございましょう。

そのうちに、六角勢が勢いを盛り返して参りました。

あの蛇のように執念深い六角承禎が、またも一揆を煽動し、自らも愛智の観音寺城というところに籠ったのでございます。

信長様はただちに軍を派遣し、一揆勢およそ八百を討ち取りましたが、それを煽動した承禎は形勢不利と見るや、あっという間に姿を消してしまったのでございました。

「殿、この機に乗じて一気に決着をつけるべきでございましょう」

そう申し上げたのは、もちろん仙千代殿でございます。

信長様は脇息を枕に、天井を見上げて考えておられましたが、やがてぽつり一言、

「そうはせぬ」

「せぬ――とおっしゃいますのは？」

仙千代殿の問いに、信長様はむっくりと起き上がると、

「承禎の狙いはわかっている。わしを戦さの場に引き出し、善住坊に狙わせるつもりなのだ。考えてもみよ、確かに承禎は近江のどこかに潜んでおるであろう。だが、それを探し出すには、今の兵力では足らぬ。少ない兵力で近江の野に出たら、それこそ承禎の思う壺だ。力を分散させたところで、善住坊が出てくるという算段であろう」

それを聞くと仙千代殿は呆れ顔で、
「善住坊、善住坊とおっしゃいますが、殿はあまりにあの者を恐れ過ぎておられます。海内第一の勇将と恐れられる殿にはふさわしくないお言葉でございます」
と申し上げました。
「違う、それは違うぞ、仙千代」
信長様は心外そうな顔をされました。
「何が――でございます？」
「わしはな、仙千代、臆病者なのだ」
「何をおっしゃいます」
「まことだ。わしは勇将などではない。臆病者だ。臆病者だからこそ、敵の力を正確に知ろうとする。工夫も重ねる。だからこそ戦さにも勝てるのだ」
「わかりませぬ」
当惑した仙千代殿は首を振りました。
信長様は微笑して、
「仙千代、そちは三百間先の的を射ち抜けるか」
「いえ、できませぬ」
「そうであろう。わしにもできぬ。わしの家中にも、それほどの上手はおらぬ。だが善住坊にはそれが出来る。出来る以上、こちらとしてはうかつに手出しはできんのだ」
「では、これから一体どうなさるおつもりで？」
仙千代殿は当然の疑問をお尋ねになりました。
「岐阜へ戻るのだ」
「岐阜へ――でございますか？」
信長様は頷かれると、
「とりあえずは岐阜へ戻り、充分に兵を集めた上で京へ帰る。それが最善の策だ。仙千代、わしも六角を放っておきたくはない。腹は煮えくりかえっておる。しかし、怒りに任せて敵の思い通りにはならぬ」
「わかりました、しかし――」
「わかっておる。帰りの道中が危険であると申すのだろう」



信長様は再び微笑を浮かべると、
「まず善住坊の所在を確かめる。それから軍を動かせば危険はあるまい」
とおっしゃったのでございました。

## 五

それから信長様は諜者を四方に放ち、善住坊の所在を探られたのでございます。
報告が届いたのは三日後のことでございました。
「善住坊は比叡山の僧坊におると？　まちがいないのじゃな？」
信長様は報告をもたらした諜者に念を押されました。
「はい、しかとまちがいございません。この目で確かめてまいりました」
諜者は自信をもって断言致しました。
「殿、いっそのこと人数をさしむけて善住坊を討ち取ってしまえば、よいのではございませんか」
仙千代殿が言いました。
「そうはいかぬ」
信長様は苦々しい表情で、
「今、比叡の僧兵を敵に回すことはできぬ。それに手勢をさし向ければ、善住坊はたちまち気配を察し姿をくらましてしまうに相違ない」
そうおっしゃると、
「仙千代、ただちに出立するぞ」
「どちらへ？」
「日野だ」
「日野？　まさか殿、千草越えを？」
仙千代殿の問いに、信長様は重々しく頷かれました。
本街道を通らずに、岐阜へ戻る道はないというわけではございません。
千草越えとはその一つで、難所が多いのでも有名な間道でございます。

入口は蒲生郡の日野、ここは織田氏に服属を誓い、信長様の娘婿である蒲生忠三郎殿とその父上の領地でございます。日野からは甲津畑へ出て、峻険な小道に入り釈迦ケ岳・御在所岳といった深山を通って、伊勢国へ抜けるのでございますが、よほど足の達者な人間でなければ通れる道ではございません。

「殿、善住坊が比叡の山にいることがわかった以上、本街道を通っても危険はないのではございませんか」

仙千代殿はそう申し上げました。

「いや――」

信長様は首を振って、

「承禎の手の者に不意を襲われたら何とする。近江の国は奴等の庭のようなものだぞ」

とおっしゃいました。

それにしても何という用心深さでございましょう。

信長様の本来の御性格はこういったところにあるのでございます。

その日のうちに信長様は軍勢を率いて日野へ向われました。

そして、善住坊の動静を探りながら、日野城に二日滞在し、善住坊が動かないのを確認してから、いよいよ千草越えにかかったのでございます。

## 六

山道は霧におおわれておりましたが、信長様はむしろこれを喜んでおられました。

山中の霧は着物を湿らせ体を冷やす難儀なものでございます。

あまりに信長様が喜んでおられるので、仙千代殿がその理由を尋ねました。

信長様の答えは明快でございました。

「この方が鉄砲の的になりにくい」

さすがに仙千代殿もこの返答には呆れたようでござい



ます。

善住坊は比叡山にいるのですから、たとえ身をさらしたところで危険はありません。

それなのに信長様は万一の事態を考えておられたのでしょうか。道を進むにつれて、信長様は次第に気難しい表情になられていったのでございます。

「殿、何か御心配なことでも？」

馬を降りて、徒歩で険しい山道を登りながら仙千代殿が尋ねました。

「うむ」

頷かれたものの、信長様はそれ以上何も答えようとはされませんでした。

そのまま黙々と山道をたどられ、御在所岳の登り口にさしかかった時のことでございます。

突然、信長様は気が狂ったように笑い出されたのです。

おかしくておかしくてたまらぬように、それこそ腹を抱えて大声でお笑いになったのでございます。

御供の方々は皆呆気にとられ、大笑いを続ける信長様を見つめておられましたが、理由を尋ねたのはやはり仙千代殿でした。

「殿、一体どうなされたのです？　何がおかしくて、そのようにお笑いになるのです？」

信長様はそれを聞いても、なお笑いがとまらず、

「ははは、許せ、仙千代。どうにも笑いが止らぬ。この信長が、ものの見事にいっぱい食わされたわ。それがおかしくて、先程から笑っておるのだ」

と苦しそうに腹をおさえて、おっしゃいました。

「殿をたばかるとは、一体何のことでございます？」

何が何だかさっぱりわからず仙千代殿が尋ねますと、信長様はなおもおかしそうに笑い続けて、

「仙千代、わからぬか。わからぬなら、これから面白い見せ物を見せてとらそう」

そうおっしゃいました。

そして、まったく奇妙なことをお命じになったのでございます。

手近の草や木の枝をまとめ人形を作らせ、手早く物陰で着物をお脱ぎになりました。そして、その着物を草の人形に着せて馬に乗せたのでございます。人形は笠をかぶせ縄で鞍に結びつけられ、少し離れるとまるで信長様が馬に乗っているように見えたのでございます。

「これは囮でございますか？」

仙千代殿の問いに、信長様はにやにや笑いながら頷かれました。

「しかし、善住坊は比叡に居るのでございましょう。第一この霧では……」

仙千代殿はそう申し上げました。

確かに山中の霧はますます濃くなり雨に変っておりました。たとえ善住坊がいたとしても、遠くから狙うことは不可能でございます。

「殿、いったい？」

「よいのだ。このまま進め」

そういう信長様は小者の小袖を身に付け、到底身分ある御方とは見えません。

そのまま人形を乗せた馬は、山道を進みました。

しばらくは何事もございませんでした。

殿が人形とすり替ったことは、近習の方々だけが見ていることで、他の御家来衆は気付いておりません。

そのうち、一行は峠を一つ越え、ほっと一息ついたところ——。

ぐわあんという大きな銃声と共に、人形が吹き飛ばされたのでございます。

曲者は、谷を挟んだ反対側の山から狙い射ったのでございますが、その距離はわずか十間（約十八メートル）しか離れておりませんでした。

これなら霧の中でも狙いがつくわけでございます。

「騒ぐな、わしは無事だ」

信長様は曲者の後を追おうとする御家来衆を押しとどめて、

「天下に号令せんとする者に、下郎の鉄砲玉など当たらぬ。捨ておけ」

と、お命じになったのでございます。

「わかりませぬ。仙千代にはさっぱりわかりませぬ」

騒動が収まると、仙千代殿は信長様に言いました。

「わからぬか、——あの食わせ者ども。この信長ですら、いっぱい食わされるところであったわ」

信長様は苦笑されました。

「殿、お教え下さい。善住坊は比叡山にいるのではなかったのですか？」

「いや、今わしを狙い射った男こそ、本物の善住坊だ」

「では、比叡にいるというのは贋者でございますか」

仙千代殿は腹をたてました。

それではあの諜者たちの報告は、すべて出鱈目であったことになるのですから無理もございません。

「まあ待て、あの者共が善住坊は比叡にいると見たのは無理もないのだ。仙千代、よく考えるのだ。本当に三百間先もの的を正確に射ち抜くことが人間業で出来るかどうか？」

「しかし、出来たではございませんか」

仙千代殿は珍しく口をとがらせました。

「そうではないのだ。あれはからくりであった。そんなことが出来る者などいる筈もないのに、見事だまされたわ」

「……？」

「仙千代、善住坊はな、二人おるのだ」

「二人？」

「そうだ。いや正しくは表の善住坊、裏の善住坊というべきかもしれぬ。表は鉄砲を使い、おそらく裏は短筒を使うのであろう」

仙千代殿はただ信長様の説明に聞き入るばかりでございました。

「京でのからくりは、こういうことだ。まず表の善住坊

が三百間離れたところで銃をかまえる。そしてそれに敵の目を引きつけておいて裏の善住坊が短筒を持って狙う相手に近寄るのだ。そして同時に射つ、射ったら裏は姿を隠し、表はもう一発射つことにより自分の存在を誇示する。そして堂々と逃げるのだ。当然、追手は表の方にかかる。だが表は遠く離れたところにおる。従って逃げやすい。だが本当に相手を射ったのは裏の方なのだ」

おわかりでございましょうか。

表の善住坊は顔をさらし、相手に自分の姿を充分に見せつける——織田方の諜者が追っていたのは、当然こちらの方でございます。

僧衣をまとった鉄砲の名人杉谷善住坊——それはあくまで敵の目をごまかすためのもので、本当の善住坊は顔も知られず、得意の短筒を持って自由に動いていたのでございます。

「おそらく、あの時、本物は屋敷の中にいたのだ。そして、今日のようにはずしようのないところから村上を射ち、表の善住坊に追手がかかったあとに、悠々と逃げ出したに相違あるまい。憎い奴じゃ」

「しかし、殿、二人の射手は互いに相当離れております。下手をすると銃声が二発聞こえることにはなりませぬか？」

「それはな、何かの合図を決めて呼吸を合わせればよいのだ。あの日は暮六つの鐘を使ったのであろう」

鐘の音の鳴り具合に合わせて引き金を引くというわけでございます。

「善住坊め、おそらく承禎の知恵であろうが、とんでもない罠を仕掛けたものだ」

「——と申されますと？」

「この千草越えを通ったことよ。仙千代、考えても見よ。善住坊が人間業を越えた射手であると考えたからこそ、わしはこの道を通ることを決めた。だが、それは当初からの承禎らのもくろみであったのだ」

信長様は顔にかかる霧のような雨を拭うと、



「巧妙な罠だ。わしは善住坊が遠くから狙うだろうと、そればかり考えていた。だから、この道を選んだ。この道なら遠くから狙いをつけることは難しい。霧も木も多く、見通しをつけにくいところじゃからな。ところがよくよく考えてみれば、近くから狙う方が狙いやすいに決っておる。山道を歩きながら、ようやくおのれの馬鹿さ加減に気がついたのだ」

「それで、大声で笑われたのでございますね」

「その通りだ。承禎の策略に引っかかるところであったわ」

と信長様は破顔一笑して、

「そこまでわかれば、あとは簡単だ。承禎があえて表の善住坊と裏の善住坊を分け、このわしを千草越えまでおびき寄せたということもわかった」

「それにしても、よくお気付きになられました」

信長様は大きく頷かれると、

「まったくだ。あと半刻でも気付くのが遅れたら、わしは今頃冷たいむくろとなっていたかもしれぬ」

「仰せの通りでございますなあ」

「これで、奴の異名の理由もわかった」

「二つ玉とは、このことだったのでございますか——」

仙千代殿は感心したように言いました。

このののち、信長様は無事に岐阜に帰城し、わずか一月のちには浅井・朝倉連合軍を近江姉川の地に破ったことは申すまでもございません。

# 六点鐘は二度鳴る

# 一

これは、わたくしが信長様の御側衆森蘭丸殿より伺った話でございます。

主イエス・キリストの生誕より千五百七十六年目（天正四年）のこと、信長様は琵琶湖の東にある安土の地に美しい城をお築きになったばかりでした。その頃はまだ城下町も整っておらず、もちろんわたくしどもの教会も建ってはおりませんでした。

わたくしは当時京におり、司祭ルイス・フロイス様や同じく司祭のオルガンティーノ様と共に、老朽化した都の教会を新築する仕事に奔走しておりました。都の教会は十七年前、ガスパール・ヴィレラ司祭がお建てになり、戦乱にも巻き込まれず無事に時を過ごして参ったのでございますが、何分にも狭く汚れが目立つようになり、フロイス様、オルガンティーノ様、それに豊後の国におられた司祭フランシスコ・カブラル様などが御相談の上、マリア様にささげる教会を新しく作ろうということになったのです。そのため一応信長様の許可を得た方がよろしかろうと、わたくしの先輩にあたる日本人修道士コスメ殿が都から十四レーグア（里）離れた安土城へ、使者として派遣されたのでした。

コスメ殿は下京の柳原町の出身で、その父は熱心な法華宗徒でございました。しかし、コスメ殿は子供の頃より家の近くにあった教会へ出入りし、キリシタンになりたいと願い、ついに十七歳の時、ヴィレラ師によって洗礼を授けられたのです。若く、涼やかで、信仰一筋の頼もしいお方でございます。

安土に到着したコスメ殿は、まず信長様に拝謁を願い出ました。

当時の信長様は、四方に敵を持ち、まだまだ天下を平定したとはいえない状況でございました。とりわけ信長様が手を焼いておられたのは、西国の雄毛利家と大坂に

本拠をかまえる本願寺でございましたでしょう。中でも本願寺の率いる門徒と申す信者の一団は、死を恐れず利につられず、信長様を法敵とみなし、妥協の余地のない戦いを挑んできておりました。門徒どもはナムアミダブツ、ナムアミダブツと呪文のごとく彼等の神の名を呼び、微笑を浮かべ死地におもむいてくるのでございますから、さすがの信長様も何度も煮湯を飲まされ、御一門の弟君や大切な御家来衆が伊勢や越前で門徒に討取られております。

コスメ殿が安土に着いた時も、信長様は石山の近くの天王寺まで御出陣され本願寺の周囲を軍勢で取り囲むようお命じになった上、帰られたばかりでございました。

信長様はお疲れにもかかわらず、コスメ殿に拝謁をお許しになられました。御信徒ではございませんが、信長様はいたくキリシタンがお気に入りのようで、この日も気軽にコスメ殿にお声をかけられました。

「パードレどもは変りないか？」

まず信長様は、京の都のフロイス様やオルガンティーノ様のことをお尋ねになりました。

「はい、殿によろしくと申しておりました」

とコスメ殿は深々と頭を下げ、両師から預ってきた進物を差し出しました。

進物はイスパニア製の置時計でございました。

それを見た信長様は子供のように目を輝やかし、手に取って御覧になりました。

その時計は真鍮で作られた小型の枕時計で、正面の文字盤には〝Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅲ〟とローマ数字で時刻が刻まれております。

「これは、どのように使うのか？」

信長様の問いに、コスメ殿は枕時計の側面にあるゼンマイを蝶形の金具を使って巻いてみせました。そして長針と短針に指をかけて、御側衆に向って時刻を尋ねられました。

ちょうど控えておられた森蘭丸殿が、



「酉の刻ほどであろう」

とお答えになりました。

それを聞いたコスメ殿は、長針と短針を午後六時の位置に合わせました。

「イルマン、それはどう読むのだ？」

再び信長様がお尋ねになりました。

「――六点鐘とでも申しましょうか」

とコスメ殿が言いかけた時、時計がチンチンと軽ろやかな音を六つ響かせたのでございます。

「ほう、六つ鳴るから六点鐘か、わかりやすいのう」

信長様が感歎の声をあげられました。

そこをすかさずコスメ殿は、昼夜をそれぞれ十二等分し、一点鐘（一時）から十二点鐘（十二時）まである西洋の時刻の数え方を説明しました。信長様はそのような西洋の新知識がことのほかお気に入りでございましたし、コスメ殿は時刻の日本式の数え方はあまりにも理に叶っておらぬと不満に思っておられ、この際信長様に西洋式時法を採用して頂こうという御気持があったのでございましょう。

信長様はなにしろ理に叶ったことほどお好きなものはないというお方でございますから。

「一日を十二等分するなら、同じことではないか？」

一通りコスメ殿の説明をお聞きになった信長様は、疑問の点をお尋ねになりました。

「いえ、まったく違いまする」

とコスメ殿は首をふり、日本の時法の不合理さを例を挙げて訴えたのでした。

本邦の時刻の数え方は、西洋で言う夜中の十二時を子の刻とし、以下二時間ごとに十二支をあてはめ、丑、寅、卯、辰――の刻と呼んでいくことは御存知の通りでございます。例えば真昼の十二時は午の刻、日没の頃午後六時は酉の刻となります。この二時間を一時、それを四等分したものを一刻と呼び、これが時刻という言葉の始まりであるそうでございます。

ところが、この言い方は少し不正確なところがございます。それは、子の刻と申しましても正確に夜中の十二時を指すのではなく、むしろ二時間の幅で午後十一時から午前一時を指すと考えた方がよいのでございまして、例えば午の刻も午前十一時から午後一時までの二時間の間を表わす言葉として考えた方が正確なのでございます。

従って子の刻に寝たというだけでは、午後十一時頃なのか、十二時なのか、午前一時なのか、はっきりしないということになるわけでございます。

しかも厄介なことは、夏と冬で一刻の長さが違うことでございまして、昼と夜でも違うのでございます。

これは何故かと申しますと、日本の時法は、実は一日を十二等分しているのではなく、日の出と日没を分岐点と致しまして、昼と夜とをそれぞれ六等分しているのでございまして、当然季節によって時間の長さが違ってくるのでございます。日の長い夏は昼の一時が長く、逆に冬は夜の一時が長いということになるのでございます。つまり、西洋の時刻と日本の時刻がほぼ一致するのは年二回、昼と夜の長さが同じになる春分と秋分の日をおいて他にありません。

もし、時刻を作事や勤務の基準とするなら、これほど不合理な時法はないわけで、同じ一時の仕事でも季節によって昼夜によって中味が増えたり減ったりすることになるのでございます。

以上のような欠点をコスメ修道士が指摘しますと、信長様も深く頷かれました。

「しかし、イルマン殿、本邦の数え方ではいつも日の沈む時が酉の刻になるが、南蛮の時法では季節によって変ってしまうではないか？」

こうおっしゃられたのは森蘭丸殿でした。

「それだからこそ、日の長さが変ってきたことがわかるのではございませんか」

とコスメ殿は微笑を浮かべて説明を続けました。



西洋の時法では、季節によって日の出、日の入りの時刻が異って参ります。だからこそ、夏になって日が長くなってきたとか、冬になって夜が長くなってきたとか、実感としてわかるのでございまして、いつも日没の時刻を酉の刻と決めてしまっては、そうは参りません。

「わかった。南蛮の時の方が理に叶っておるようだ」

と信長様はじっと枕時計の文字盤を見つめながらおっしゃいました。

「仰せの通りでございます」

コスメ殿は軽く一礼なさいました。

「して、細かい時刻の分け方は？」

信長様がお尋ねになると、コスメ殿は一時間は六十分に分けられることを御説明申し上げました。

実は日本にも、一時（およそ二時間——ただし季節によって伸縮する）を細かくする方法はあるのでございます。

一つは、子の上刻、辰の下刻——というような言い方で、一時を上・中・下に三等分する方法。

もう一つは〝数呼び〟と申しますか、これがかなりわかりにくうございます。

まず子の刻を〝九つ〟とし、以下、丑・寅・卯・辰・巳までを、それぞれ〝八つ、七つ、六つ、五つ、四つ〟と致します。そして、ここで午の刻になると、また〝九つ〟に戻り、以下、未・申・酉・戌・亥を、それぞれ〝八つ、七つ、六つ、五つ、四つ〟と名付けるのでございます。朝夕それぞれに同じ数がありますので、特に日没の酉の刻を〝暮六つ〟日の出の卯の刻を〝明六つ〟と申すのが習わしとなっているようでございます。これは宮中でも使われていた古来からの時法で、太鼓や鐘をその数だけ打ち、宮中や大寺では時刻を知らせたようでございます。

何故、〝四つ〟の次が〝九つ〟になるのか——それはさらに時刻を細かく分ける際に〝三、二、一〟の数を使うからでございまして、一時を四つに分けて〝丑三

とおっしゃり、コスメ殿は大任を果たされたのでございます。

その時でございます。

謁見の間にいる人々の耳に、重々しい梵鐘（ぼんしょう）の音が聞こえて参りました。

信長様はその音に興味を示され、上座を降りて障子をからりと開け放たれました。

安土城の西に広がる小湖〝西の湖（にし）〟の先に琵琶湖が広がり、何艘もの舟が帆をはためかせ、夕日が赤く湖面に輝いておりました。

鐘の音は、その湖の方から響いて参ります。

「長命寺か――」

と信長様は一言おもらしになりました。

城下に入る入江の出口のところに、琵琶湖に面した小高い山がございます。その中腹に西国三十三ヵ所の観音霊場の三十一番目の札所である姨綺耶山（いきやさん）長命寺があり、鐘の音はその鐘楼から流れていたのでございました。



つ〟とか〝子二つ〟とかいう言い方をするのでございます。この場合〝一つ〟が西洋の三十分にあたり〝丑三つ〟ならば、〝午前二時三十分〟にあたるわけでございます。もちろん季節による誤差は常にございます。

いずれにせよ〝四つ〟のあとに〝九つ〟がきたり、〝丑三つ〟などわかりにくい表現をしたり、不合理なことが多過ぎます。コスメ殿は信長様の前で、その点を強調なさいました。

「教会では、南蛮時刻に合わせて鐘を鳴らします。いずれ安土にも土地をたまわりますようお願い致したいと存じますが、とりあえず、京の都に教会を作り、京の町衆に正確な時を知らせ、我らが天主（デウス）の教えを広めていく存念でございます。何卒、教会の新築の件、お許し下さいますよう」

コスメ殿がそう言って平伏しますと、信長様は上機嫌で、

「よかろう、許すぞ」

鐘の音は全部で六つ、暮六つの鐘でございましょうか。夕照の湖の上をわたってくる鐘の音は城からの絶景に花を添え、修道士コスメ殿もそれが異教の業であることをしばし忘れ聞き惚れていたと申します。

## 二

それから三日後のことでございました。

信長様の御家来衆のうち尾張以来の重臣で、当面の最大の敵本願寺の攻囲戦の指揮者でもある佐久間信盛殿が、安土城へやって参りました。

信長様は早速佐久間殿を召して、蘭丸殿以外は人払いをされ、密談に入られました。

「どうじゃ、右衛門、うまくいったか？」

「はっ、首尾は上々かと存じます」

既に髪の半分が白くなった右衛門尉信盛殿はにやりと笑ってお答えになりました。

信長様はそれを聞くと何度も頷かれ、深い溜息を漏らされました。

「これで、ようやく坊主どもを追っ払うことができるのう」

信長様はその時ある秘策を練っておいでした。そのための手足となって佐久間殿は動いていたのでございます。

その秘策とは、難敵石山本願寺との戦いに決着をつけるものでした。

さすがの信長様も死をも恐れぬ本願寺門徒との戦いには疲れ果てておいでした。そして力攻めをあきらめ、調略の一手をとられたのでございます。

それは、京の天子を動かし、勅語を以って石山本願寺の明け渡しを命じることでした。

生ぬるい——とおっしゃる方もおられるかもしれません。

確かに、かつて悪僧どもを退治するため日本国の仏法



の中心ともいうべき比叡山延暦寺を焼き打ちし、全山皆殺しの挙に出られた信長様です。石山の明け渡しだけで、本願寺の宗主顕如や門徒共を許そうというのは、あまりにも手ぬるい措置と思われるかもしれません。

しかし、それほど門徒の力は強いのでした。もしも宗主を殺し、全門徒皆殺しにしようとすれば、戦火は日本国中に広がり、天下平定などは夢のまた夢となってしまう恐れがございました。

そこで信長様は、要害の地石山を明け渡せば、これまでの罪は一切不問にふすという条件で、朝廷を仲立ちとした講和作戦を進めておられたのでした。

一方、本願寺の中にも、時代の行末を見通し、織田家とはよしみを通じておきたいと考える者もおりました。その者の名は下間治重と申し、本願寺の家老を勤める下間一族の有力者でございます。

佐久間殿が信長様の命を受け、秘かに進めてきた講和工作とは、この治重に本願寺宗主顕如上人を説得させ、難攻不落の城塞石山本願寺を無血開城させるという段取りでございました。

「近衛卿とのつなぎもよいな？」

と信長様は佐久間殿に念を押されました。

「はい、ぬかりはございません」

佐久間殿はかしこまってお答えになりました。

朝廷の勅諚を以って開城させようというのですから、関白家にも色々と根回しが必要でございました。

佐久間殿はここしばらくその任にあたられ、いよいよ計画は最後の段階まで来たのでございました。

「殿、そこで治重に渡す誓紙の件でございますが——」

と佐久間殿が切り出しますと、信長様は、

「わかっておる。お蘭、誓紙をこれへ」

と傍らの蘭丸殿に手文庫を持ってこさせました。

手文庫の中から取り出された書状には〝条々〟として、本願寺の明け渡し、宗主の赦免など講和条件が書き連ねられ、信長様御愛用の〝天下布武〟の朱印が押され

ておりました。そして、その後に八幡大菩薩、春日大明神など日本国中の大小神祇に対し、条々に違うことあらば御罰を蒙るべし――と型通りの誓いの言葉と共に花押、血判がしるされてあったのでございます。

「確かに」

と佐久間殿が誓紙を押し頂くと、信長様はふと表情をゆるめられ、

「どうじゃ、その治重なる者、金で転ぶか？」

とお尋ねになりました。

佐久間殿は首を振られて、

「どうやら一徹の頑固者にて、難かしゅうございますな」

とお答えになりました。

下間治重は無類の忠義者で、今回織田側の講和工作に協力しているのも、それが究極には本願寺の安泰につながると信じているためだ――佐久間殿はそのように理解されておりました。

それゆえに、その頑固一徹の治重を納得させるためには、信長様御直筆の宗主の生命と教団の維持を保証する誓紙が必要だったのでございます。佐久間殿はその誓紙を持って、これまで直接会うことはなかった治重と初めて会見する段取りでございました。

「場所は？」

「京の四条寺町近くの目立たぬ古寺にて」

「時は？」

「十日のち、酉の刻を予定しております」

信長様はそれを聞くと、待ち切れぬといった御様子で、

「いま少し早まらぬか？」

「無理でございます。何分、人目を忍び、内密のうちにことを運びませんことには」

佐久間殿は重々しい声でお答えになりました。

「やむを得ぬ。――治重に伝えい、この信長、天地神明に誓って約定は違えぬ、とな」



信長様の御言葉に佐久間殿は表情を引き締めて退出されていきました。

ふと信長様は蘭丸殿に視線を向けられ、

「お蘭、いま笑ったであろう」

となじるような口調で決めつけられました。

「笑いませぬ」

と蘭丸殿は慌てて否定なさいました。

「嘘を申せ。何がおかしかったのだ？」

「――殿が天地神明などと仰せられるとは思いませなんだ」

と蘭丸殿があっさりと白状されると、信長様は大声で笑い、

「そのことか、――嘘も方便と申すではないか、だが、蘭丸、わしは本願寺をつぶす気はない」

「何故でございます」

蘭丸殿は不思議そうに言われました。本願寺には、さきほども申し上げました通り、信長様の御縁者も多数討ち取られているのでございます。

「牙を抜けばよいのだ。金や石の塊を礼拝しようと、それはそれでよい。戦いを止め、矛を収めさえすればな」

そうおっしゃる信長様には、珍しくもどこか肩の荷をおろしたような御様子が見て取れたと申します。

## 三

佐久間殿と治重の会見はそれから十日後、京の四条寺町の或る寺――一向宗ではございません――で予定通り行なわれることになりました。

ことは厳しい秘密のうちに運ばれ、佐久間殿は僅かな供回りを連れ、数日間続いていたしのつく雨の中を約束の寺に向われたのでございます。

佐久間殿の御一行はあくまで目立たぬよう目立たぬようにと、武具馬具等も質素なものを用い紋所も替紋（略式の紋）でございました。

前日までに幾らかの手勢を引き連れ京に入られ、当日衣服を改められた上で、出発なされたのは申の下刻（午後五時頃）でございました。

宿舎の御屋敷から会談場所の古寺まで、およそ半時（一時間）の道のりでございます。

ところが、こういう秘密の会談では早く着きすぎても遅くても困るということで、治重からの要請もあり、佐久間殿御一行がゆっくりと駒をすすめられていますと、空也堂の近くで突然、暮六つの鐘が鳴り始めたのでございます。

「なんじゃ、もう六つ時か？」

佐久間殿は御家来衆をふり返りました。

御不審はごもっともでございました。

一行が宿舎の東福寺近くを出発したのはつい先程でございます。本願寺門徒の目をさけるため回り道をしたとは申せ、まだ四半時（三十分）もたっていないのではありますまいか。

あいにくの雨のため、その日は昼間から薄暗く、町中のことでございますから、日没を確かめるわけにはいかなかったのでございまして、

「止むを得ぬ、急ぐぞ」

と佐久間殿は馬に一むち当て、御家来衆と共に会談場所の寺に急行されました。

佐久間殿はこの時、不吉な予感がされたと後ほど述懐されておられたという話で、やはりその予感は正しかったようでございます。

一行が四半時ほどかかってその寺に着きますと、山門のところで一人の僧が朱に染って倒れておりました。

慌てて皆様方がさして広くもない寺の本堂に入りますと、これまた何人もの死体が転がっており、全山（と申してもせいぜい十余人でございますが）皆殺しの有様なのでございます。

「治重殿は、治重殿を探せ！」

一同血眼になって下間治重を探し求めました。



治重はすぐに見つかりました。

本堂裏の竹やぶの中に倒れていたのでございます。

背後から袈裟がけに一太刀あびせられており、俯せに倒れてはおりましたが、まだ意識があり、佐久間殿が抱き起こされると、うっすらと眼を開かれたのでございます。

「しっかりなされい、治重殿、佐久間信盛でござる」

「さ、く、ま――殿か？」

治重は幾重にも皺を刻んだ顔を蒼白にしており、もはや意識はほとんどないようでございました。

「誰がこのようなことを？」

佐久間殿の問いに治重は、

「竹に雀が――」

それだけ辛うじて話しただけで、がっくりと事切れたのでございます。

茫然として治重の死体を見おろす佐久間殿一行の耳に、我々キリシタンの信仰の中心である京の教会の鐘の音が聞こえてまいりました。

鐘の数は午後六時でしたので、六つでございました。

佐久間殿はただちに下手人の探索を命じました。

ふと佐久間殿が視線を地面の方に向けられますと、血を流した凄惨な死体とは何の関係もないように、雀が二、三羽、雨あがりの竹やぶに出てきていたと申します。

## 四

「たわけ者！」

報告を聞いて信長様は佐久間殿を一喝なさいました。

佐久間殿は平蜘蛛のように這いつくばって、くどくどと詫びられました。

額に青筋をたててお怒りになる信長様ほど恐しいものはこの世にございません。

佐久間殿の弁解も信長様の耳には入らぬ御様子でし

た。
「もうよい。下れ」
そうおっしゃって、信長様は佐久間殿を犬でも追い払うように退出させて、じっと脇息にもたれて考え込まれたのでございます。
ややあって信長様は脇に控えている蘭丸殿に向って、
「お蘭、この一件の下手人がわかるか？」
と尋ねられました。
「まるで見当がつきませぬ」
蘭丸殿は首を振られました。
信長様は微笑を浮かべ、
「何事も順序立てて考えればよい。鍵になるのは治重の最期の言葉だ」
「最期の？　あの〝竹に雀が――〟とか申したということでございますか？」
「そうだ。――お蘭、これをなんと見る？」
信長様の問いに、蘭丸殿は首を傾げ、しばらく考え込んでいましたが、
「辞世ではございませぬか？」
と信長様に逆に尋ねました。
つまり、人生の最期にあたり和歌を詠もうとしたのではないかという推量でございます。
信長様は破顔されて、
「違うな。そのようにまわりくどいことはせぬ」
「まわりくどい？」
「信盛は誰に討たれたと問うたのだぞ、それに答えるのが当然ではないか」
「……」
蘭丸殿は再び首を傾げて、
「されど、殿。〝竹に雀が〟とはいかなる意味でございますか？　人の名ではありませぬし……」
「そこじゃ、お蘭」
と信長様は表情をひきしめられ、
「順序立てて考えよと申したのはそこだ。よいか、まず、言葉の謎を解くには、誰が、どのようにして治重を討ち果したか考えてみるのじゃ」
とおっしゃいました。
「こたびのこと、治重にとっては一族の者に裏切りにとられる恐れもある。本願寺の門徒共の中には、あくまでこの信長と雌雄を決せんと考えおる者もおろう。治重はそのような者から命を狙われるかもしれぬと用心しておったに相違ない」
信長様の言葉に蘭丸殿は頷かれました。
「そして、そのような者にとっては、信盛との会見はなんとしてでも阻止せねばならぬ。だが、あの日、あの寺まで門徒どもは何の手も打たなかった。何故だ？」
「――それは治重が用心していたからでございましょう」
「では、当日、何故討つことができたのだ？」
「それは門徒共が治重の動静を知り――」
「あらかじめ動静を知っておったのなら、京ではなく石山で討ち取ればよいではないか」
確かにその方が容易でございます、本願寺の聖地大谷本廟があるとは申せ京は信長様の制圧下にあり、逆に石山なら本願寺の金城湯池でございますから。
信長様は言葉を続け、
「お蘭。治重の為さんとしていた事は、本願寺には悟られてはおらなんだのだ。だからこそ治重は石山では無事で、京まで来ることができた……」
「殿、それはおかしゅうございます。殿は先程本願寺の中に治重の命を狙っておる者がおるとおっしゃいました」
と蘭丸殿がなじるような口調でおっしゃいますと、
「これは許せ」
と信長様は苦笑され、
「確かに本願寺の中にはおらぬ。それならば石山で討ち取る筈だからのう。だが、本願寺の外に、本願寺に心を寄せる者がおったのだ」

「すると、間者……」
さすがに蘭丸殿は頭の働きが早うございます。即座に信長様の言わんとすることを理解されました。
「その通りじゃ。我が家中に門徒の間者がおり、会談のことを知って、これを阻止せんと治重暗殺の挙に出たのだ」
信長様は明言なさいました。そして、にやりと笑って、
「お蘭、おかしいとは思わぬか？」
「何を、でございます？」
「いかに治重とて用心はしていた筈。人目に立たぬ古寺を指定したのも治重じゃ。だが、やすやすと賊の侵入を許し、従者もろとも斬られた。治重の従者は一人も相手方を討ち取っておらぬというではないか。何故そこまで心を許したのだ？」
「わかりませぬ」
「たやすいことではないか。信盛の一行に化けたのだ」
信長様の言葉に、蘭丸殿は思わず声を上げられました。
「信盛と治重は初対面だ。互いに顔を知らぬ。おそらく、信盛の一行に化けていった間者の顔も治重は知らなかったのであろう。だからこそ治重は、それを信盛一行と勘違いしたのだ」
「殿、それはいささか一人合点ではございませぬか。治重は本願寺の重鎮、間者の顔を知らぬというのは」
と蘭丸殿が異議を唱えられますと、
「もし、顔見知りならば、信盛が下手人の名を問うた時、それを言う筈ではないか。それに――わからぬか、お蘭。下手人は治重に一太刀あびせただけで、とどめを刺さなかったというではないか。おっつけ信盛どもが到着するのを知りながら、とどめを刺さなかったのは、息があっても己の名を告げられる恐れがなかったからじゃ。下手人は治重と知っていたが、治重は下手人を知らなかったということであろう」



「では、殿。あの治重の最期の言葉は何を意味するのでございます？」
蘭丸殿が尋ねられました。
「ふふ、お蘭、それはな――」
と信長様は悪戯小僧のような笑いを口元に浮べられて、
「治重は下手人の名を知らなんだ。そこで、手がかりを残したのだ。その間者は、おそらく徒党を組んで信盛一行に化けていたのであろうが、装束はそれなりのものであったろう。信盛が目立たぬ装束で来ることはわかっておった。紋所まで信盛と同じものを揃える必要はあるまい。だが、紋服は着ておった筈、さすれば――」
ようやく蘭丸殿にも事の次第が飲みこめました。
下手人どもは佐久間殿一行に化けたのですから、武士としての格式にたがわぬ服装をしていた筈。しかし、このような秘密の任務の場合、佐久間殿が正規の紋所を使うわけがございません。従って贋者は紋の相違には気を使わず、自前の紋服を使用したに相違ありません。それを治重は言い残されたのでございましょう。
〝竹に雀〟というのは、よくある紋であることは御存知の通りでございます。

## 五

それから信長様の下手人探しが始まったのでございます。
信長様は蘭丸殿にお命じになり、御家中で今度の秘密を探りだせたかもしれない者達で〝竹に雀〟の紋所を持つ人々を、片っ端からお調べになりました。
一口に〝竹に雀〟紋と申しましても、〝竹に一羽雀〟同じく〝二羽飛雀〟〝竹に宿雀〟〝丸竹笹に対雀〟〝ふくら雀〟など各種あり、相当手間取ったのでございますが、ついにそれと覚しき人物を探しあてたのでございます。それは佐久間信盛殿の御家臣で、池尻隼人と申す馬廻の

士でございました。
信長様は池尻を直々に取り調べることに意を決し、五月のある暑い朝、安土のお城に佐久間殿ともども池尻を呼び寄せられたのでございます。
池尻は額の広さのわりには目が細く、茫洋とした顔付きで信長様の前に現われました。
「池尻隼人か、その方――」
信長様はじろりと睨み付けられ、
「下間治重を京において殺害致したであろう」
と大音声で決めつけられました。
「滅相もない」
と池尻は顔色一つ変えずに返答しました。
「――身に覚えのないことでございます。何故拙者が治重殿を？」
「その方が本願寺の間者だからよ」
信長様の言葉に、池尻は大きく首を振り、
「とんでもございません。天地神明に誓ってもよろしゅうございますが、拙者、本願寺とは何の縁もございません。何を証拠に上様はそのようなことを仰せられますか」
と問い返しました。
「では、尋ねるが、そちは治重が殺された日の酉の刻、どこにおったと申すのだ？」
信長様は皮肉に満ちた口調で御下問されました。
「――はて、酉の刻でございましたら」
と池尻はしばらく思案のていでございましたが、
「当日は非番ゆえ、大津三井寺近くの旧知の寺を訪ねておりました。――おお、住職の円照殿にお聞きになれば、はっきり致します。円照殿とわたくしは三井寺の暮六つの鐘を聞いたのでございますから――」
と晴れ晴れとした顔で答えました。
それを聞くと、信長様は苦虫を噛みつぶしたような表情をされ、
「もうよい、下って休め」
と一言、池尻に城下の佐久間殿の御屋敷で別命あるまで待機するようにお命じになったのでございます。



## 六

信長様はまず人をやって、池尻の申し条が事実かどうかを確かめさせました。
その結果、信長様の予想とは裏腹に、池尻の申したことは確かだという多くの証言が得られたのです。
大津宿のはずれで三井寺よりにある浄願寺という寺の住職円照は、次のように証言致しました。
「当日は、以前から隼人様が暮六つにお見えになるという知らせを頂いており、お待ち申しておりましたが、三井寺の暮の鐘が鳴り終り、しばらく後に馬でお見えになりました。まちがいございません。隼人様とは碁仇でございましてな、あの日もそれから五、六番打ちましたでしょうかな。――とにかく、暮六つごろにお見えになったのはまちがいございません。村の衆が寄合の相談に居合わせておりますので、そちらに聞いていただいてもよろしゅうございます」
さらに、村の衆とやらに尋ねた結果も同じでした。
報告を受けた信長様は、ますます渋い表情になられました。
「今度ばかりは、殿の見当違いでございましたな」
蘭丸殿がからかわれると、信長様は憤然として、
「遠乗りに出る」
とおおせられました。
「急に、どちらへ？」
蘭丸殿が驚いて尋ねられますと、
「知れたこと、その寺に行ってみるのよ」
信長様はさっさと仕度を始められました。

## 七

近江は湖の国でございます。

とりわけ安土あたりの水郷の春色の見事さと、京へ向う途中の大津、瀬田あたりから眺める夕照の美しさはたとえようもございません。

湖と瀬田川の水面を落日が黄金色に染めていき、その上を名刹三井寺からの梵鐘の音が渡っていくさまは、古人も〝近江八景〟として讃えたものでした。

信長様は昼過ぎに安土を出られ、御自慢の葦毛の駿馬にまたがって一気に大津まで走られました。安土―大津間はおよそ八レーグア（里）の道のりでございます。

信長様の疾駆を遮る者などあろう筈がございません。お供の方と共に街道を矢のように通り過ぎ琵琶湖を見渡す問題の古寺に着かれた信長様は、早速に円照を呼び出して御下問になりました。

「円照、わしの使の者に申したことに偽りはないな？」

「ございません」

円照は落ち着きはらった態度で答えました。

信長様は矢継ぎ早に質問を続けられましたが、円照は動ずる気配もございません。

「ふーむ」

と、さすがの信長様も首を傾げられました。

ここから京の四条までは少なくとも三里はあり、途中山越えもせねばなりませず、早馬を飛ばしたところで瞬時に移動できるわけもございません。

従って、池尻隼人が暮六つ過ぎにこの寺にいたということは、治重を殺せなかったということになります。なにしろ治重が殺されたのも同じ暮六つ頃だったのでございますから。

「お蘭、ここから京の四条まで馬で急ぎに急げばどれほどで参るかな？」

信長様は突然、蘭丸殿にそうお尋ねになりました。

「やはり一時（二時間）はかかるのでは――」

蘭丸殿は素早くお答えになりました。

「では、確かめてみるか」



と信長様は再び馬上の人となられました。

「者共、まもなく申の刻（午後四時）じゃ。鐘の音を合図に京の四条まで駆けに駆けい。最も早く着いた者に褒美をとらせる」

信長様の仰せに、お付きの者は一様に歓声をあげられました。

主君が迅速ということをことのほか愛し、普段の馬責めも欠かさないため、感化された御家来衆の馬はどれもよりすぐりの駿馬揃いでございます。

馬首を街道に向けられた信長様は、ふと、見送りに出た円照を振り返り、

「御坊、あの日は雨であったな？」

と尋ねられました。

「隼人様の来られた日でしたら、朝方は確かに雨でござったが、夕暮のころは晴れておりました」

「湖への落日を見たか？」

「はい」

「暮六つの鐘は確かに日没の時に鳴ったのだな」

「仰せの通りにございます」

そうこうするうちに、三井寺の鐘が鳴り始めました。

信長様主従は一斉に馬に鞭をあて、京を目指して走り去ったのでございます。

## 八

「わしの勝ちであったな」

信長様は京の治重が殺された寺の近くで、からからとお笑いになりました。

一騎当千の御家来衆も、信長様の馬に追い付けませんでした。なにしろ信長様は大津―京四条間の三里の道のりをわずか半時（一時間）で駆け抜けられたのでございますから、まさに神速とも申すべき速さでございます。

「されど、殿。これで池尻殿は治重殺害とは関係がない

ことが明らかになったのではございませんか」
口惜しさもあって、そう言われたのは蘭丸殿でした。
それを聞くと信長様は不機嫌そうに沈黙されました。
確かにそうなのでございます。
信長様は半時でこの道のりを駆け抜けられました。しかし、それは信長様だからこそできたので、余人には無理でございます。
「それに殿。街道では殿をさえぎろうとするような無礼者はおりませぬが、隼人殿ではそうも参りますまい」
蘭丸殿は追い打ちをかけられました。
蘭丸殿のおっしゃりたいことはこうでございます。
隼人が仮に街道を馬で疾駆されたとしても、貴人の行列や同輩に会った時、知らぬ顔をして乗り打ちをするわけにもいかぬだろう——ということなのでございます。
第一、街道をそのような形で行かれれば人目に立つということもございます。

## 九

突然の信長様の御来駕に、教会はオルガンティーノ様をはじめ大慌てでございました。
「パードレ、暫時休息するぞ」
と信長様はおっしゃり、二階の客間の椅子にどっかりと腰をおろされました。
コスメ修道士も、この間のお礼言上に御前にまかりでました。
信長様はコスメ殿の顔を見ると、
「時間の話は面白かった。もう一度聞かせてくれ」
と御所望になりました。
そこでコスメ殿は客間にも置いてある西洋時計を用いて、西洋の時法をお話し致しました。
信長様は食いいるように西洋時計を見つめられておりましたが、ふと顔を上げて、

「関所を廃するのではなかったな」
とうとう信長様も、そんな御冗談を口にされました。
信長様は商業の発展を第一に考えられ、御領内の関所はすべて廃止されていたのでございます。
それまでは京に至る道のあらゆる所に、何十ヵ所もの関所があり、交通を阻害し関銭（通行料）を取って民を苦しめていたのでした。
もちろん信長様は関所を廃されたことを後悔されたわけではありません。
ただ、これに違いないと見当を付けられた下手人が、どうも違っているようで、口惜しかったに相違ありません。
「殿、今夜の宿所はどこになされます？」
蘭丸殿の問いに、信長様は、
「バテレン共の教会に寄る——」
と馬を近くの蛸薬師通りへ向けられました。

「イルマン、この季節では日没は南蛮時刻の何時になるのだ？」
と尋ねられました。
「左様でございますな。まもなく六点鐘の鐘を鳴らしますが——」
コスメ殿がそこまで言った時、教会の上の方で鐘が鳴り出しました。六点鐘でございます。
「教会では毎日鳴らしておるのか？」
「はい、はじめのうちは一時間ごとに鳴らしておりましたが、まわりから苦情が参りますので、今は昼十二時と夕六時だけでございます」
「夕暮だけは、日本も南蛮も〝六つ〟というわけか」
と信長様は立ちあがり、窓から外をごらんになりました。
京の建物は、大寺院などを除けば、ほとんど平屋でございます。教会は三階建ですので見晴しがよく、まだ沈むには少し間のある夕日が彼方の山際に輝いておりまし

た。
「まだ日は沈んでおらぬ」
そう呟かれると、信長様は会心の微笑を浮かべられました。
「イルマン、日が沈むのは何時頃だ？」
「今頃は、確か南蛮時間の七時前かと」
コスメ殿が答えますと、信長様は蘭丸殿の方をお向きになり、
「どうだ、お蘭、わかったであろう？」
「何が、でございます？」
「わからぬか、池尻隼人のからくりよ」
「からくり？」
蘭丸殿がけげんな顔をなさいますと、信長様はじれったそうに、
「やはり、隼人が治重殺しの下手人であったのだ」
とおおせられました。
「されど、殿、暮六つには隼人殿は大津にいたのではないこと」
「しかし、それをしたという証拠が」
「あるではないか。もし、あの日、暮六つの鐘が日没と同時に鳴らされていたならば、それは六点鐘より後でなくてはならぬ。だが、佐久間はまず暮六つの鐘を聞き、然るのちに六点鐘を聞いたと申しておる。いかに雨の日とはいえ、この季節に六点鐘より前に日が沈むわけがあるまい」
ここに至って、ようやく蘭丸殿も合点がいきました。
つまり、隼人は鐘の音を一時間ほど早め、それを二つのことに利用したのでございます。
一つは、治重に使者を本物と思わせるため、もう一つは、二つの鐘の時間差を利用して、自分が下手人ではないとの証拠を作るためでございます。
「佐久間にかの者を引っ捕えるように申しつけい」
信長様の御命令に、早速使者が安土へ走り去ると、蘭丸殿は再び信長様にお尋ねになりました。
「――」
信長様は嘲けるような笑いを浮かべ、
「そこがからくりよ。からくりの正体は鐘だ」
「鐘？」
「隼人め、この近くの寺々の暮六つの鐘を半時ほど早めおったのだ」
「何故でございます？」
「決っておるではないか。あの日、治重をだまし本物の使者と思わせるためには、暮六つの鐘が鳴ると同時に寺に着いた方が都合がよい。しかし、それでは佐久間の一行と鉢合わせしてしまう。そこで、半時ほど鐘を早く鳴らし、寺に入って治重らを斬った後、大津まで馬を走らせ、三井寺の本物の暮六つの鐘に間に合わせたのだ」
「そのようなことができましょうか？」
「できる、この辺りはもともとは本願寺のあったところ、その上、坊主どもの中にこの信長に反感を持つ者は多い。しめし合わせて暮六つを早くすることなど造作も
「大津まで目立たぬように馬を走らせることができましょうか？」
信長様は口元に微笑を浮かべられ、
「目立つともよいではないか。あの者は軍使の装束をまとっておったのであろう。安土への急使とみせて街道を走れば、邪魔はされまい」
「では、あの男、何故このような細工を施し、あくまで疑われまいとしたのでございます？　殿の御慧眼無くば、下手人として目されることすら有り得ませんでしたのに」
〝竹に雀〟は偶然にわかったことでございます。もし、それが無ければ、隼人は疑われることすらなかった筈。それなのに、何故〝無実の証拠〟を作っておいたのでしょうか――蘭丸殿はそれが疑問だったのでございます。
「いずれ、この信長の首を掻く機会を得るまでは、絶対に疑われたくなかったのであろうよ」

と信長様は大声でお笑いになりました。
信長様の御慧眼にはまったく畏れ入る他はございません。

# 王者の罪業

# 一

その事件が起こったのは、主イエス・キリストの生誕より千五百七十八年目の春、日本の年号で申せば天正六年のことでございます。

当時、信長様は近江安土の城におられ、天下統一のため西国の毛利と決戦を行なうべく日夜準備に追われておいでになりました。

毛利氏は備中・備後・安芸・周防・長門など数ヵ国を自己の勢力下に置き、頑強な抵抗を続ける石山本願寺と共に、信長様の最大の敵となっていたのでございます。

信長様は毛利と本願寺の連携を断つべく、これまでにない巨大な水軍船を建造し、同時に兵士の安土移住を徹底させ、決戦の日に備えておられました。

兵士の安土移住と申しますのは、織田の本貫の地が尾張・岐阜であるため、安土城築城後二年を経過したその時でさえ、家族や家来を故郷に残し単身で安土に居住しておる侍が少なくなかったのでございます。

その事実が明るみに出たのは、まだ春の浅い或る日、城下で起きた火事のためでした。

御家来衆の一人が単身で屋敷に居住しているが故の不始末とでも申しましょうか、妻子がいないために火の始末が行き届かず、火事を出し、侍屋敷数軒が類焼したのでございます。

事情を知った信長様は烈火の如くお怒りになられ、長子で岐阜城主の信忠殿に命じて、御家来のうち妻子を尾張に残している方々の屋敷をすべて焼き払わせたのでございます。

いつまでも故郷に執着する御家来衆の心――これこそ天下布武をめざす信長様にとって内なる最大の敵だったことは疑いもございません。

この火事があってのち、禍い転じて福と為すと申しま

しょうか、かえって織田家の結束は固まったようでございます。

そして、織田家ではいよいよ火事に対する警戒を強めたのでございますが、それから一月ほどのち、再び城下で火事が起こりました。

これが、あの忌しい事件の初まりだったのでございます。

これから申し述べますことは、我等が師オルガンティーノ様、それに御名前は申し上げられませんが、信長様側近の御家来衆から伺った事件のあらましでございます。

何故、その御家来衆の名前が申し上げられないのか、それはおいおいにおわかりになるかと存じます。

## 二

信長様はその日、今井宗久・津田宗及といった堺の町人を代表する人々を城へ呼び、茶会を開かれておりました。

信長様の目下の関心は、もちろん毛利水軍との決戦でございましたが、それは目先のこと、実はさらに遠大な計画がその胸の内にはあったようでございます。

「宗久、なかなか見事な茶碗だな」

宗久殿が献上された茶碗で、一服喫し終った信長様は、まずそのようにおっしゃられました。

「李朝の青磁でございます。やはりこういうものは海を渡ってきたものでございませんと」

宗久殿は軽く一礼されると、笑みを浮かべて答えました。

信長様はそれを聞くと、にやりとされて、

「このような茶碗がどしどし我が国に入ればさぞかし巨利を生むであろうな」

宗久殿も宗及殿も勘の鋭い方々でございます。いや、勘の鋭い方でないと信長様にお仕えすることはできませ



ん。

信長様はときどき御家来衆に謎をかけられます。その謎をすぐに解くような機転のきく方々は、お気に入られるのですが、そうでない方々は到底織田家での栄達は見込みがありません。

その点、宗久殿も宗及殿も素早く信長様の真意を察したのでございます。

「明や朝鮮との貿易はなかなか難しゅうございますな。瀬戸の海を通らねばなりませんので」

宗久殿が茶筅で茶を泡立てながら答えました。

「毛利が邪魔か？」

信長様がお尋ねになりました。

今度は宗及殿が頷かれ、

「早く天下を統一して頂かねば、われわれ商人の出る幕がございません」

「心にも無いことを申す。利を求めては地の果てまで行くのが商人ではないか」

と信長様は笑っておっしゃると、

「いずれ、明とは正式な貿易を開きたいと思うておる。投銀の量も増やすつもりだ」

投銀とは西洋の言葉で申さば〝投資〟ということになりますでしょうか。商人どもに資金を貸し与え、貿易を行なわせ、利益の中から利子を取るのでございます。

信長様は直接貿易に手を染めているわけではございませんが、このような方法で町衆を支配し大きな利益をあげておられました。

商人たちにとっても、投銀は歓迎すべきことであり、いわば織田家と町衆の共存共栄の策だったのでした。

「これで南蛮貿易も傘下に収められれば、鬼に金棒でございますな」

宗久殿はほくほく顔で言いました。

信長様は一転して苦い顔をなされ、

「そのことよ。バテレンどもを通じてわしの領国以外とは交易をするな——と申しつけてあるのだが、なかなか

うまく行かぬ。鉄砲火薬など、どこの大名も欲しがっておるからな」

とおっしゃいました。

まことに貿易の利益はとてつもないものでございます。日明貿易を私貿易の形から正式な国同士の貿易に昇格させ、南蛮貿易も独占すれば、織田家の資力にかなう家はどこにもなくなります。

我等が師ルイス・フロイス様も、信長様の御希望はよくわかっておいでになりましたが、なにしろキリシタン信徒は全国に散らばっており、御希望通りにすれば他国での迫害を招くやもしれず、カピタンたちの意志統一もできず、南蛮貿易の織田家による独占はそれまでのところ画に描いた餅でございました。

カピタンたちにとってみれば、我国が戦乱の巷にある方が商売はうまくいくということになります。武器などはそれだけで高く売れるのでございますから。

それもあってか、信長様はこの話題にはそれ以上触れられず、宗及殿らと茶道具の話を始められたのでございますが、そこへ突然、御家来衆の一人が城下の変事を伝えに現われたのでございます。

その御家来衆は襖を開いたところで一度平伏し、前に進み出ると信長様の耳元で何事かささやきました。

それを聞くと、信長様は目を大きく見開いて、

「何、長倉が腹を切ったと」

思わず大声を出されたのでございます。

## 三

長倉甚左衛門殿は五百石取りの鉄砲衆の一人で、敬虔なキリシタン信徒でもあります。

ところが、その長倉殿の屋敷から火が出て、その焼け跡から、下帯一つで腹を切った甚左衛門殿と、わたくしどもの仲間であるミゲル神父の死体が見付かったのでございます。



甚左衛門殿の屋敷は城下の玉木町というところにございましたが、その屋敷はほとんど焼けてしまい、中庭のところに一太刀浴せられて事切れているミゲル神父の死体と、敷石の前にどっかりと胡座をかき腹に太刀を突き立てている甚左衛門殿の死体がございました。今一度申しますが、奇怪なことに甚左衛門殿は下帯一つの裸形だったのでございます。

一夜明けた翌日、早速信長様じきじきの立ち合いのもとに取調べが行なわれました。

このような事件に信長様御自らが御出座になるのは、大変珍らしいことでございました。

信長様は安土の市中見廻り役である山崎仙右衛門殿を呼ばれ、事情を聞かれました。

「仔細を述べよ」

「はっ、仔細と申しましても、いまだ判明致しておりません」

その返事を聞くと信長様は不機嫌そうな表情で、

「バテレンが一人死んだそうな、何という男だ?」

「ミゲルと申すパードレでございます」

「日本人ではないのか?」

「はっ、南蛮の者にございます」

山崎殿はさらに詳しく状況を説明しました。

ミゲル神父が刀で斬られていること、甚左衛門殿が下帯一つの姿で腹を切っていることなどでございます。

それを聞くと信長様は興味深げに目を細められ、一言、

「両人の骸を見せい」

とお命じになりました。

ただちに屋敷の中庭に検分の場が設けられ、板に乗せられた二つの死体が運び込まれました。

ミゲル神父は年の頃三十五、六歳、紅毛碧眼という言葉が丁度あてはまる赤い髪と青い眼の持ち主で、死体の僧服には左肩から右腹にかけて大きな刀痕がございました。かなりの手練の仕業のようでございます。

これに対して、甚左衛門殿の形相はすさまじく、穏やかな死顔のミゲル様とは対照的でございました。よほどこの世に心残りがあったのか、まさに無念の形相なのでございます。切腹の傷跡の方は意外なほど小さく、むしろ切っ先が深く腹の中にくい込んでいるようだったと申します。

「誰も、甚左が腹を切るところを見ておらぬのか？」

信長様は山崎殿に尋ねられました。

「左様でございます」

「おかしいではないか、家来がおらぬわけでもあるまい」

信長様の御不審はごもっともでございます。石高からいっても御役目からいっても、屋敷に常に数十人の家来がいても不思議はございません。

「それが、昨夜はバテレンと大事な話があるゆえ、誰も呼ぶまでは来てはならぬと、甚左殿が申したそうで――」

「誰だ、そのようなことを申しておるのは？」

「長倉頼母と申す甚左の家老にございます」

「では、その者をここに呼べ」

信長様の御命令で、長倉殿がやって参りました。主家の一大事に顔面は蒼白となっており、その四十過ぎの肉のついた赤ら顔には、さらに緊張の色が浮かんでおりました。

「昨夜のことを話すがよい」

信長様の御言葉に、長倉殿は口を開くと、

「どうしてこのようなことになったのか、さっぱりわかりませぬ。まさか主人がこのような乱心の行に――」

「推測は混えずともよい。ありのままを聞かせるのだ」

信長様の一喝に、長倉殿は縮み上がり、早口に事情を申し立てました。

「昨晩遅くのことでございます。ミゲル殿がわたくしどもの屋敷におこしになり、何やら重大な相談事があるからと、御二人で座敷にお入りになったのでございます」

「それはいつ頃のことだ」
「亥の上刻の頃でございましたか」
亥の上刻と申せば、わたくしどもの時制では午後九時から十時の間でございましょうか、とにかく朝が早い武家にとっては深夜と申してもよい時刻でございました。
「それで甚左は人払いをしたのだな？」
信長様は念を押されました。
長倉殿は頷いて、
「そのまま一刻ほどが過ぎましたでしょうか。突然、座敷から火の手が上がり駆け付けましたところ……」
「既に甚左は腹を切っておったのか？」
「左様でございます」
「甚左の装束はいかがした？」
「それが、どこにも見当りませぬ。あるいは座敷の中にあったのかもしれませぬが、御覧の通りすべて焼け落ちましたので」
「ふーむ」
信長様はものをお考えになる時の癖で、やや首を横に傾げられ、しばらく考えをまとめられ、
「それにしても妙だな、頼母」
「はっ、――と仰せられますと？」
「そちの申す通りならば、バテレンを斬ったのは甚左ということになる。だが、キリシタンの甚左が何故パードレを斬らねばならぬ？」
「何やら無礼のふるまいがあったのではございませんでしょうか」
長倉殿がおそるおそるといった体で申し上げました。
「それなら、何も腹を切らずともよいではないか、わしが気に入りのバテレンどもを斬ったとて、申し開きできることなら堂々としておればよい。それに――」
信長様はそこで言葉を切って、長倉殿の顔をのぞき込むと、
「何故、屋敷に火を付けた。付け火をする理由など何もないではないか――」



とおっしゃいました。
信長様は再び首を傾げられますと、
「甚左がパードレを斬る筈がない。もしや、他の誰かの仕業ではないか」
信長様がそうおっしゃいますと、長倉殿は突然表情を変え、もじもじとした様子を見せました。
信長様は、
「その方、何か隠しておるな。包み隠さず申してみよ」
と一喝されました。
「申しわけございませぬ。実は――」
長倉殿は震え上がって答えました。
「若殿の新八郎様が昨夜から御姿を見せませぬ」
「逐電したと申すか？」
「はっ」
意外な事実でございました。
甚左衛門殿の跡取りである、十四歳の新八郎殿が姿を隠したというのでございます。
何か、事件にかかわりがあるのでございましょうか。
信長様はそれから屋敷の焼け跡を御検分になり、城へお帰りになったのでございます。

## 四

「殿、どうして下役人のような御振舞をなされるのでございますか？」
城に戻った信長様に尋ねたのは最もお気に入りの近習で十四歳の美少年森蘭丸殿でございます。
日頃、気難しい信長様も蘭丸殿には微笑を返されます。
信長様は騎乗の装束のまま奥の間に入られると、畳の上に大の字に寝転って、脇に正座している蘭丸殿に答えました。
「――甚左には特に命じておいたことがあってな」
「――と仰せられますと？」
「貿易よ。キリシタンの甚左にバテレンどもの機嫌を取

り、南蛮貿易を独占できるような方策を講ずるように命じておいたのだ」

「では、それがうまく行かず、責任を取ってお腹を召されたのでは」

蘭丸殿がそう言いますと、信長様は眉根にしわを寄せて、

「それでは、何故衣服を改めもせずに腹を切ったのだ。第一、屋敷に火を付ける理由がわからぬ。それに、嫡男の新八郎はどこへ行ったのだ」

とおっしゃいました。

「新八郎殿は甚左殿の跡取りではございますが、もともとは養子でございます」

「何だと」

信長様は半身を起こし右腕で頭を支えて、蘭丸殿の顔を見つめられました。

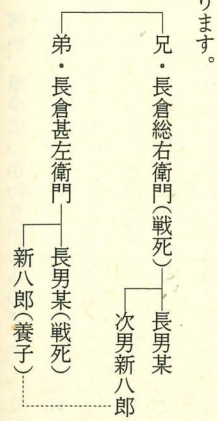
蘭丸殿は正座を崩さずに、

「新八郎殿は先の合戦で亡くなられた長倉総右衛門殿の御次男でございます。甚左殿も先の合戦で御嫡男を亡くされたので、兄にあたる総右衛門殿の家から新八郎殿をもらい受けた由にございます」

先の合戦とは、織田家の天下統一戦の中で最も激烈をきわめた本願寺との一連の合戦のことでございました。

この戦いで先陣をうけたまわった長倉総右衛門殿は、織田家中きっての大剛の士でございましたが、あまりに深く敵陣に入り過ぎ味方との連絡を断たれてしまい壮烈な討死を遂げられたのでございます。また甚左衛門殿の御嫡男も、この合戦で討死されたのです。

ちなみに両家の関係を系図で示しますと次のようになります。






つまり新八郎殿は甚左衛門殿の甥にあたり、養子に入ったということになります。

「総右衛門殿には二子を生んだ先妻のあと、若い後妻をめとられたのでございます。その方は後家となられて、今は奥御殿に仕えておられます」

蘭丸殿はさらに長倉家の消息について語りました。

信長様もこれには興味を示され、その女中となっている後家の名を尋ねられました。

「千鶴でございますよ」

蘭丸殿は答えました。

「ほう、あの女か」

信長様もちょっと驚かれたそうでございます。

なにしろ千鶴殿と申す女中は若く、類いまれな美しさで、殿中の評判になっていたのでございますから。

しばらく信長様は目を閉じて、

「とにかくこの一件、さらに吟味をする必要がある、お蘭」

「はい」

「京へ使いを出せ、パードレ・オルガンティーノを呼ぶのだ」

信長様はそう命じられると、再び目を閉じ何事か御思案の御様子だったということでございます。

## 五

当時、我等が師ルイス・フロイス様は西日本への布教に旅立っており、京を中心とした地域の責任者はイタリア人のオルガンティーノ神父でございました。

オルガンティーノ様は信長様のお召しを受け、急いで安土にやって参りました。

なにしろ、ぐずぐずとしたことがお嫌いな信長様のことでございます。黒絹の僧服をまとったオルガンティーノ様は、とるものもとりあえずといった体で御前に進み出ました。

「何の心当りもないのか？」
信長様はさらにお尋ねになりました。
「はい、ミゲルはたびたび京と安土の間を往復しておりましたが、何のためかは存じません。ただ――」
「――ただ、何だ？」
「ミゲルは甚左殿と何やら出版の計画を進めておったようでございます」
「出版とは？」
「神の教えについての、その、日本語で書いたものでございます」
「経典の翻訳か？」
信長様の問いにオルガンティーノ様は頷きました。
わたくしの推測でございますが、ここで御両方の胸中にはそれぞれ複雑な感慨があった筈でございます。
恥を申すようでございますが、実は日本での布教の方法について、パードレの方々の間には大きな考え方の相違があったのでございます。



「パードレ、よう参られた」
まず信長様はにこやかな顔で労をねぎらったあと、ミゲル神父に対する悔やみの言葉を述べられました。
陽気で感情の起伏が激しいオルガンティーノ様は涙をこぼし、
「兄弟は神のもとに召されたのです。悲しむことはないのかもしれません」
と達者な日本語で言いました。
「それにしても、両人の死に様について腑に落ちぬことがいくつかある」
と信長様はおっしゃり、オルガンティーノ様をしっかりと見据えて、
「そもそも、甚左とミゲルは一体夜遅くに何を相談しておったのだ？」
とお尋ねになりました。
「わかりませぬ」
とオルガンティーノ様は悲し気に首を振りました。

一言で申せば、それは日本人修道士にどこまでキリスト教の教理を教えるか、日本人を単に助手として扱うかそれとも一人前の司祭となるよう教育するか――ということでございまして、パードレの中にも日本人はせいぜい修道士にとどめ司祭にすべきではない、或いは日本人に司祭となる能力などないと考える方も、非常に残念なことではございますが、幾人かおられました。
主に九州におられるカブラル神父様を中心とする方々がそういう考えであり、これに対して京におられるオルガンティーノ様はかねてから日本人司祭を誕生させるべきだと主張されておりました。
そして亡くなられたミゲル様も、この点では急先鋒ともいえる考えの持ち主で、日頃から日本語の習得やラテン語の、日本人に対する教育に一番熱心な方でした。
一方、信長様は信徒ではございませんので、正直なところ、キリスト教の布教など、どうでもよろしかったのでしょうが、織田家がキリスト教の最大の保護者となることによって軍事上経済上の利益をあげることは重大な関心事であったに違いありません。
甚左衛門殿に命じられたことも、この観点からの御指示であったことはおわかりのことと存じます。
「パードレ、もう一つ不思議なことがある」
沈黙を破って信長様がおっしゃいました。
「何でございましょう？」
オルガンティーノ様が顔を上げると、
「キリシタンの戒律では自害は認められないと聞いたが、まことか？」
と信長様が尋ねられました。
脇で控えていた蘭丸殿が思わずはっとして信長様の口元を見つめました。
オルガンティーノ様は静かに頷くと、
「自殺は神の救いに対する裏切りとなります。信徒はどんなに苦しい目にあおうとも決して絶望してはならないのです」

「それならば、何故屋敷に火を付けた？」
「それは――」
「しかも下帯一つで腹を切ることもあるまい。威儀を正して切腹し、仔細を書状にしたため理由を明らかにすればよい。それが侍たるものの務めであろう――しかし」
「何でございます？」
「ふむ、――いや、あったかもしれぬな」
「と仰せられますと？」
蘭丸殿が尋ねました。
「遺言よ。あるいはそれを新八郎が持ち去ったのかもしれぬ」
信長様はそうおっしゃると、半身を起こし、
「どうも気が晴れぬ。明日は久し振りに鷹野にでも参るか」
「それはよろしゅうございます」
鷹狩と聞いて、蘭丸殿は嬉しそうに相槌を打ったことでございます。

「では、甚左はどうして切腹したのだ？」
信長様の問いにオルガンティーノ様は悲し気に首を振りました。
「――サムライの意地を捨て切れなかったのかもしれません。いずれにせよ残念なことです」
「御苦労であった、さがってよい」
オルガンティーノ様が退出しますと、信長様は脇息を枕にごろりと寝そべって、
「お蘭よ、わからぬことが多過ぎるな」
と呟くようにおっしゃいました。
「何故、甚左は腹を切ったか、バテレンを殺したのは甚左か、あるいは新八郎か？　新八郎は何故逐電したのか？」
蘭丸殿はいかにも賢そうな涼やかな瞳で物怖じもせず信長様を見ると、
「新八郎殿がバテレンを斬ってしまい、甚左殿はその責を負うて腹を切ったのではございませんか？」



## 六

ところが翌日の鷹狩では、とんでもないことが起こったのでございます。
近習の方々を引き連れて琵琶湖の東岸に出られた信長様を、鉄砲で狙撃した者が現われたのでございます。
その日、信長様は御自慢の南蛮製のビロードマントにメリヤスのシャツ、革のズボンといった出で立ちで愛馬にまたがっておられたのですが、野原に出ようと山と山の間の細い道を騎乗のまま抜ける際、左側の森の中から一発銃弾が射ち込まれたのでございます。
轟音とともに信長様はもんどりをうって馬から転落しました。
「殿！」
近習の方々が一斉に駆けよりました。
「大事ない、かすり傷だ」
銃弾は幸いにも肩先をかすめているだけでした。
一同はほっと胸を撫でおろしたことでございます。
「曲者をひっ捕えるのだ。よいな、殺してはならぬ。必ず生け捕りにせい」
信長様の御命令で、御家来衆は警護の方々を残して曲者の追跡にかかりました。
その曲者は鷹狩の原を見おろす小高い山の森の中から、銃を射ったのでございますが、信長様を仕留めたのかどうか迷ったのでございましょう、しばらく、その場にとどまっておりました。
そのために逃げ遅れ、信長様の御側近くに仕える一騎当千の方々にあっという間に包囲されてしまったのです。
その男は、まだ前髪の取れぬ若侍でございましたが、逃げられぬと見るや脇差を抜き腹に突き立て、さらに腹を一文字にかっ切ろうといたしました。
これを見て慌てて駆け寄った御家来の一人が、その脇

差を奪い取らなかったら、その少年は命が無かったに相違ありません。

## 七

「どうだ、かの者の具合いは？」

城へ戻られた信長様は奥医師から肩の傷の手当てを受けながら、蘭丸殿に尋ねました。

「はい、腹の傷はかなり深く、血も多く出ておりますゆえ、見込みは五分五分かと存じます」

お察しの通り、少年は新八郎殿でした。

若年ながら鉄砲の習練を積み、織田家有数の使い手となっていた新八郎殿でしたが、こともあろうにその腕の冴えは主君の信長様に対して向けられたのです。

「それにしても見事なものだ。四十間（約七十メートル）離れたところからわしの肩をかすらせるとはな」

苦笑いをしながら信長様はおっしゃいました。

「冗談ではござりませぬ。一つまちがえば殿の御命がなかったところでございます」

憤然とした面持ちで蘭丸殿が言いました。

「この信長、滅多なことでは討ち取れぬぞ。まだまだやらねばならぬことがある」

信長様はそうおっしゃると、

「お蘭、新八郎の持ち物は調べたであろうな？」

「はい、しかし、鉄砲の他は刀と金子、それに何やら大切そうに油紙に包んだ書状が一通だけでございます」

信長様は書状と聞くと、とたんに目を光らせ、

「見せてみよ」

と蘭丸殿に命じられました。

早速、蘭丸殿がそれを差し出しますと、信長様は幾重にも折りたたまれた紙を丁寧に開き、中をごらんになりました。

それには次のように書かれてあったのでございます。



悪王、家臣の妻に邪心を抱き、これを奪わんとす。奸策を弄し、その将をして臣を討死せしめ、後、その妻を妃とす。

「何でございましょう、これは」

蘭丸殿が不思議そうに言いました。

確かに、妙な文章でございまして、ところどころ消したり書き込みがあり、漢文の書き下しのようなそうでないような不可思議なものでございます。

信長様は何度もその文章をごらんになっておられましたが、しばらくしてそれを放り投げると、

「――悪王とはどうもわしのことらしいな」

と呟きをお漏らしになられました。

「誰が書いたのでございましょう」

蘭丸殿が眉をひそめて言いました。

しかし、信長様は顎を右手でこねまわすような仕草を続けて、それにはお答えにならなかったのでございます。

## 八

それから二日後、新八郎殿はようやく危機を脱しましたが、何故あのようなふるまいに出たのかは堅く口をつぐんで、話そうとは致しません。

信長様もお考えがまとまらないのか、珍しく庭へ出て鉄砲の試し射ちをなさり、うさ晴らしをなさりました。

信長様はお若い頃から橋本一巴という名人について、射撃術を習われたため、中々の鉄砲上手でございます。

その日も十間の距離から次々と的を射抜かれたのでございますが、鉄砲五挺をとりかえとりかえ、たて続けに五発射ってしまうと、つまらなそうなお顔で蘭丸殿におっしゃいました。

「どうも、あのことが気になって射撃に身が入らぬ」

「あのこととおっしゃいますのは？」

蘭丸殿が尋ねますと、
「あの奇妙な書き付けのことよ。あれが謎を解く鍵に違いないのだが――」
信長様はそうおっしゃると、ふと気が付いたように、
「お蘭、奥に参るぞ」
「はい？」
「千鶴じゃ。聞きたいことがある」
千鶴殿と申せば、あの新八郎殿の継母にあたります。信長様はさっさと御殿にあがられると、いつものように早足で奥の方へ入られました。
信長様をお迎えするため侍女たちが廊下に揃って平伏したのでございますが、信長様はその中で最も年かさの老女に声をかけ、
「千鶴はいかが致しておる？」
と尋ねました。
「お言い付け通り、見張りの者を付けて謹慎させております」
老女の答えに信長様は頷くと、
「直々に尋ねたいことがある。わしの部屋に連れてくるのだ」
「はい」
「よいな。一瞬たりとも目を離してはならぬぞ。すぐに連れて参れ」
信長様がそうおっしゃったのは、あとで伺ったところによりますと、千鶴殿の自害を恐れてのことだったようでございます。なにしろ血はつながらないとは申せ、息子が主君暗殺を企てたのでございますから、信長様がそのような配慮をなされたのは無理もありません。
しかし、その心配はまったく無用のものでございました。
なぜならば、その千鶴殿と申す女性も我々と同じ、自殺を禁止されたキリシタンであったからでございます。
千鶴殿は切れ長の目と形の整った鼻、それに抜けるような白い肌をした美女でしたが、その顔には必死なものが浮かんでおります。
深々と頭を下げますと、
「どうかこの身にかえて新八郎の命をお助け下さい」
と哀願したのでございます。
血はつながらぬ親子ながら、その情愛にうたれたのか、信長様は穏やかな表情で何度も頷かれ、
「願いのむきはよくわかった。決して悪しゅうは取り計らわぬゆえ安心するがよい」
とおっしゃり、例の書き付けのことをお尋ねになったのでございます。
「これは誰が書いたものかわかるか？」
信長様の問いに、千鶴殿は書き付けを一見し、ただちに答えました。
「これは亡夫の弟、甚左衛門殿が書いたものに相違ございませぬ」
「しかと左様か？」
信長様は念を押されました。
「はい、この筆使いはまぎれもなく甚左殿でございます。いくたびか目にしたことがございますゆえ、まちがいはありませぬ」
「それは何だと思うか？」
信長様の問いに、千鶴殿はけげんな顔で、
「……？」
首を傾げました。
「このような書き付け、見たことはないのか？」
「はい」
「何のために書かれたものか見当はつくかな？」
「わかりませぬ、一向に」
その表情に嘘はないようでございました。
「下がって休むがよい。ただし千鶴、くれぐれも早まったことはしてはならぬぞ。キリシタンの掟でも自害は許されぬ筈だ」
日頃猛々しい信長様とは思えぬほどの優しい御声でございました。

千鶴殿は目にうっすらと涙を浮かべ、御前を退出していきました。

千鶴殿が出ていくと蘭丸殿が、

「その書き付け、甚左殿が書いたとは一体どうしたことでございましょうか？」

と不思議そうに尋ねました。

「悪王とはわしのことらしいと言ったではないか――」

信長様はにやりと笑われ、

「悪王、――すなわちわしが千鶴に横恋慕し、千鶴を奪うために、その夫の総右衛門を乱軍の中で討死せしめた。つまりわが配下の者に言い含め、戦さの最中に総右衛門を敵中に取り残し、討死に追いやった――そのように書いてあるのだ。総右衛門が敵に深入りしすぎて討死したこと、千鶴が奥に上ったことは事実じゃからな。甚左がそのような書き置きを残したとあれば、新八郎がその偽りを信じ、わしを父の敵と狙っても不思議はない」

「では今回のことは、何も知らぬ新八郎を甚左殿がそそのかし、殿のお命を狙わせたのでございますか？」

信長様は首を振って、

「それならば甚左は腹を切る必要はあるまい。身を隠して新八郎を操ればよい。パードレのミゲルも殺すに及ぶまい」

「で、では、何故甚左殿はそのような偽りに満ちた書き付けを残したのでございます？」

「ふふ、そこが肝心かなめのところよ。そこさえわかればすべては明らかになる。そこでだ、お蘭」

「はい」

「まず城下へ触れを出すのだ。主君を狙った曲者新八郎は手当ての甲斐もなく死亡したとな」

「かしこまりました」

「もう一つ、至急、京へ使いを出せ。パードレ・オルガンティーノを呼ぶのだ。このたびの変事について、この信長が解き明かしてつかわす、急ぎ参るように、とな」

「はい。――殿はもうすべておわかりになっているのでございましょうか？」

蘭丸殿の問いに、信長様は再びにやりとされて、

「パードレが参れば、一同を集め話してきかせる、それまで待つがよい」

と例の書き付けを取り上げたのでございました。

## 九

いよいよ、その日がやって参りました。

安土城の一室に集められたのは、オルガンティーノ様、千鶴殿、それに長倉頼母殿でございます。

信長様は三人を御前に召して直々にお言葉をかけられました。

「苦労であった。ここに集まった者は、親族を喪い、あるいは友を喪い、主人を喪った者共である。いずれも、このままでは何故今回のような変事が起こったか、わけがわからず気の晴れぬことであろう。わしが今回の変事のからくりを解いてつかわす。左様心得るよう」

一同が一様に驚きの表情を浮かべる中で、信長様は例の書き付けを持って来させ、それを三人にとくと見るよう命じたのでございます。

「不幸のはじまりはすべてその書き付けにある。どうだ、頼母、それが何だかわかるか？」

名指しされた頼母殿は首を傾げ、

「一向にわかりませぬ。――何でございますか、これは？」

「わからぬか」

と信長様は皮肉っぽく笑い、

「パードレはいかがかな」

と尋ねました。

ところがオルガンティーノ様は日本文字の文章が読めるほどの力はなかったため、蘭丸殿がその内容を読んできかせることになりました。

蘭丸殿が文章の大意を告げると、オルガンティーノ様

は一応頷きましたが、実はそれが何を意味するのか、その時はさっぱりおわかりにならなかったそうでございます。

「それでは話してつかわそう。そこに書いてある悪王とは、どうもわしのことを示しているらしい――」

と信長様は前に蘭丸殿に説明した通りのことを話して聞かせました。

「では、新八郎は上様を父総右衛門の敵だと思い込んでいたのでございますね」

千鶴殿が思わず大声を出しました。

「そうだ。そちの申す通り、その書き付けを書いたのは総右衛門の弟の甚左衛門に相違ない。それゆえに新八郎はわしをまちがいなく父の敵と思ったのであろうな」

信長様は脇息に軽くもたれかかると、

「肝心なことは、そこにある書き付けを誰が新八郎に渡し、さらに、わしのことを悪しざまに告げたか――だ」

「それは亡き甚左衛門殿ではございませんか」

と口を出したのは頼母殿でございます。

「それは違うぞ、頼母。もし、甚左が自分の口で告げたとすれば、何もこのようなあいまいな書状を残す必要はあるまい。書かずとも、己れの口で語ればよい。だから、わしはこう思うのだ。何者かが甚左が死んだ後、その書状を甚左の遺言と偽って新八郎に渡し、父の敵を討つように言い含めたのだとな」

信長様はそうおっしゃると、別人のような鋭い視線を一人にあびせました。

「それは、頼母、そちしか出来ぬことだな」

「何をおっしゃいます」

驚いて頼母殿が叫びました。

「そうではないか、甚左が死に、火の手があがり城下の者が駆けつける間に、因果を含めて新八郎を逐電させることができるのは、そちしかおるまい」

「殿、それは見当違いと申すもの、拙者そのようなことをした覚えは一切ござらん」



「しかと左様か？」

信長様が念を押されると、頼母殿ははっきりと頷きました。

「ならばそちらを見るがよい」

信長様の御声に皆が右手の方を見ますと、そこの障子が突然左右に開かれ、御家来衆に体を支えられた新八郎殿が食いつかんばかりの怒りの表情で頼母殿をにらみつけました。

「どうだ。もう一度言うてみよ。確かに新八郎をそそのかしたのではないのだな」

こうなってはさすがの頼母殿も言うべき言葉がなく、顔を真っ赤にして口をつぐむばかりでした。

「どうだ、新八郎。どちらが偽りであるかがよくわかったであろう」

その言葉に、新八郎殿は思わず涙ぐみ両手を畳について深く頭を下げました。

「一同の者、さらに考えてみるがよい。この頼母がいかにわしのことを讒言しようとも、甚左が生きておる限り、それを新八郎に信じ込ませることはできぬ。それゆえに、甚左が生きていてはどうにも都合が悪かったのだ。そうであろう、頼母！」

そう決めつけられても頼母殿は唇を噛みしめたまま一言もしゃべろうとは致しません。

「では、では殿、甚左殿はこの頼母に殺されたのでございますか？」

千鶴殿が悲鳴のような声で尋ねました。

「その通りだ。頼母はあの日、甚左の油断を見すまし刺し殺した。そして、そこに居合わせたパードレも一緒に斬ったのだ」

信長様はそこで一息つくと、

「だが、そこで頼母ははたと困った。衣服の上から刺してしまったので、ちょうどそこのところの布に穴があいてしまったのだ。切腹に見せかけるつもりであったが、衣の上から腹を切る阿呆はおらぬ。このままでは自害に

とりつくろうことができなくなる。そのために、刀が刺さったまま、死体の着物を脱がし下帯一つの裸にしたのだ。そうして庭に出し両手で刀の柄を握らせ切腹の形にし、はがした着物は目立つゆえ建物もろともに燃やしてしまったのだ。まさか、着物をうまく捨てるために火事まで起こすとは誰も思わぬからな」

一同、驚きの余り声も出ない有様でした。

頼母殿だけは覚悟が定まったのか身じろぎもせず座っております。

「しかし、殿、それならば甚左殿の体ごと屋敷に放り込み燃やしてしまった方が簡単ではございませんか？」

沈黙を破って蘭丸殿が申し上げました。

「それでは屋敷が焼け落ち甚左の死体が焼跡に埋ってしまうかもしれぬではないか。新八郎に、確かに甚左は切腹したと見届けさせ、敵を討つように説得せねばならぬ。ただ着物を灰にすればよいというものではない。しかも時がなかった。火の手は既にあがっておるのだ。ぐずぐずしておれば、城下の者が駆け付けてくる。素早く甚左の死体を見せ、新八郎に姿を隠させねばならんのだ」

信長様は噛んで含めるようにおっしゃいました。

「ミゲルはただその場に居合わせたというだけで殺されてしまったのですか？」

オルガンティーノ様が尋ねました。

「そうではないのだ、パードレ」

信長様は同情のこもった目でオルガンティーノ様を見て、

「今度のことは、わしにも責任はある。そもそもの発端はその書状じゃ。頼母もその書状の存在に気付かなければ、このような大それた悪事に手を出さなかったであろう。甚左とパードレが二人で作ったその書状、それが作られなければこのようなことにはならなかった」

「この書状は一体何のために作られたのでございますか？　それがわからねば、夫も甚左殿も浮かばれませぬ。ぜひお教え下さい」



千鶴殿が必死の面持ちで申しました。

信長様は大きく頷くと、

「甚左はわしの命を受け、南蛮と交易をより盛んにする手立てを考えておった。甚左は武骨者が多い当家には珍しく、漢籍の知識もあり熱心なキリシタンでもある。ゆえにわしもそのような使命を与えたのだが、これがよくなかったのう。――よいか、甚左は当家がキリシタンの最大にして唯一の保護者となることが使命を果たす最良の方法だと考え、ミゲルとそれを実行に移したのだ」

「と申されますと？」

オルガンティーノ様が言いました。

「翻訳よ。わしはキリシタンの経典については何も知らぬが、それを本邦の言葉に直せばより教えが広めやすいことはわかる。甚左とミゲルはそれを始めておったに相違ない。――どうだ、パードレ、王が家臣の妻に懸想し、その夫を討死せしめその妻を我がものにする――このような説話が経典の中にあるのではないか？」

「確かにございます」

オルガンティーノ様は今こそ真相がはっきりとおわかりになったのでございました。

旧約聖書のサムエル記に、イスラエル王ダビデが、部下の妻バテシバに恋をして、これを奪い取る気になりその夫を最前線に送って討死させたという話が載せられておるのでございます。

「その書状を見よ、ところどころ消したり書き込みがある。おそらく草稿の一部を抜き取ったものであろう」

信長様は立ち上って頼母殿の前に進むと、

「その方、おそらくは毛利に内通しておるのであろう。わしの計画を挫折させた暁には何を褒美として受け取るのだ？」

「――大したものではございませぬ」

頼母殿はふてぶてしく答えました。

「憎い奴め。厳しく吟味のうえ仕置き致してくれる」

信長様は左右に命じて頼母を引っ捕えさせ牢に放り込

んだのでございます。

そして、数日後、頼母殿は城下の仕置場で斬罪に処せられたのでございました。

この他に長倉家の家来の中に頼母殿と組んで今回の殺害を手伝っていた者がいたのもわかり、数日中にその者たちも捕えられました。

なにしろ主人を殺し屋敷に火をつけるという大がかりな悪事でしたので、屋敷の中にも頼母殿の一味がかなり大勢いたのでございます。

新八郎殿はそのまま落命したということに、織田家の記録ではなっております。

しかし、実を申しますと、あれ以来新八郎殿は名を変えられ、生まれかわったつもりで織田家のために身を粉にして働いていらっしゃるのです。

その方が誰かとは、ここでは申し上げられません。

いかに誤解のうえのこととはいえ、一度は主君を殺害しようとしてしまったのですから、どうしても過去の恥ずべき所業を明らかにする気持ちになれないのは、当然のことかもしれません。

これが、最初にお断りしたように、この話を伺った方々や係り合いのあった方々の御名前をはっきり申し上げられない理由なのでございます。



# 身中の虫

# 一

ことの始まりは京で開かれた茶会でございました。

その日、信長様はお気に入りの近臣松井友閑殿に茶頭を命じ、二条の館に諸将を招かれ、日頃の労をねぎらったのでございます。閏七月もなかばの暑い日。我が国の年号では天正五年、主の生誕より千五百七十七年目の夏のことになります。

北陸から戦況報告に戻った織田家の重鎮柴田勝家殿が客の座の筆頭を占めており以下、丹羽長秀殿、佐久間信盛殿など、織田家の錚々たる面々が信長様の御館に集まったのでございます。

その中に、髪は白く頑丈そうな体軀を持ち、眼光は射るように鋭い一人の老将がおりました。

名を松永弾正久秀と申し、京の町では極悪人として誰一人知らぬ者はない程の男でございます。

何故かような者が信長様の麾下に馳参じたのか詳しいことはわたくしも存じませぬのですが、この男の悪業ばかりは日本国中に轟き渡っていると申しても過言ではありません。

ある時、信長様が久秀と同席された折、三河の徳川家康殿がやって参りました。

そこで信長様は家康殿に、久秀を次のように紹介なさったのでございます。

「三河殿、この者は松永弾正と申し、常人のなせぬことを三つも行なっている。将軍を殺したこと、主家の三好に叛いたこと、大仏殿を焼いたことじゃ。並の者なら一つとして行なえぬことを、何と三つともやってのけた老人でござるよ。ははは」

そう言って信長様は高笑いをなされたということでございます。

これは決して大仰に申されたのではなく、誠その通りなのでございます。

将軍様を殺したというのは、この年より十二年前の永禄八年、足利十三代将軍の義輝公をこの二条の邸において暗殺したことでございます。

義輝公は塚原卜伝に学んだ剣術の達人で、英明な方でございましたので、京・山城の実権を握らんとする久秀にとって目の上のコブのような存在だったのでございます。義輝公もむざむざとは討たれず、足利家伝来の宝刀を何本も血塗らせ、久秀の放った刺客どもに必死の抵抗をなさったのですが、多勢に無勢は如何ともしがたくついに槍で突き殺されておしまいになったのでございます。

その後、弾正は主人の三好家をないがしろにし、これと戦い、ついには戦いの最中に敵のこもった東大寺を襲撃、大仏殿を焼いてしまったのでございます。弾正はその上に京の都の教会をこわし、フロイス様らパードレを追放するという悪業もなしているのでございます。

これほどの悪党が、いやむしろ悪党ゆえに目端がきくのでしょうか、信長様が義輝公の弟で覚慶と申され還俗して足利義昭となられた方を奉じ、京に入られた時、久秀は早速、天下無双の宝と呼ばれた茶器（茶入れ）「つくもがみ」と吉光の脇差を献上し、忠誠を誓ったのでございます。

義昭様にとっては兄の仇ということになりますし、その悪業をつぶさに知っている方々から見れば、よもや信長様が久秀をお許しになるとは思わなかったのでございましょう。

しかし、信長様は久秀の投降を笑ってお許しになると、一万の兵を与えて大和を「切り取り次第」にせよとおっしゃったのでございます。

信長様の御家来衆もこれには驚かれたようでした。

元来、信長様は曲がったことが大嫌いな御気性ですし、すぐに将軍の宣下を受けた義昭様の御機嫌を損じないためにも、久秀を生かしておく筈はないというのが大方の見方でございました。



信長様が何故久秀を許されたのか、当時、様々な憶測が語られたのでございますが、そのうち最も有力なものは久秀が「つくもがみ」を献上したからだという見方でございます。

信長様がお好きなものは、まず馬それに茶道具でございます。特に近頃は一段と茶の湯を好まれ、名のある茶道具には千金を投じても惜しくないというほど御執心でございました。

我らが師ルイス・フロイス様に言わせれば、日本人は何故、土のかたまりである陶器を宝石のように珍重し、金・銀以上のものと見ているのか、まるでわからぬ——となりますが、信長様はそうは思ってはおられぬようで、後に「名物狩り」と言われる茶器の強制的な収集を始めたぐらい、茶の湯の道には御熱心なのでございました。

しかし、久秀をお許しになったのは決して「つくもがみ」のためではございません。

いかに「つくもがみ」が天下の名器とはいえ、織田信長という方は御自分の好みで政治の本道を見誤まるような方ではございません。

では、何故久秀を幕下に入れられたのか。

これはわたくしの当て推量でございますが、久秀はまだまだ使える——そのように信長様は考えられたのではないでしょうか。

人を、その品性ではなく器量で見るのが、信長様の長所であり同時に短所でもあるのではないでしょうか。

これは僭越なことを申し上げました。

とにかく、ここでは久秀が信長様のお気に入られ、当時は佐久間信盛殿の配下として大坂天王寺の砦を守っていたことがわかっていただければよろしゅうございます。天王寺砦は信長様の宿敵である本願寺の本拠石山城を囲む十数ヵ所の砦のうち要にあたると申し上げれば、信長様が久秀をどれほど高く買っていたかおわかりのことと存じます。

さて、その日の茶会でございますが、二条の館の茶室

に十五人の客が集まり、床には「遠寺晩鐘」の軸が飾られ、茶頭は先程も申し上げたように松井友閑殿が勤められました。

友閑殿は信長様の近臣であると共に、練達の茶人でもあります。

茶の湯のたて方には正式と略式があり、正式を濃茶手前、略式を薄茶手前と申し、濃茶は上座から一つの茶碗で回し飲みし、薄茶は一人ずつ茶碗を持って飲み干すということは御存知の方も多かろうと思います。

当日行なわれたのは、無論正式の濃茶手前でございまして、友閑殿は手慣れた手付きで棗から杓で抹茶をすくい、碗に入れて茶筅でよくかきまぜました。そして信長様から順に濃茶を一口ないし二口喫せられたのでございます。堺の町衆とは違って織田家家中の方々は茶の作法に通じていない方もおられますが、そこは見様見真似で前の方に続き茶をすすって次の方へ回しておられたようでございます。

方々が茶を喫し終えますと、干菓子が配られます。干菓子といってもモチ米を固めたごく質素なものですが、これが一人一人に出され、各人とも神妙な顔付きで召し上がりました。

それが終わりますと、信長様は友閑殿に代って上座に就き、相変らずのカン高いお声で、一同の戦陣の労をねぎらわれますと、

「この際、日頃不満に思うことあらば遠慮なく申してみよ」

と仰せになりました。

これは信長様が諸将を集めた際、いつもおっしゃることで、珍しいことではございません。家臣の方々も織田家が小さくまだ天下に名を知られていない頃は、よく色々な不平不満を信長様に申し上げたそうでございますが、織田家が天下取りの道を歩み着々と基礎を固めつつある今日、そのような家臣の不平不満は鳴りを潜めておりました。



その時も信長様が一同を見渡しても、すぐに何かを申し上げようとする家臣など、一人もおりません。

ところが、信長様が話題を変えようとなさった時、下座の方から一人の老人が進み出たのでございます。

「――恐れながら申し上げます」

「弾正か――何事だ」

信長様はちょっと驚いたように老人の方を見つめました。

老人とはもちろんあの松永弾正久秀でございます。

「拙者、どうしても合点のいかぬことが一つござる」

久秀は鋭い視線を信長様に当てると、周囲のざわめきも一切意に介せず後を続けました。

「殿は大和一国を将来はこともあろうにあの順慶めに知行されると命ぜられた。このこと、この弾正まったくもって得心がいきませぬ。何故かような者に大和国を任せるのでございますか？」

切り口上でせまる久秀に信長様は即答せず苦い笑いを漏らされました。

順慶とは大和国の地侍で筒井順慶と申す者でございます。

この順慶と久秀とは年来の敵同士、大和一国の支配権をめぐって文字通り血で血を洗う戦いを繰り返しておりました。

ところが信長様が京を制圧し天下に号令することとなってから、両名は相次いで信長様に服属し、昨日の敵が同じ家中に入ることになってしまったのでございました。

そして昨年、信長様は大和一国はゆくゆくは順慶に任せるという方針をお決めになり、長年の争いは順慶を利した形で終止符を打ったのでございます。

久秀はそれが不満でたまらなかったのでございましょう。

「弾正、そちにはいずれ他の所領を与える所存じゃ、しばらく我慢せい」

信長様は珍しくもなだめるような口調でおっしゃいました。久秀の大和の地にかける執念を、よく御存知だったのでございましょう。しかし、久秀はあくまで承服致しません。

「殿、弾正はあくまで不服でござる。ぜひとも御再考願わしく存じます」

久秀の態度に、あちこちから「無礼であるぞ」とか「控えい」といった声がかかったのでございますが、久秀は一向に気にする気配もなく、執拗に信長様にせまったのでございます。

最初は聞きわけのない久秀の態度を苦笑しながらも楽しんでいた信長様でしたが、さすがに堪忍袋の緒が切れたか一喝して久秀を退出させようとした時でした。

思いもかけぬ椿事が起ったのでございます。

御家来の一人が突然口から血を吐き胸をかきむしったかと思うと、苦悶のうめきを上げて床に倒れ伏したのでございます。

周囲の者が驚き慌てて、その者を抱き起こしてみますと、既に息絶えておりました。

その者の名は佐久間重盛殿、織田家の重臣佐久間一族の一人でございました。

## 二

「何だと？　やはり毒殺だと申すのか？」

二条館の奥の間で信長様は目付役の万見仙千代殿の報告を聞いておられました。

「はい、左様で、唐渡りの斑猫と申す毒物のようでございます」

と万見殿は申し上げました。

万見殿は信長様のお小姓上りで、今は軍目付という重い役目に就いておられる若武者でございます。

信長様は茶会で起った異様な事件の究明に当たらせるため、泉州からわざわざ仙千代殿を呼び寄せたのでございます。



信長様はお気に入りの近習森蘭丸殿に太刀を預け、脇息を枕に畳の上に大の字になって報告を聞いておられました。

「しかし、仙千代、それでは何に毒が入れられていたと申すのだ？」

信長様の質問に仙千代殿は困惑の表情となり、

「それが――判然と致しませぬ」

と答えました。

「斑猫と申せば、飲めばたちどころに息絶えるという猛毒であろう」

「左様でございます」

「されば、茶か干菓子の中に毒が混ぜられていたと考えるのが妥当だが――」

信長様は半身を起こして仙千代殿をごらんになると、

「茶ではない――あれは皆で回し飲みをした。もし毒が入っておれば、この信長とて無事には済まぬ。だが干菓子だとしても――妙だ。皆同じ菓子を食べている」

信長様の疑問ももっともでございます。

茶でなければ、たちどころに息絶えるという程の毒物でございますから、死んだ当人も口にした干菓子の中に毒が入っていたと考える他はございません。しかし、その菓子は全員が同じものを食べたのでございます。従って毒はその中の一つ、只一つに入っていたことになります。

「佐久間が死んだのは偶然のなせる業か、或いはこの信長を狙って誤って他の者を殺めたのか――仙千代、友閑は何と申しておる？」

信長様はお尋ねになりました。

菓子を集め茶席で配分したのは友閑殿なのですから、これは当然のお尋ねです。

「誠に申しわけなき次第、吟味に吟味を重ねて取り寄せた菓子の中にこのようなものがあったとは、腹をかっさばいてお詫び申し上げねば――左様に申されておりましたが」

仙千代殿が申し上げますと、信長様は、
「よいわ、かの者の切腹など見とうはない。それよりも、わからぬのは何のために何者が毒を用いたのかじゃ——仙千代、この件きっと究明致すのだぞ」
「かしこまりました」
信長様は固くお言いつけになると、再び大の字に寝転がって目を閉じ考え込んでおられました。

## 三

再び二条館で信長様主催の茶会が開かれたのは、何とその三日後でございました。
長い間中央をうかがっていた越後の上杉謙信がいよいよ西上の軍をおこすということで、柴田・滝川・羽柴・丹羽・前田といった織田家選り抜きの将星は北国攻めの準備の最中でしたが、とにもかくにも緊急のお召しとあって集まって参りました。

その中にはあの久秀も、またこの前の茶会には姿を見せなかった筒井順慶も駆け付けてきたのでございます。
実は信長様には一つの計画がおありになりました。
この前の茶会での毒殺事件がどうにも解明できず、謎が深まるばかりなので、一つ罠をかけてみてはどうかと思い立ったのでございます。
なにしろ信長様のお膝元で御家来の一人が毒殺されてしまったのでございます、信長様とて真相が判明するまではうっかり食物も口に出来ません。
あの佐久間重盛殿の毒殺が、敵の謀略なのか、個人の恨みによるものか？
多数の中で重盛殿だけが殺されたのは、偶然なのか違うのか？
毒は干菓子に混ぜてあったのか、それともまったく違う手段によってなされたのか？
信長様としては大いに気がかりでございましたでしょう。

ひょっとして、近臣の中に裏切り者がいるのではないか——そんな疑いが脳裏をかすめなかったとどうして申せましょう。

もし、そうであれば織田家の一大事、信長様としては枕を高くして寝るためにも、下手人を一刻も早く探し出す必要があったのでございます。

異様に引き締った空気の中で茶会は始まりました。

茶頭は前回と同じ松井友閑殿でございます。

まず初めは濃茶手前——信長様が最初に茶碗を受け取り、柴田勝家殿以下一同が回し飲み、ここでは何事も起こりませんでした。

そして、次に干菓子が配られ、信長様がまず口に入れられると、他の方々もこれに倣って一斉に口の中へ——いや唯一人だけ素早く菓子を懐ろに入れて何食わぬ顔をしていた男がおりました。

あの松永久秀めにございます。

しかし、信長様は決してそれをお見逃しにはなりませんでした。

「弾正、何故賞味せぬのだ？」

静かな、しかし厳しい声が座敷に響きました。

久秀は何も言わず口をへの字に結びました。

信長様は立ち上がると、つかつかと久秀の前に歩み寄りました。

「何故、食べぬ、弾正？　わしを疑っておるのか？」

久秀はそれには答えず反抗的な目で信長様をにらみ返しました。

「どうした、この菓子に毒でも入っておると申すのか？」

「……」

久秀は相変らず答えません。

ただ、その目付はいかにも菓子に毒が入っているのはわかりきったことだと申しておりました。

そのまま行けば信長様は怒りのあまり久秀めをお手討ちになされたかもしれませぬが、まさにそうなりかけた時、またしても一人の侍が胸をかきむしり倒れ伏したのでございます。

その者は久秀の二つ隣りに座っていた新参者で田村高元殿と申しました。

信長様はそれを見て驚きのあまり色を失ったのでございます。

## 四

「わからぬ、わからぬ」

と信長様は館の奥の間で頭をかかえておられました。

お側には万見仙千代殿、森蘭丸殿がおられます。

「殿、何をそのようにお悩みでございます？」

蘭丸殿が見かねて申し上げました。

「毒殺の方法よ。いかにして佐久間や田村を殺すことができたのか？」

「それは干菓子に毒が——」

と蘭丸殿が言いかけますと、信長様は、

「それは違うぞ、お蘭」

と半身を起こし、

「あの干菓子には、一切毒は入ってはおらぬ」

「何故そのように断言できるのでございます？」

仙千代殿が尋ねました。

「あれはすべてわしが揃えたのだ。一つ一つ吟味し、なめてまで毒のないことを確かめた。その上で友閑に渡したのじゃ」

信長様がお答えになりました。

仙千代殿も蘭丸殿も信長様の用意周到ぶりにはそれこそ舌を巻いたのでございますが、それでもいくつかの疑問は湧いて参りました。

「しかし、殿が菓子をお渡しになったあと、何者かが……」

仙千代殿はそこまで言って口ごもりました。

それ以上述べることは特定の人物に疑いをかけること

に通じます。
「友閑ではない――」
と信長様は早速先回りされておっしゃいました。
「わしは友閑に菓子を渡してから、一度も目を離さなかった。友閑には何もできぬ筈」
「では、一体誰が、どのようにして？」
蘭丸殿が呟くように言うと、
信長様は、
「それがわからぬから悩んでおるのだ」
と苦笑されました。
そして、しばらく信長様は脇息を枕に寝転がり考えをまとめておられましたが、そのうちによき思案が浮かんだのか、再び半身を起こして、
「仙千代」
「はい」
「毒死した二人の者がここへ来るまでの間、何か変ったことがなかったか調べるのだ。よいな、何でもよい、何か変ったことがなかったかを、な」
信長様は珍しく指示を二回繰り返されました。よほど信長様も今回の謎には手を焼いておられる御様子でした。
仙千代殿は深々と頭を下げると、早速調べに向ったのです。
信長様はそれを見送って、しばらくは天井の格子模様を見つめ、ぼんやりとしておられました。
「殿――」
沈黙を破って蘭丸殿が声をかけました。
「何だ？」
「何か気がかりなことがございますのでは？」
「ふむ、――わかるか？」
蘭丸殿は黙って頷かれました。
「――弾正よ」
信長様はぽつりとおっしゃいました。
「松永様が何か？」



「あの男どうしても干菓子を口にしようとはしなかった。――まるで、わしがあの男を毒殺するものと決めてかかっているようじゃった」
「もともとが疑ぐり深い性質なのでは？」
「そうかもしれぬ。それでなくてはあのような出世はできまい。だが、これまでとは何か違う――わからぬ」
信長様はそう言って目を閉じておしまいになったということです。

## 五

仙千代殿の新たな報告が届けられたのが、翌日の早朝のことでございました。
さすがは若武者の中でその人ありと知られた仙千代殿、思いもよらぬ事実を調べ上げてきたのでございます。
「何じゃと、行者？」
「はい、左様でございます。死亡したお二方がお二方とも、茶会に行く途中怪しげなる風体の行者に呼び止められているのでございます」
「して、その行者は何者だ？」
「わかりませぬ、ただ家来どもの話では、いきなり汝の顔には死相が出ておる、このままでは必ず死ぬ――と申したそうで」
「死相？　馬鹿な、そのようなものがあってたまるか」
信長様は吐き捨てるようにおっしゃいました。もともと理屈に合わないことは何よりもお嫌いな方でございます。
「――で、それからどうなった？」
「はい、お二方とも突然のことに腹を立て、その行者を詰問したそうにございます。行者は、取り付いている悪霊を祓えば命は助かると申したそうで」
「どうせ金目当ての嫌がらせであろう」
「ところがそうではございません。その行者、金銭は一

切要らぬと申したそうでございます」
「何、そのようなことを申したのか」
信長様は額に手を当ててしばらく考えておられましたが、
「その行者と両名は他に何を話したのだ？」
とお尋ねになりました。
「それが――行者が他聞をはばかると申して小声で耳打ちしたということでございまして――」
「――誰も聞いておらぬと申すのか？」
「はい」
信長様はそれを聞くと舌打ちされて、
「馬鹿者どもが、迷信など信じるから命を落とす破目に陥るのだ」
「殿、ではその行者が？」
蘭丸殿が尋ねました。
信長様は黙って頷かれました。
「されど殿、斑猫は飲めばたちどころに倒れる毒でございます。もし行者が下手人なら、お二方は茶会に出ることもできずその場で倒れていたのでは？　それに得体の知れない相手の言う事を聞いて毒の入った食物を口に入れるでしょうか？」
仙千代殿が申しました。
「そちの疑問はもっともじゃ、それを明らかにする方法はただ一つ、もう一度この館で茶会を催す他はあるまい」
信長様は最後に断を下されたのでございます。

## 六

三度目の茶会も前回と同じ趣向でございました。
茶頭は松井友閑殿、招かれたのも織田家有数の武将の方々――ただこの前と違ったのは皆が顔を揃えるとすぐに、信長様が座敷に入ってこられたことでございます。
「弾正は来ておらぬのか？」



一同の顔を見渡して、まず信長様の口から出たのは、あの久秀のことでした。
「急な病いで出席できぬとの知らせを受けております」
と近臣の方が報告しました。
それを聞くと信長様は表情を曇らせ、
「弾正には是非とも来て欲しかったが止むを得まい」
と呟くようにおっしゃると、一同を再び見渡し、
「皆の者、よく聞け」
と大きく声を張り上げられたのでございます。
「そちたちの中にここへ来る途中怪しげな行者に出会った者がおろう。ただちに名乗り出よ」
信長様はそうおっしゃいました。
やがて、一人の武士が前に出ました。
何か咎めを受けるのかと不安の色が顔に浮んでおります。
「庭に出て腹中のものを吐くのだ」
「は？」
信長様の意外なお言葉に、その武士は目を白黒させました。
「何を愚図愚図しておる。早くせい。命が無くなるぞ」
既に庭には医師が待機しておりました。
その武士は医師の手助けを借りて、命令通りに腹中のものを吐き出したのでございます。
腹中のもの――それは何やら怪しげな呪文を書き小さく折り畳んだ護符（お守り）でございました。医師はそれを丁寧に水で洗い、信長様に差し出しました。
信長様はそれを高く差し上げて一同に見せました。
「行者は何と申した？　この護符を飲めば災厄から身を守れるとでも申したか？」
信長様は吐いたばかりで青い顔の侍に尋ねました。
「馬鹿者めが。この護符こそ災厄そのものなのだ。よく見よ」
と信長様はその護符を破りました。
中から斑猫の毒粉がこぼれ出たのはもちろんでござい

ます。

「よいか、もともと茶会で出された物には何も異常はなかったのだ。死んだ佐久間・田村の両名は行者の口車に乗せられ、身を守るためと信じてこの護符を飲んだ。だが、腹中で溶けると、中の毒がしみ出し、両名の命を奪ったのだ」

一同、信長様の御言葉に感じ入っておったのでございますが、中の一人が、

「その行者とはいずれの手の者にございますか？」

と尋ねました。

「まもなくわかる。仙千代がひっ捕えてくる筈じゃ」

さすがは信長様です。すべては手配りを終えてのことだったのでございます。

## 七

御詮議の結果、行者を陰で操っていた黒幕は堺の町衆のうち、信長様を嫌い本願寺に心を寄せている者とわかりました。

首謀者は武野紹鷗の倅宗瓦という男であったらしいと判明したのは、それから三年も後のことでございました。

宗瓦の属する武野一族は堺で有数の名門でございますが、宗瓦自身は本願寺の坊官富島重映の娘を妻としていたこともあり、前々から織田家には反感を持っていたようでございます。

事の次第が露見致しますと、宗瓦は身一つで泉州に逃がれ、その財産は一切没収されることとなったのでございます。

もう一つ、この事件の後、起こった変事がございます。

それは松永久秀の反逆でございました。

この年の八月、柴田勝家殿をはじめとして織田家の主だった将領が、上杉征伐に出発した後、手薄となった畿内の守りの隙をついて、久秀めは倅の久通と共に大和信貴山城に籠り反旗をひるがえしたのでございます。

「やはり弾正は裏切りおったか」

その知らせがもたらされると、信長様は残念そうにおっしゃいました。

「殿は弾正の離反を予期されておられたのでございますか？」

蘭丸殿が訊きました。

信長様は微笑すると、

「それこそ行者を操った者の狙いだったのだ。よいか、お蘭。佐久間や田村を殺したところで織田家の力を殺ぐことは難しい。だが、この信長が家臣の毒殺を計っておると信じ込ませればどうなる。団結も砂のようにもろくなってしまうではないか。その手初めが弾正だったのだ」

「では、弾正はあの時、殿に毒殺されると思い込んでいたのでございますか」

「その通りだ。——そして、ついに弾正めは織田家を離れおった——わしはあの男を気に入っておったのだが」

意外な信長様の御言葉に蘭丸殿は耳を疑ったということでございます。

「何故でございます？」

蘭丸殿はその理由を尋ねました。

徳川殿に紹介した口上からみても、信長様が久秀をむしろ嫌っているのではないかというのが巷の噂でございました。

「そうではない、あれはあの者を褒めたのだ。凡人には出来ぬことを三つも行なった偉いものだとな」

「しかし、あの者は主家に叛逆致しております。そのことも褒めたと仰せられるので？」

「あれは三好に叛いたのであろう。この信長の家来となった以上、わしに叛かねばそれでよい」

蘭丸殿もこの御言葉には少々呆れて、

「ほんに殿は変った御方でございます」

と申し上げたほどでございます。

「弾正め、最早わしのもとには戻って参るまい。惜しいことをしたものよ」

信長様の予感は当たりました。

この後、信長様は松井友閑殿を使者に立て、叛逆をやめて帰参するように説得したのですが結局実らず、その年の十月十日、信貴山城は織田軍に攻められて落城、久秀父子は自害したのでございます。

本願寺との講和が成ったのは、それから三年後の天正八年のことでございました。

# 不動明王の剣

# 一

これは永禄十二年、わたしどもの暦で申しますと一五六九年、信長様がまだ三十六歳の頃のお話でございます。

この頃は織田家に開運のきざしが見え始めた時代でございまして、その前年の永禄十一年には流浪の足利将軍義昭様が織田家に身を寄せられておりました。

信長様は足利将軍という願ってもない後盾を得られ、これで天下統一へ乗り出すことができると、ことの他お喜びの御様子でした。

戦国の世、下剋上の世とは申しましても、尾張の成り上がり大名がいきなり天下統一の志をあらわにするわけにはまいりません。

そのような振舞いに出れば、思い上がりもはなはだしいと近隣の諸大名から、よってたかって袋叩きの目に会うことは火を見るより明らかでございます。

しかし、足利将軍家を擁して天下に号令するとなれば、話はまるで違ってまいります。将軍家の再興という大義名分がございますから、諸大名が腹の中で何と考えようとも表立って文句を言うわけにはいかないのでございます。

信長様は将軍を迎えて、京の都へ攻め上り、途中、南近江の六角承禎をなんなく撃破して、天下の英雄豪傑が夢にまで見た京の支配権を握られたのでございます。

将軍を岐阜城下に迎えて、わずか二ヵ月後のことでした。

そして翌年の永禄十二年、足利義昭様は京に落ち着かれ、信長様の功績を賞でて副将軍の地位を与えようとされたのです。もっとも、天下に志を秘められていた信長様は、それを堅く辞退され、ほうびとしては交通の要衝である大津、草津、堺に代官を置くことを願い出て

許されただけでした。名を捨てて実を取られたのでございます。この三つの町には物資が多数集まり商売も盛んで、ここを支配することは織田家の財政に計り知れない利益があったのでございます。

ところで、この年こそ、わたしどもキリシタンには記念すべき年と申せましょう。

この年の四月、われらが師パードレ・ルイス・フロイス様が、信長様から国内でのキリスト教布教を許されたのでございます。それまで悪魔の教えだの、邪教だの——散々悪口雑言を浴びせられ、何度願い出ても許されなかった布教が、ようやく許されたのでございますから、信徒一同まさに天にも昇る心地だったと聞いております。

信長様御自身は決して信者になられようとはされませんでしたが、西洋の文物や新知識がことの他お好きな御様子で、そのようなことから布教をお許しになったのだと、あとからわたしどもにはわかりました。

とにかくこの世に信長様ほど、魑魅魍魎と申しますか怪力乱神と申しますか、納得のいかないこと不合理なことがお嫌いな方はいらっしゃいません。

これは後の話でございますが、わたしどもの仲間が信長様にアフリカ国の方に住む肌の黒い男を献上した際、信長様はまやかしではないかとお疑いになり、かの男の黒い肌をごしごしと洗わせ色の落ちぬのを見てようやく納得されたということがございました。

また、御若年の頃、尾張清洲の近くの池に大蛇がぬしとして住みついていると耳にされると、早速その池に出向き水を掻い出させ、一向に水が減らないと見るや、白刃を口にくわえて飛び込み探し回られたという逸話もございます。

このため生国の尾張でも、新たに本拠を置かれた美濃でも、このごろは京の都にまで、信長様の一風変った御性格が知られるようになってきたのでございます。

このような御性格ですから、信長様は特にあの悪らつな仏僧どもを嫌われておりました。

仏僧どもは口では戒律を唱え、人々に信仰を強いていながら、裏では女人と交わり財貨を蓄わえ、信心などまったくございません。

そのため仏僧どもは、厳しい修業を積み人々を救うことに全身全霊を打ち込んでおられるパードレたちに、激しい反感と脅威を抱いていたようでございまして、あの事件もそうした仏僧どもの憎しみが生み出したと言えるのかもしれません。

## 二

その年の四月、京に滞在中の信長様がフロイス様に布教の許可を与えて間もなくのことでした。

京の西、嵯峨野の近くに小さな不動堂がございました。近くの山の名をとって静山不動と呼ばれていたようでございます。

不動堂と申しますのは、御承知の通り不動明王という仏を祭る堂でございまして、この堂に鎮座する不動は霊験あらたか諸願を成就させるというので、民百姓のみならず武士の信仰をも集めておったのでございます。

不動明王と申しますのは、異教の神でございますのであまり詳しくは存じませんが、その像容を簡単に申し述べますと、右手に利剣を左手に索を持ち顔は激しい忿怒の相をなしております。そして岩のような荒々しい台座にどっかりと腰をおろし背中には火炎を背負って半裸の姿で虚空をにらみつけておるのでございます。

問題はこの右手に握られた剣にございました。これは悪を打ち倒す象徴としての剣だそうでございまして、倶利迦羅剣とも申すようでございますが、この剣が誠に奇怪なことながら人を殺したのでございます。

殺されましたのは織田家の家中で下山三左衛門と申される馬廻り三百石の武士で、大剛の士と評判の方でした。

この下山殿が信長様の命令で山城国大原野へ使者として出向かれ、その帰りに知り合いの寺へ寄られたあとの出来事だったようでございます。

下山殿は街道の真ん中に仰向けに倒れ、その胸には深々と例の不動の利剣が突き刺さっておりました。

もちろん下山殿は完全に絶命しており、その胸は流れ出した血で一面真紅に染っていたということでした。

早速、知らせを受けた織田家の方々が駆けつけられて、下手人の詮議に入られました。

「届け出た者は誰だ」

一同の中で、眼光鋭く全身真っ黒に日に焼けた小男の武士が大声であたりに問いました。

京都の市中警護を信長様から命じられた木下藤吉郎秀吉という御方でございます。

木下殿の問いに答えて、一人の百姓が進み出ました。

「その方か、まあ、そんなに恐がらんでもええ」

道端に平伏する百姓に、木下殿は親しみのわく穏やかな微笑を浮かべて歩み寄られました。木下殿が笑うと、まるで山猿のような面白い顔になるのでございます。

それを見て百姓もほっとしたような表情になりました。

「いつ見付けたのじゃ」

木下殿はすかさず優しい声でお尋ねになったのでございます。

「へえ、夜明け少し前でございます。畑仕事に出るところでしたので」

「ふむ、それでこのように下山氏は倒れておったのか」

「左様で」

「他に人の姿は見なんだか」

「いえ、どなたも見かけませんでございます」

木下殿はあらためて下山殿の死体に深々突き刺さっている剣をじっとごらんになりました。

剣と申すからには両刃でございます。

日本の刀とは異なり、反りがなく真っすぐで、両側に刃が付いております。実はこれは西洋の騎士たちが使う剣にもよく似ているのでございますが、木下殿はこの時、このような剣をごらんになるのは初めてだったので、しばらく首を傾げられたということでございます。

「妙な形をしておるな」

木下殿は呟きました。

そして、柄を握りしめると、えいとばかりに剣を引き抜きました。

その剣は鉄ではなく青銅で作られており、長さは二尺ばかりでございました。

木下殿はそれを陽にかざし、何度も引っくり返したりして、仔細に調べておられました。

するとその時、周囲を取り巻いていた群衆の中から、一人の山伏が歩み出て木下殿の面前に現われました。

「卒爾ながらお頼み申す」

山伏は木下殿に野太い声で言ったのでございます。

「その方は何者だ」

木下殿は相変らず穏やかな調子で尋ねられました。もともと物腰の柔らかな方ですし、信長様から京の住人の反感を買ってはならぬ、言葉遣いにはくれぐれも注意するようにと申し渡されていたこともございます。京の住人にとって信長様の兵は言わば闖入者でございますから、天下の人心を収攬するためにもそのことは必要なのでございました。

木下殿から素姓を尋ねられた山伏は、

「静山不動堂の堂守、金剛坊円海と申す者」

と胸を張って答えました。

「ほほう、して、願いの趣きは？」

「その倶利迦羅剣でござるよ」

山伏は細い目で木下殿の握っている剣を見つめながら言いました。

「これを？」

「左様、ぜひお返し願いたい」

木下殿の顔面から微笑が消えました。

「すると、この剣はそなたのものか？」
木下殿ばかりでなく配下の方々も刀の柄に手をかけて山伏を取り囲む形となりました。
山伏は、年の頃は四十を少し過ぎたほどでしたが、にやりと笑って、
「いや、それがしのものではござらぬ」
と答えました。
「奇怪な申し条である。それなら何故返せと言うのだ」
「その利剣は、それがしのお仕えする不動尊の持物でござる。ぜひお返し願いたい」
山伏はそう言って頭を下げたのでございます。
円海と申すこの山伏の申し立てるところによれば、その二尺余りの青銅の利剣は、静山不動堂に鎮座する不動明王像の右手に握られていたもので、昨晩は確かにあったのにきょうの夜明けに行に入るため円海が堂に入ったところ既に失われていたということでございました。
「すると何者かが剣を不動堂から盗み出し、それで下山を刺したということか」
木下殿はもう一度その血のべっとりとついた不動の剣、悪を祓い正義を行う破邪の剣に鋭い視線を当てられ、
「しかし、何故このような剣を使ったのだ」
と呟かれたのでございます。

## 三

木下殿は下山殿殺害に関して、一通りの調べを済まされたあと、京の本圀寺を宿所とされていた信長様に報告をなさいました。
信長様は奥の座敷で木下殿を引見し、詳しい報告を求められました。
信長様も、この奇怪な事件にいたく興味を示されておいでになりました。
「これが不動の剣か」



と信長様は木下殿から差し出された剣を手に取ってしげしげとながめられました。剣の血糊は拭ってあったとはいえ、薄く曇りが残っております。
「猿、それで下手人の見当はついたのか？」
信長様は独特のカン高い声でお尋ねになりました。
「いえ、いまだ見当がつきませぬ」
木下殿は恐縮して答えました。
「下山に恨みを含む者の仕業か、それとも、この信長への当てつけか」
「いずれとも決めかねまする」
「猿、手ぬるい」
信長様は額に青筋を立てておっしゃいました。
「さらに詳しく吟味せい。そして一刻も早く下手人をひっ捕えるのだ。よいか、しかと申しつけたぞ」
木下殿はそれを聞くと、脂汗を流したまま蛙のように平伏し、すぐに調べに向かいました。
信長様が苛立たれるのは理由があります。
将軍義昭様を擁し、諸大名の宿願である上洛を果された信長様は、京の人心の安定を第一に考えておられます。
京は世間の評判の源、世に京童の口ほど恐しいものはないと申します。ここで奇怪な事件を未解決のまま放り出せば、織田政権の将来にさしつかえるのでございます。
木下殿もそれはよくわかっておいでした。
だからこそ、困ったのです。
一刻も早く解決しなくては、天下の織田軍団の侍を殺した下手人一人つかまえられぬということになり、天下布武、天下統一など夢のまた夢でございます。
木下殿はそこで、義弟の浅野長政殿や腹心の蜂須賀小六殿にも命じ、再び一件の調査を命じたのでした。
もとより木下殿は初めの調べで手を抜いたわけではございません。
それどころか、下山殿に恨みを抱く者、或いは織田家に仇をなさんとする者、この両面から調べを進め、手の

人形じゃぞ。人形にどうして人が殺せる」
木下殿はまじまじと小者の顔を見つめ、呆れたように言いました。
この点、織田家の侍というのは他国者とはまったく違っております。
なにしろ御主君の信長様が不合理なものは一切受け付けぬという御気性ですので、自然御家来衆も神信心をなさらぬ方が多うございます。
そのうちでも特に木下殿は信長様を見習ったのか、物の言い方まで信長様に似通ってきたのでございます。
「左様で、確かにわたくしめもおかしいと存じますが、巷ではそのように言っておるのでございます」
小者はあくまで言い張りました。
「一体どうして不動が下山殿を討たねばならんと申すのだ」
木下殿はうんざりしたように尋ねました。
「それが、その……」



者を縦横に走らせておりました。
しかし、何の手がかりも得られず空しく数日が過ぎたのでございます。

## 四

しばらくして京の巷に不思議な噂が立ち始めました。
下山殿を殺したのは、あの静山不動堂の不動明王だというのでございます。
「何、阿呆なことを申すな」
その噂を初めて耳にした木下殿は、配下の小者を怒鳴りつけました。
「いえ決して偽りではございません」
小者は答えました。
「下山様を討ち果したのは、あの不動様じゃと、どこでも寄るとさわるとその噂でございます」
「ぬしゃ、わかっとるのか。不動といっても木でできた

小者は突然口ごもりました。
木下殿は怒鳴りつけると、
「かまわん、申せ」
と先をうながしました。
「――京に殿様の兵が入ったのが気に入らぬと、あの不動が剣を抜いて……」
小者は蚊の鳴くような声で言いました。
木下殿は顔色を変えて、
「殿様のことが気に入らぬと不動が家来を殺したと、そのように噂になっておるのだな」
と質しました。
「はい、左様で」
小者が頷くと、木下殿は腕組みして、
「うーむ、これは容易ならぬ」
と一言呟き、ただちに信長様のもとへ報告におもむかれました。
「なんじゃと、猿、それはまことか」
ちょうどフロイス様と西洋の新知識について話しておられた信長様も、木下殿の報告に眉をひそめられました。
「猿、わかっておるか」
信長様は脇息にもたれかかり、木下殿に尋ねられました。
時々、信長様は家来の機転を試されるためにか、こういうおっしゃり方をなされるのです。
木下殿は人一倍機転のきく方でございますので、信長様のいわんとする所がすぐにわかりました。
「はい、まことに由々しき事態でござります、おそらくは織田家の評判を落とさんとする者のたくらみかと拝察致します」
「よう見た」
と信長様はまずおほめになりました。
「一刻も早く下手人を捕えい。わが家臣を殺害し、それを仏罰のたぐいとほざく奴は許せぬ」



「はい、かしこまりましてございます」
木下殿は一礼すると、
「ところで、殿。あの不動堂はいかが致しましょうや」
と尋ねました。
「火をかけると申すか」
「御意」
「それはならぬ」
意外にも信長様は不動堂を燃やすことはお許しになりませんでした。
木下殿が物問いたげに信長様を見ますと、信長様は笑って、
「燃やすのはたやすい。だが、下手人は不動ではあるまい。ならば真の下手人を捕えてそのまやかしを暴くことが肝要じゃ。不動を燃やしたところで無用の騒ぎを招くだけじゃ」
とおっしゃいました。
ようやく木下殿にも信長様の胸中がわかりました。
信長様は、堂を燃やすことによって民衆の反感を買いたくはなかったのでございましょうし、不動を恐れて燃やしたとも思われたくはなかったのでございましょう。
いずれにせよ、この一件、織田家を敵と狙うものの仕業に相違ございません。
織田家の敵と申せば、京で天下布武の志を示した今となっては、六十余州すべての大名と申してもさしつかえございませんが、強いて挙げれば、越前の朝倉氏、大和の筒井氏、山城の三好氏、それに信長様に領地を奪われた美濃の斎藤龍興、近江の六角承禎などになりましょうか。
まさに敵が多過ぎ心当たりが多過ぎて、どうにも見当のつかない有様だったのでございます。
そこで木下殿は御供の方を数人連れて、問題の不動堂に向かいました。
堂守の金剛坊円海に色々問い質してみようというお考えだったのでしょう。
不動堂は小高い丘の中腹にございました。

あたりは暗く陰気な様子の森となっており、その間を縫うように細い石畳の道が、丘の上へ続いておりました。

木下殿は丘のふもとで馬を捨てて、御家来衆と共に不動堂に登りました。

堂は三丈四方ほどの小さなもので、正面に三段の階と両開きの格子戸があり、中からダラニを唱える声が聞こえてまいりました。

木下殿が中へ入りますと、奥の不動明王像の前に、あの金剛坊が座り怪しげな法具を手に何やら祈りをささげておりました。

木下殿はそれが終わるのを待って背後から声をかけました。

「金剛坊、ちと尋ねたいことがある」

金剛坊は傲然とした態度でゆっくりと振り返りました。

木下殿がふと気が付きますと、不動像の右腕には例の剣がしっかり握られ不気味に光っております。

「どなたでござる」

金剛坊が訊きました。

木下殿は堂内に腰をおろすと、

「見忘れたか、木下藤吉郎秀吉じゃ」

と名乗りました。

「この間の御方じゃな。して、きょうは何用で参られた」

金剛坊はにこりともせずに申しました。

「不動が利剣を握っておるな」

木下殿は直接問いには答えずに、堂内で不気味に鎮座する不動像を指さして言いました。

「いかにも、不動尊が利剣を握るのは当然でござる」

「この前の剣、まだ返しておらぬ筈だが」

「すぐに新しいのを作り申した。当分、お返し頂けぬようなのでな」

「この前は返せとえらい見幕だったが、代りの剣でよいのか」

「――いずれお返し頂ければ、元の剣に戻しまする」

「ふむ」

木下殿はすくと立ち上がって、つかつかと不動の前に歩み寄ると、それをじっと眺めました。

高さは丈六（一丈六尺）ほどもあり、忿怒の形相すさまじく、仏像としてはなかなかの作品だったということでございます。

「御坊、この不動が下山三左を殺したと巷の噂じゃそうな」

木下殿は後ろで腕を組んだまま振り返りもせずに言いました。

金剛坊は無言のまま答えません。

「どうした、何か申し開きをせぬのか」

木下殿の催促に、金剛坊は不気味な笑いを口元に浮かべ、

「あるいはそうかもしれませぬ」

と申しました。

「何、なんと申した」

木下殿は驚いて振り返りました。

金剛坊はふてぶてしくも、

「織田家に対し奉り、申し上げにくいことではございますが、どうも――お気に召さぬようで」

と答えました。

「気に召さぬ――とは、不動がか？」

「左様」

「そのようなこと、まさか本気で申しておるのではあるまいな」

木下殿は言いました。

しかし、金剛坊は首を振り、

「亡くなられた方にはお気の毒でござるが、おそらくは不動尊の怒りに触れるふるまいがあったのではございますまいか。破邪の剣で刺されたのがその証拠でござる」

と頑固に申し立てました。

「何を下らぬことを」
「下らぬことではござりませぬ」
木下殿は金剛坊の態度に怒りを爆発させました。
「いい加減にせい。不動と申しても、人が作った木像にすぎぬ。木像にすぎぬものが人を刺せる道理がない」
金剛坊は黙って木下殿の怒声を聞いておりましたが、木下殿の興奮が収まるのを待って顔を上げると、
「しからば試してみられれば如何？」
と傲然とした態度で言い放ちました。
「どのように試せと申すのだ」
木下殿は金剛坊の意図を測りかねて尋ねました。
「しかるべき士を選ばれよ。その方にこの堂内へ籠って頂く、余人は混えず、一人でこの中に入って頂きたい」
「その者に不動と対決させよ――と申すか」
「左様、もし木像に過ぎぬとお考えならば何も不安はなく、どのような不遜なふるまいをも躊躇されることはありますまい」
金剛坊の言葉はあからさまな挑戦でした。
もし、あくまでも不動の霊験を信じないならば、堂内に入って不遜なふるまいをしてみろと言うのです。木像だと決めつけるなら、仏罰を恐れることもないだろう――勇気があるならやれとそそのかしているのでございます。もちろん、このように言う金剛坊は、何らかの仏罰が対決者に下されることを信じて疑わないのでございましょう。
「この不動、確かに仏罰を下すか」
木下殿は不動を鋭い眼光でにらみつけました。
金剛坊は黙って、それを見つめていたそうでございます。

## 五

「わたくしがその堂に入りましょう」
そう申し出たのは、わたくしどもキリシタンの信者の一人、ジョアン是斉殿でございました。
ジョアン殿は元は四国のさる大名の御家来で、槍の名手とうたわれた武士でございましてちょうど四十の賀を迎えたばかりでした。
木下殿が金剛坊の不敵な挑戦を信長様に報告した際、パードレ・フロイス様の従者として脇に控えておられたのでした。
「その方が引き受けると申すか」
信長様は意外そうにおっしゃいました。
「はい」
ジョアン殿は静かな声で答えました。
「いや、しばらくお待ち下され、これは織田家の問題でござる。わたくしの家来にお任せ下さい」
と木下殿が異議を唱えました。
ジョアン殿は微笑して、
「いや、わたくしにお任せ下さい。もともと、わたくしどもは仏罰だの迷信などは信じておりませぬ。むしろ悪僧どもが無知な民衆をだまし銭をまき上げるのを苦々しく思っておるのでござる。ここはぜひともわたくしに」
「しかし、それは」
と木下殿がさらに異議を唱えようとしますと、
「待て、藤吉郎」
と信長様から声がかかりました。
「キリシタンと悪僧どもの対決も面白かろう。やらせて見るがよい」
信長様の御決断に木下殿も引き下がる他はございません。
こうして、ジョアン殿は異教の神と不可思議な対決をすることになったのでございます。

## 六

「バテレンと不動様が法力比べをするそうな」
京の巷にこのような噂があっという間に広まったので

ございます。

ジョアン殿はパードレから白の修道服を借り、胸には大きな十字架のついたロザリオをかけ、いつもと変らぬ平静な面持ちで堂内に入られました。

堂のある丘の周囲には見物衆が大勢つめかけておりましたが、木下殿の手勢にはばまれ堂の近くには近寄ることができないようでございました。

金剛坊はと申しますと、堂内に入るジョアン殿を冷やかな笑いを浮かべた顔で見送り、ジョアン殿が不動像の前に座ってキリシタンの祈りを始めますと、さっさと山を降りてしまったのでございます。

ジョアン殿はひとしきり祈ると、木下殿を呼び何事か耳打ちしました。

木下殿は頷くと、御家来衆に命じて見物衆を招き入れたのでございます。

およそ二百人ほどいたということでございますが、見物衆がぞろぞろと堂の前に集まった時、ジョアン殿は堂の外へ出て人々に呼びかけました。

「皆の衆、よく聞いてもらいたい。坊主どもの申す、仏罰とか利益とかの類いはすべてまやかしである。その証拠をこれから見せよう。もそっと近寄るがよい」

ジョアン殿の言葉につられて、人々が堂の階の下まで押し重なるように集まってまいりますと、ジョアン殿は堂の中へ大股で入っていくと、いきなり本尊の不動に唾を吐きかけ激しくののしったのでございます。

人々は呆気にとられてジョアン殿の行為を見ておりました。中には〝罰当たりめ〟とか叫ぶ者もおりましたが、中へ飛び込んでやめさせようとした者は木下殿の手勢にはばまれたようでございます。

「よいか、わしは今夜一晩この堂に一人で籠る。もし、仏罰とやらがあるなら、わしに当たらぬ筈はない。だが、一晩すぎても無事なら、仏などというものはすべてまやかし、亡くなられた織田家の侍も仏罰に当たったのではないとわかろう」



ジョアン殿は自信たっぷりに言い放つと、堂内へ戻り不動の前にどっかりと腰をおろして祈りの言葉を唱えられたのでございます。

## 七

夜がやって参りました。

ジョアン殿は相変らず不動の前に座っていらっしゃいました。

堂の両開きの格子戸は一応閉められておりましたが、境内にはあちこちに篝火がたかれ、木下殿の配下の方が油断なく見張っておられました。

もちろん〝仏罰〟にことよせてジョアン殿に危害を加えようとする者があれば、すぐに引っ捕えるかまえだったのでございます。

木下殿も寝ずの番をしておりました。

堂内はジョアン殿一人ですから、何の心配もいりませんが、外からは何者かがジョアン殿を狙ってやってくる恐れがございます。

木下殿は堂の扉の前に陣取り、いささかの油断もなくあたりを見張っておりました。

子の刻を過ぎる頃でございました。

堂内から突然ジョアン殿の獣じみた叫び声が聞こえてきたのでございます。

木下殿は慌てて太刀をつかみ、扉を開いて中に入りました。御家来衆も後に続いたのでございます。

そこで木下殿は信じ難い光景を見たのでした。

ジョアン殿が仰向けに倒れ、その腹にあの不動の剣が突き刺さっているではありませんか。

木下殿はジョアン殿を抱き起こし、

「しっかり致せ、傷は浅いぞ」

とはげましました。

しかし、ジョアン殿は激しい苦痛にうめき声をあげ、堂内の不動にまさるとも劣らぬ怒りの形相で、

「おのれ、裏切り――」
と一言だけ言い残し息絶えたのでございます。
思いもかけぬジョアン殿の死に動転した木下殿も、すぐに気を取り直して御家来衆を叱咤し、堂内や境内をくまなく探させましたが、誠に不思議なことに猫の子一匹見付からなかったということです。
もちろん、あの不動の右手からは剣がすっぽりと抜けており、不動は激しい忿怒の表情のまま堂内の騒ぎを見おろしていたのでございます。

## 八

夜明けになって報告にはせ参じた木下殿を待っていたのは、信長様の激しい叱責でございました。
「猿、一体何をしておるのだ、不手際だぞ」
「――面目次第もございません」
木下殿は冷汗と共に平伏しました。
「阿呆めが、何をしておるのだ。猿、もう一度詳しく話してみい」
信長様はおっしゃいました。
そこで木下殿は要領よくしかし綿密に昨夜の出来事を説明しました。
「――それにしても合点がいきませんのは、あの堂内には誰も入れなかった筈であるのに、誰がどのようにしてジョアン殿を殺すことができたのかということでございます」
木下殿は何度も首を傾げました。
堂の周囲は御家来衆で固めておりましたし、堂内にはジョアン殿の他には誰もいなかったことは確かなのでございます。もちろん床下も天井にも人が忍び込んだような様子はございませんでした。
「ジョアンのむくろはどうした?」
信長様は突然尋ねられました。
「はっ、とりあえず持参致しましてござりまする」



「よし見よう、ここへ運べ」
信長様の命令で、ジョアン殿の死体が戸板に乗せられて庭に運ばれて参りました。
白の修道服が赤い血で染っております。
かたわらにはジョアン殿を絶命させた呪うべき悪魔の剣が置かれてありました。
信長様は庭に降りてこられ、夜明けの薄明りの中で、死体を念入りに検分なさいました。
「傷は浅いではないか、どうして、これで死んだのだ」
信長様は首を傾げられました。
確かにおかしかったのでございます。
例の不動の剣はほんの一寸ほど体に食い込んでいただけでした。胸ならば致命傷になるかもしれませんが、腹の場合は一文字にかき切ってもかなり長い間生きていられるということでございまして、この程度の傷では即座に死ぬということはあり得ません。
「刃に毒が塗ってあるのではないのか」
信長様は剣を手に取っておっしゃいました。
木下殿も頷きました。
悲鳴が上がってから絶命するまでが、あまりにも短かすぎました。
「誰か毒に詳しい者はおらぬか?」
「はっ、拙者の配下に堀尾茂助という美濃の猟師のせがれがおります」
「その者を呼べい」
信長様の命令で早速に茂助殿が御前に召し出されました。
面長で浅黒い若者は緊張を全身にあらわして信長様の前にやって参りました。
「茂助、この死体を見よ」
信長様はおっしゃいました。
茂助殿は若者らしい、きびきびとした動作で、死体を恐れる様子もなく近寄り、仔細に観察しました。
「どうじゃ、茂助」

信長様の問いに茂助殿は、
「トリカブトの毒でございます」
と死体の肌の色を見ながら答えました。
「トリカブト？」
「はい、花の根から取れる猛毒でござります。毒矢にすれば熊をも打ち倒せるほどにござります」
かしこまって茂助殿は答えました。
「苦労であった、下ってよい」
信長様は満足気に頷かれると、木下殿に向かって、
「猿、ジョアンはいまわの際に何と申したのであったな？」
「はっ、確か、〝おのれ、裏切り〟とか申しましたが、――これはいかなる意味でございましょうや」
木下殿は答えました。
「裏切り、裏切り――か」
信長様は二、三度指で額を叩かれ、
「確かに堂内に人はおらなんだのだな？」
と念を押されました。
「まちがいございません」
木下殿がそう言い切りますと、信長様は、
「それはよい。だが、何故そのようなことをしたか――だ」
と謎めいた言葉を口にされたのでございます。

## 九

その日の夕方、木下殿は信長様のお召しを受けて本圀寺に向かいました。
木下殿はあれから散々市中を探索したのでございますが、何の手がかりもなしでは雲をつかむような話で、ついにさじを投げたところでございました。
信長様は本圀寺奥の書院で木下殿の現われるのを今や遅しと待っておられました。
「猿、来たか」



信長様は夜明けの時と違って、大変な御機嫌でした。
「殿、誠に面目ございません。一刻も早く下手人を引っ捕える所存でございますが、今しばらくお待ち下さい」
木下殿はいつ雷が落ちるかとひやひやしながら、ぺこぺこと頭を下げました。
「よいのだ、猿」
信長様はにやにやしながら、別のことをお尋ねになりました。
「ところで不動の方はどうした、見張りは置いておるか？」
「はあ？」
木下殿は不審そうな面持ちとなりました。
今さら不動に何があるというのでございましょうか、まさか不動が下手人というわけでもございませんでしょうに。木下殿は信長様の真意を測りかねておりました。
「一応、配下の者を置いてございます」
「よし、ではそこへ参ろう」
「不動堂へでございますか？」
木下殿はびっくりして問い返しました。
「そうだ。供をせい」
信長様はさっさと立ち上がると、近習の者に命じて馬の仕度を命じられました。
「ところで、金剛坊なる者はどうした」
愛馬に自慢の鞍を置かせながら、信長様は木下殿に尋ねられました。
「昨日から行方が知れませぬ。申しわけもございません」
と木下殿は平身低頭のありさまでした。
信長様は珍しくもそれを咎めず、
「そちにしては手抜かりであったな。まあよい、すぐに片が付く」
とおっしゃり、ひらりと馬にまたがるとまっすぐ例の不動堂へ向かわれたのでございます。

# 十

不動堂は木下殿の配下によって周囲を固められておりました。

物見高い京童が、キリシタンとの法力比べに勝った不動を一目見ようと押しかけたそうでございましたが、ことごとく木下殿の配下に追い返され、夕刻になってからは見物人もなく境内は静寂を取り戻しておりました。

そこに信長様が木下殿他わずかな供を連れて荒々しく馬で乗り込んだのでございます。

突然の殿の御来駕に見張りをしていた侍は、あわてふためき信長様をお迎えしました。

信長様は馬を降りられると、御愛刀の不動国行を腰にたばさみ、つかつかと堂に歩み寄られました。

「これか、人騒がせな不動の住まう所は」

信長様はそうおっしゃると、近くの者に命じて堂の扉を開かせました。

そして御自分は堂にお上がりにならず、鬼神もふるえあがるような鋭い目付きで堂内の不動をにらみつけられました。

そのまましばらくの間、不動をにらみつけた信長様は、やがて木下殿へ振り返って、

「猿、この中でジョアンは刺されたのだな」

と尋ねられました。

「はい、左様でございます」

木下殿は答えました。

信長様はまた無言になり、右手の剣を失った不動明王の像を、堂の外からじっとにらみつけておられましたが、やがて何か決心がついたように頷くと、刀の柄に手をかけて階を上られました。木下殿があわててあとに続きました。

「なるほど、そちの申す通り床にも天井にも人が出入りできるような入口はない」



と信長様は大声でおっしゃいました。床は板敷、天井は梁がむき出しになっており、堂は扉以外の出入口がない一種の箱のようなものになっていたのでございます。

信長様は声の大きさとは裏腹に、まるで何かに用心しているかのように、ゆっくりと板敷の床を、一歩一歩踏みしめるように、不動へ向かいました。

そして愛刀をそろりと抜き、木下殿には声を出さぬよう目で合図をされたのでございます。

木下殿はその時、信長様が不動像を一刀両断になされるのかと思ったそうですが、それはまったくの見当違いでした。

信長様は大刀を逆手に持つと左手を添え、うって変って素早い動作で思い切り板敷の床に突きさしたのでございます。

到底形容できないような断末魔のうめきが床下から聞こえて参りました。

両手で柄がしっかと握られている信長様の刀がぶるぶると震えておりましたが、やがて床下の曲者は息絶えたようでございます。

「猿、床板をはがしてみい」

信長様は刀を引き抜くと、べっとりと切っ先についた血糊を近習に拭わせました。

木下殿は慌てて配下を指図して、そこのところの床板を小刀や槍を使ってはがしたのでございます。

「こ、こりゃ金剛坊ではないか、いつの間に床下に」

木下殿ははがし終わると目を丸くして叫びました。

まさしく、あの金剛坊円海なる怪しげな山伏が、肩口から心の臓を刺し通され、無念の形相で手槍を持ったまま、息絶えておったのでございます。

「こやつ、いつの間に」

木下殿は狼狽しておりました。

信長様は笑って、

「見張りの目を盗んで裏側からでも忍び入ったのであろうよ」

と事も無げにおっしゃいました。
「しかし、殿。すると、昨夜のジョアン殿殺害もこの男の仕業でございますか」
木下殿は何が何だかわからなくなっておりました。
「そうでもあり、そうでないとも言える」
信長様は笑顔のまま謎めいたお答えをされました。
「……？」
「よく考えてもみよ。昨夜、もしきゃつが床下に忍んでおったところで、床板が邪魔してジョアンを刺すことはできまい」
信長様はおっしゃいました。
確かにその通りでございまして、ジョアン殿は不動の剣で刺されておったのでございます。その剣はジョアン殿が刺される時まで不動の手中にあった筈ですし、床下に忍び込んだ金剛坊が何らかの手段で剣を手に入れたとしても、そこからは床板が邪魔して刺せません。
第一、木下殿はジョアン殿が刺されたあと、堂内を念入りに検分しておりますが、堂内からはどこにも外へ出る口などはなく、床の造作もしっかりしておりました。
しかも、そのとき念の為に床下も外側から調べて、人影がないのを確認した筈でございました。
「殿、一体これはどういうことでございましょう。藤吉郎めにはさっぱり合点がいきませぬ。金剛坊は一体どうやってジョアン殿を殺害致したのか、また、何故金剛坊はこのような場所に潜んでおったのか。どうかお教え下さいますよう」
木下殿はそう言って堂内の板敷の上で平伏なさいました。
信長様は得意そうに破顔一笑され、
「簡単ではないか、ジョアンが刺された時、堂内には他に誰もおらなんだのであろう？」
「はい、その、何と申しますか、不動の他には」
木下殿は答えました。
「たわけたことを申すな。木の像が人を刺せるわけがあるまい」
信長様は案外穏やかな声でおっしゃり、
「誰もおらず、誰も入れぬ堂内にいた男の腹に剣が刺さっておった、――となれば明白ではないか」
と付け加えられました。
「と申しますと」
けげんな顔で木下殿が問い返しますと、信長様は、
「知れたこと、ジョアンが自分で自分の腹を刺したのだ」
とおっしゃったのでございます。
木下殿は驚きのあまり口をあんぐりと開け、信長様の顔を思わず見つめられました。
「で、では、ジョアン殿は腹を切ったのでございますか？」
「そうではない。ジョアンは確かに腹を刺した。だが死ぬつもりはなかった。きゃつは剣にトリカブトの毒が塗られておるのを知らなかったのじゃ」
信長様の言葉を何度も頭の中で反芻して、木下殿はようやく真相に気付きました。
「それでは金剛坊とジョアン殿は初めから組んでおったのでございますか」
「組んでおったのはまぎれもない。だからこそ、ジョアンは打ち合わせた通りに腹を刺し、そして手傷だけで済む筈だったのだが、死ぬ間際に毒が塗ってあることに気付き思わず〝裏切り〟とののしったのだ」
「しかし、何故にそのようなことをしたのでございます」
木下殿の疑問はもっともでした。
いかに手傷で済ますつもりだったとはいえ、自ら腹を刺すなど尋常なこととは思えません。
「それが肝心なところよ、猿。誰がジョアンを刺したかなどは、そちの報告を聞いてすぐにわかった。だが、何故そのような真似をするのかがわからず、きょう一日考えておったのだ」

信長様はそうおっしゃると、木下殿に、
「そちはわかるか？　金剛坊のたくらみが？」
と尋ねました。
「――不動の霊験を世の中に喧伝するためでございますか」
木下殿は自信無さそうに答えました。
「それでどうする？　賽銭でも稼ぐと申すか。それならばジョアンを殺すほどのことはあるまい。むしろ、生かしておき、ジョアンにキリシタンを捨てさせた方が効き目があろう」
その通りでございます。
ジョアン殿が不動の霊威に打たれて改心したとでも噂を広めれば、繁盛すること疑いなしでございます。
「それに不動の霊験を世に知らしめるのなら、何故金剛坊は床に潜んでおったのだ。説明がつかぬではないか」
「それでは、一体？」
木下殿はごくりと生つばを飲み込まれました。
「よいか、猿。金剛坊らの狙いは、この信長であったのだ」
信長様は自信あり気におっしゃりました。
「それは一体どういうことでございますか？」
木下殿は驚いて訊き返しました。
信長様は悪童のような笑いを浮かべ、顎をしゃくると、
「わしが不合理なことを憎むほどに嫌うことを奴等は知っておったのだ。そこで人殺し不動の話をでっち上げたのだ」
「……？」
「そうすれば、わしを必ずここへおびき寄せることができる。金剛坊め、わしが矢も楯もたまらずここへ現われるのを見越して、待ち伏せしておったのだ。不動の剣はなくとも、手槍ならば床下から刺せる。その槍にはおそらく毒が塗ってあるのであろう。いわばこれは大きな罠じゃ。わしをおびき寄せるために、餌を仕掛けたのじゃ。もし、その意味を考えもせず、のこのこと現われていたら毒槍の餌食になっておったところじゃ」
一同、信長様の御明察に舌を巻きました。
実際、信長様は好奇心が強く馬で遠乗りされることもよくございましたし、出陣の時も一騎駆けと申しまして大将自らが真っ先に飛び出すのが常でございました。
まして怪しげなまやかしが大嫌いな御性格ですので、この罠がうまく行き、信長様の暗殺が成功してしまう可能性はかなり高かったと申せましょう。
金剛坊にしてみれば騒ぎが一旦おさまり、堂内も床下も詳しく検分されたあと、もう二度と探される恐れのない床下に潜りこんで信長様がいらっしゃるのを待てばよかったのですから。
あとから木下殿が調べたところによりますと、金剛坊のいた床下には人一人が潜り込める穴が掘られてあり、木の蓋の上に土をかぶせれば外からのぞき込んでもわからないようになっていると共に、床下へ見咎められずに入れるよう小さな抜け穴が境内の井戸に通じていたということです。
金剛坊の背後に何者がいたのか、木下殿の懸命な探索にもかかわらず、ついに判然とはしなかったのでございますが、信長様に国を追われた元美濃の国主斎藤龍興が糸を引いていたのではないかという者もおりました。
何しろ、あのカラクリで有名な「飛騨の匠」を生んだ飛騨の国と美濃の国は山一つ隔てただけの隣り同士なのでございますから。
危うく虎口を脱した信長様でしたが、その後もお一人で気軽にお出かけになる癖はなかなか直らなかったということでございます。

# 裁かれたアドニス

# 一

これは信長様が、まだ参議になったばかりの頃、当時の領国美濃国岐阜にいらした時のことでございます。

天正三年と申しますから、我々の暦で申しますと一五七五年、ちょうど信長様が四十一歳になられた年でございました。

我等が師ルイス・フロイス様は既に信長様からキリスト教布教のお許しを頂いており、時々は岐阜城に伺い、西洋の新知識などを御伝授申し上げておりました。

そして、当時信長様の居城岐阜城は豪壮華麗にして三国無双の宮殿であると、大層な評判でございました。

フロイス様がイエズス会本部に書き送った報告の中には、岐阜城の様子が詳しく述べられております。

かいつまんで御紹介致しましょう。

「宮殿は非常に高い山の麓にあり、その山頂に彼の主城がある。驚くべき大きさの切断されない石の壁（石垣）がそれを取り囲んでいる。第一の内庭には、劇や公の祝祭を催すための素晴らしい材木でできた劇場風の建物があり、その両側には、二本の大きい影を投ずる果樹がある……」

初めてフロイス様が岐阜を訪れたのは、六年前のことでございますが、そのとき信長様はフロイス様に、

「パードレよ、わしは南蛮の建物と比べて見劣りするのではないかと案じているのだが――」

と声をかけられ、非常に美しいその城を自ら案内されたそうでございます。

フロイス様の報告書の内容を続けましょう。

「部屋、廊下、前廊、内部の居室は数が多いばかりでなく、はなはだ巧妙に造られ、もはや何もなく終りであると思われるところに、素晴らしく美しい部屋がある。私たちは、広間の第一の廊下から、すべて絵画と塗金した屏風で飾られた約二十の部屋に入るのであり、人の語ると

ころによれば、それらの幾つかは、内部においてはことに、他の金属を何ら混用しない純金で縁取られているという。その周囲には極めて上等の材木でできた珍しい前廊が走り、その厚板地は燦然と輝き、あたかも鏡のようであった。前廊の壁は、金地にシナや日本の物語を描いたもので一面満たされていた。この前廊の外に、〝ニワ〟と称する極めて新鮮な四つ五つの庭園があり、その完全さは日本においてはなはだ稀有なものである。それらの幾つかには、一パルモの深さの池があり、その底には入念に選ばれた鏡のように滑らかな小石や、目にも眩い白砂があり、その中には泳いでいる各種の美しい魚が多数いた。下の山麓に溜池があって、そこから水が部屋に分流している。二階には婦人部屋があり、三階は山と同じ高さで一種の茶室が付いた廊下がある。三、四階からは全市が展望できる」

この時、フロイス様が特に印象付けられたのは、信長様の恐ろしいばかりの君主ぶりでございました。

なにしろ信長様の前ではどんな貴人も顔を上げずに蛙のように平伏し、ほんのわずか手を動かしただけで御家来衆は右に左に飛び回るのでございます。信長様は迅速ということを殊のほか愛され、逆にぐずぐずとした動作を憎まれました。このことを御家来衆もよくわきまえられており、そのようなことになったのでございましょう。

申し遅れましたが、〝岐阜〟という城そして町の名は信長様の命名によるものでございます。元々はこの城は稲葉山城、この町は井の口と申しましたが、斎藤龍興から城と美濃国を奪った信長様は、天下布武の志を示すために岐阜という名に改められたのでございます。岐阜とは岐山と同義で、岐山とは唐土で周王朝を起こした一族の発祥の地だそうでございます。すなわち天下を治めんとする信長様の野心がこの地名にこめられていたのでございました。

天正三年の春、フロイス様は一人のイタリア人船長を伴って、岐阜城へ入りました。



信長様からの御所望でございました。

カピタンはエンリコ・ジェベノーゼ殿と申し、主に武器を扱う貿易商人でございます。

フロイス様とジェベノーゼ殿を引見された信長様はその日格別に上機嫌の御様子でした。

フロイス様一行は城のある山の麓の宮殿の一室に招かれました。そこからはちょうど梅の咲き誇った庭が見え、花びらが遣水に散り流れる様はこの世のものとは思えぬほどの美しさだったそうでございます。

フロイス様は御供していたローレンソ修道士の通訳で、まずジェベノーゼ殿を信長様に紹介しました。

信長様はせっかちな御方でございます。

開口一番おっしゃったのは、

「カピタン、鉄砲二千挺と硝石が欲しい」

ということでございました。

ジェベノーゼ殿は目を丸くしました。

二千挺と言えば大変な数でございます。

信長様は早くから鉄砲に着目され、おそらく全国の大名の中で最も多く鉄砲を所持されているのではないでしょうか。しかし、それでもおそらく鉄砲の数は二千挺を少し越える程度でございましょう。つまり、あと二千挺増えれば信長様お持ちの鉄砲の数はほぼ二倍になるのでございます。

「いつまでに――でございますか？」

さすがは七つの海を渡ってきたカピタンでした。この大量注文にも顔色を変えずに、ローレンソ様を通して問い返しました。

「五月までだな。硝石はもっと早く欲しい」

信長様は即答なさいました。

カピタンはそれを聞いて首をひねりました。

あと三月ばかりしかございません。

それだけの数を注文して作らせたのでは到底間に合いません。本国に発注するにしても、手続きするだけでそれぐらいはかかりましょう。まして、完成させて納品す

るのは不可能でございます。
カピタンはしばらく考えたのち首を振りました。
「やはり、いかぬか」
信長様は落胆の御様子でしたが、すぐに思い直され、
「では、何挺なら揃えられる？」
とお尋ねになりました。
「――五百挺がぎりぎりでございます」
キャピタンは答えました。
「硝石はどうだ？」
「やはり、五百挺分ほどでございましょうか？」
キャピタンの答えに、信長様は膝を乗り出され、
「硝石だけは何としても二千挺分揃えたい。どうだカピタン、相場の三倍出そう。何とか揃えてくれぬか」
相場の三倍という言葉は、やはりカピタンに相当な影響を与えたようでございまして、彼は長いこと頭の中で計算を繰り返しているようでございました。
「どうだ、カピタン？」
信長様は待ち切れずに言われました。
「何とか致しましょう」
熟考のあげくカピタンがそう言いますと、信長様は満面笑みを浮かべられ、早速酒宴の仕度をお命じになったのでございます。
たちまちその部屋は酒肴が並べられ、美しい着物をまとった信長様の侍女たちが、珍客の接待に姿をみせられたのでございます。
特にジェベノーゼ殿の脇には、御女中の中で随一の美貌をうたわれる楓殿という方がつかれ、ジェベノーゼ殿も大いに喜ばれたということでした。
まだ、梅の盛りの頃でしたので庭から来る風は冷たく、やや肌寒い宴でございましたが、フロイス様もジェベノーゼ殿も美女の酌もあり充分に羽根を伸ばされたのでした。
宴たけなわになった頃、信長様がカピタンにこう言われました。



「どうじゃ、わしに仕えぬか。織田家御用の商人となり、大いに利益をあげてはどうか？」
この申し出をジェベノーゼ殿は微笑を浮かべながらお断りになりました。
「ほう、何故に？」
興味をもって信長様はお尋ねになりました。
「色々な方と商売した方が結局は得なのでございます」
ジェベノーゼ殿の答えに、信長様はからからとお笑いになり、
「よくぞ申した。商いとはそうでなくてはならぬ」
と、言葉を返したジェベノーゼ殿にどんなカミナリが落ちるかと心配していたフロイス様をほっとさせました。
「しかし、カピタン。日本国中を探してもわしほど鉄砲を高値で大量に買いつける大名はおらぬぞ。硝石にしても同様じゃ。どうだ、硝石だけでもわしだけに売ることにしては」
信長様はさらにこのようにおっしゃいました。
実は信長様が鉄砲より硝石にこだわりを見せられるのには理由があります。
あるいは御存知かもしれませんが、鉄砲に使う弾薬の原料となる硝石は、日本では殆ど産出しないのでございます。これらはすべてシャムや大越から船で運ばれてくるので、いかに鉄砲の数を揃えようと、硝石を貿易で取り寄せなければ役に立たないのでございます。
信長様が硝石にことのほか御執着になるのはこのような理由があったのでございます。
「それも出来ませぬ」
とジェベノーゼ殿は再三にわたっての信長様のお誘いを断りました。
さすがに信長様は鼻白んだ御様子でしたが怒りを押さえて笑顔に戻られました。
ここでカピタンを怒鳴りつけても一文の得にもならないことを承知しておられたのです。信長様は天下を取る

ためなら、どのようなことでも耐え忍ぶ御覚悟を固められていたのでございましょう。

例えば、亡くなった武田信玄に対する信長様の態度がまさにそれでございました。

信長様は信玄の生前は絶対に武田氏と事を構えようとはなさいませんでした。

おびただしい進物と共に見苦しいまでのおべっかを使い、信玄の御機嫌を取ったのでございます。

噂では、信長様は信玄の馬の轡を取るとまでおっしゃっていたそうでございます。

この阿諛追従が効を奏し、信長様と信玄の激突はぎりぎりまで回避されました。

そして、ついに信玄が西上の軍を起こした元亀三年（一五七二）、信長様と徳川家康殿の連合軍は遠州三方ケ原で決戦、一敗地にまみれたものの、信玄はその陣中で発病し翌年早く亡くなったことは御存知の通りでございます。これは信長様が信玄とのだまし合いに勝ったと申せましょう。

それ以後、織田家と武田家はいわば断交状態でしたが、いずれは決着をつけなければならず、その日はまもなくのようでございました。フロイス様は、今回の鉄砲の大量注文が対武田戦に備えてのものである、と推測されました。武田は四郎勝頼の時代になっておりましたが、信玄以来の兵は強く特にその騎馬軍団は精強無比、かろうじて対抗できるのは上杉謙信麾下の騎兵ぐらいのもので、信長様の兵では到底勝負になりません。ただ武田軍の装備は一般に旧式で、騎兵の強さによるあまり鉄砲など新兵器の数が少ないのが救いでございます。

「わかったカピタン。とにかく鉄砲を揃えるだけ揃えてくれ」

信長様は改めて念を押されました。

ジェベノーゼ殿は頷き、

「堺の港まではお運び致します。それから先、岐阜までは信長様の手で――」

と申し上げ、信長様も適当な者を受け取りに行かせると快諾なさったのでございます。

それから信長様は、いつもの気難しげな様子を毛ほども見せず、フロイス様やジェベノーゼ殿を手厚く歓待されたということでございます。



## 二

二月末になると、早くもジェベノーゼ殿は鉄砲三百挺を揃え、船を堺の港に入れました。とりあえず手持ちの鉄砲を掻き集めたのでございまして、残りの二百挺と硝石は二日後にマカオから入る予定でございました。

ジェベノーゼ殿は織田家の使者に銃を渡すと、そのまま一緒に岐阜の城までやってきました。彼も一度は信長様の誘いを断ったものの、やはり信長様の御機嫌を損じてはよい商売ができぬと悟ったものでございましょう。

信長様は上機嫌でカピタンを山麓の宮殿で引見なさいました。

カピタンはそこで等身大の大理石の少年像を贈物として信長様に差し上げたのでございます。

「これは珍しいものだの」

と信長様は目を細めて、その大理石の像を見つめられました。

それは西洋人の少年が裸体で片手に花を持って立っている像でございました。眉目秀麗という表現がぴったりの美しい像でございます。

「カピタン、これは何の像だ？」

「アドニスと申します」

「アドニス？」

「左様でございます。美の女神に愛された少年の像で、我々の国の古い話に出てくるのでございます」

「なるほど、では神に仕える童子のようなものじゃな」

と信長様は像のまわりをぐるりと回って、前から後から像の各部分を手でこすったりのぞき込んだりなさいました。

大きくつぶらに開かれた瞳が、柔らかに虚空に向けられ、ふっくらとした唇は魅惑的で思わず石像であることを忘れてしまいそうなほどでございます。

信長様はいたくこの像が気に入られた様子でございます。もともと、西洋の写実的な絵がお気に入りで、いずれ西洋の絵師に肖像画を画かせたいとお漏らしになったこともございます。

信長様は御家来にお命じになり、そのアドニス像を宮殿二階の奥の間に運び込ませました。

アドニス像にしてみれば、思いもかけぬ異国の宮殿の奥の間に飾られることになったわけでございますが、これがあの奇怪な事件のはじまりだったのでございました。

## 三

岐阜城宮殿の奥の間に置かれたアドニス像が、御女中衆の人気を集めました。

外界とあまり接することのない御婦人方には、若く健やかな少年の裸体像が人気を集めたのも無理はありません。像の置かれた部屋は〝南蛮稚児の間〟と呼ばれ、御婦人方が入れかわり立ちかわり訪れるほどでした。

城内で御婦人方に人気があるのは、一にアドニス、二にジュリアン殿でございます。

ジュリアン殿とは、フロイス様の弟子の日本人修道士で、特別に信長様の許可を受け宮殿内に出入りして神の教えを説いていたのでございます。京の名族の御出身で、まだお若く、その整った顔立ちはアドニス像と似通っていると、御女中衆にも評判でございました。

信長様が京に出向かれ、岐阜城を留守にされた三月の



桃の節句のすぐ後のことでございました。

奥女中の楓――あのカピタンをもてなした御女中でございますが、この方が突然お亡くなりになったのでございます。

それも実に奇妙な死に様でございました。

楓殿はその日の夜、お一人であの〝南蛮稚児の間〟に入られました。ちょうど宿直の女中の一人がその後姿を見たのでございます。

そういうことはたびたびあることでしたので、宿直の女中も大して気にもとめずにいたところ、突然、部屋の中から苦しげなうめき声が聞こえ、ふすまをがらりと開けた楓殿が外の廊下に倒れ伏したのでございます。

その女中が慌てて駆け寄りますと、楓殿はもうほとんど意識が無く、抱き起されるとまもなく息を引き取られたのでございます。

「曲者じゃ」

と、その女中が叫び声を上げたのは決して誤った判断とは申せません。つい先程まで何ともなかった楓殿が突然お亡くなりになったのですし、その御様子はいかにも中に曲者がいるような印象を与えたのですから。

城内に曲者が忍び込んだというので大騒ぎになり、普段はあまり男衆の立ち入りが許されない奥の間にも、留守を守る侍たちが集まり曲者なるものを探し求めたのでございます。

ところが、そのような者は影も形もございません。その上、楓殿の遺体を医師に見せたところ、体のどこにも傷が無く、首をひねる始末だったのでございます。

「楓殿は急な病いで亡くなられたのではないか？」

留守役筆頭ともいうべき滝川右衛門殿は、一通り騒ぎが収ったあと、一同を見渡してそうおっしゃいました。

「そんな筈はございません。確かに楓様は何者かから逃れるように、あの部屋から出ていらっしゃいました」

と、その女中――桔梗と申しましたが、そのように証言致しました。

「だが、桔梗、あの部屋にはだれもおらなんだ。それとも、だれか人影を見たというのか？」
滝川殿の問いに桔梗は黙って首を振りました。
桔梗は楓殿を抱き起した時、確かに部屋の中を見ております。灯りがついてはいませんでしたので、よくは見えなかったのですが、部屋の中に人の気配はありませんでした。
「で、楓はいまわのきわに何か申さなんだか？」
滝川殿は首をひねりながらも、さらにお尋ねになりました。
「は、はい」
「何か申したのじゃな？」
「――はい、それが」
「何と申したのだ？」
「ばちを――と一言申されたのでございます」
「ばちを？　確かにそう申したのじゃな」
「左様でございます」
滝川殿には何のことか見当もつきませんでした。
それにしても不思議なのは、曲者の逃げる余地などまったくなかったということでございます。
あの部屋は御殿の一番奥にあります。
まわりは山麓と頑丈な築地塀で囲まれ、曲者の出入りする隙はありません。
御殿の最も奥の間に曲者がやすやすと侵入し、誰にも見咎められずに逃げたとは考えにくいことです。
それに亡くなられた楓殿の体には、これといった傷跡もありません。むしろ、急病で倒れたと考える方が辻褄が合いますし、警備の方々も責任を問われずに済みます。
結局、この件は楓殿の急病死ということで一件落着したかに見えました。

## 四

ところが二人目の死者が出たのでございます。最初の楓殿の死から二日後、亡くなったのは奥女中の小竹殿でございます。
小竹殿はあのアドニスの像の前に倒れておりました。体に一切傷が無いのに苦悶の表情を浮かべており、医師が調べても死因はわからずじまいでございました。
小竹殿が死んだのは昼日中でございます。
朋輩の女中たちが何人も小竹殿を見ております。そして、しばらく姿が見えないと思ったら、あの部屋に入り一人死んでいたということなのでございます。
楓殿に引き続いて小竹殿が死んだことで、殿中に奇妙な噂が流れました。
あのアドニスというものは南蛮の魔神で、あの像こそ女中たちを殺した張本人だというのです。
噂はまたたく間に城内の御家来衆にも伝わり、人々はあの部屋の前で気味悪げに中をのぞき込み慌てて首を引っこめるという有様でした。
あまり殿中が騒がしくなったので、留守を預かる滝川右衛門殿はついに決断を下しました。
部屋を封鎖し、厳重に見張りを立てたのでございます。
滝川殿としては、できることならこの不吉な像を砕き捨ててしまいたかったのでございましょうが、像は信長様の持ちもの、勝手に処分するわけには参りません。
事の次第を詳しくしたためた書状を使者に持たせ、京の都に御滞在中の信長様のところへ向かわせたのでございました。

## 五

「何じゃと、それはどういうことじゃ？」
信長様はカン高い声で怒鳴りつけられました。
実は、楓殿の怪死の件ではございません。
岐阜城の事件を伝える使者が着いた頃、京の相国寺慈照院に御宿泊中の信長様のところへは、もっと重大な

事件が伝えられていたのでございます。
相国寺の奥座敷の信長様の前で平伏しているのは、鉄砲奉行の野々村三十郎殿でございました。
「カピタンが鉄砲を売れぬだと。何故だ？」
信長様は座敷がびりびりと震えるほどの高い声で野々村殿を問い詰められました。
「それが、まったく突然のことにて」
と野々村殿はしどろもどろに弁解なさいました。
事の次第はこうでございます。
野々村殿がカピタン・ジェベノーゼ殿の船が入っている堺へ行き、残りの鉄砲と硝石の引き渡しを要求したところ、これを拒絶されたのでございます。そして、ジェベノーゼ殿はなんの理由も述べずに、ただ約束した筈の品物の引き渡しを拒み、さっさと船に帰っていってしまったのでございます。
「南蛮人を叩き斬って品物を奪おうとすら考えましたが、とりあえず御指図を受けるため、こうして戻って参ったのでございます」
野々村殿が口惜し気に申し上げますと、信長様は冷静さを取り戻し、
「それはよい思案であった」
と、野々村殿の処置をおほめになりました。
信長様の我慢強さには理由がございます。
もし、外国人を斬ったりすれば、織田家が貿易の相手方として商人たちに認められなくなる恐れがあります。
そうなれば、いかに日本最大の貿易港堺を押えている織田家でも、非常にまずいことになるのです。
なぜならば、前にも申し上げました通り、鉄砲の弾薬の原料として欠かすことのできない硝石はほとんど輸入に頼っており、御自慢の鉄砲隊で天下を制圧しようとする信長様にとって、外国商人は絶対に自分の味方にしておく必要があるのでございました。
信長様は上座で脇息に凭れかかり、しばし御思案なされたあと、



「パードレ・フロイスを呼べ」
と近習の御家来にお命じになりました。
フロイス様が息せききって相国寺にやってきたのは、それから一刻後のことでした。
「パードレ、これは一体どういうことじゃ？」
信長様の質問にフロイス様もただただ恐縮するばかりです。
「何故、カピタンが引き渡しを拒んだのか。理由がわからぬ。探ってきてはくれぬか」
と信長様はおだやかな声で言われました。
フロイス様はますます恐縮してしまい、
「必ず調べて参ります」
と答え馬で堺へ向われました。
その後、信長様は岐阜城の怪事の報告を受け、苦虫を噛みつぶしたような表情で、
「女どもの死体は塩づけにしておけ」
とだけおっしゃったのでございます。

## 六

フロイス様は翌日になって、ようやく堺の町に到着されました。
この町は昔、周囲に堀をめぐらし浪人を傭兵として置いて、商人たちが談合して治めた町でした。パードレのオルガンティーノ様やジェベノーゼ殿の故郷イタリアには、このような町が多くあるという話でございます。
しかし、それも今は夢でございまして、現在の堺の町は織田家の直轄領として扱われ奉行が置かれております。
フロイス様は堺へ入ると、とるものもとりあえず波止場へ向われました。そこにジェベノーゼ殿の持ち船ベネチア号が入港している筈でございました。
ベネチア号はすぐに見つかりました。
フロイス様は岸壁から大声を張り上げ、ジェベノーゼ

殿の母国の言葉で呼びかけられました。フロイス様はポルトガルのお生れですが、ヨーロッパの各国語がお得意なのでございます。

二、三度呼びかけますと、部下の水夫に告げられたのでしょう、ジェベノーゼ船長が実に不機嫌そうな表情で船室から現われました。

「ジェベノーゼ、話があるのだ。船に乗せてくれ」

とフロイス様はおっしゃいました。

「パードレ、話すことは何もない」

と船長は血走った目で大きく手を振りました。どうも酒がかなり入っている様子でございました。

「一体どうしたのだ。せめて理由だけでも聞かせてくれ。金の問題か？」

「そんなことじゃない」

「では、何だ？　何か気に入らないことでもあったか？」

「パードレ、もう帰ってくれと言った筈だ。俺はノブナガやあんたは大嫌いだ。もう話したくない」

「待て、船長、まだ話が――」

フロイス様がそう呼びかけられましたのに、ジェベノーゼ殿はぷいと船室に入ってしまい、あとは何度呼びかけても出てはこなかったのでございます。

フロイス様はいったん引き上げ、その日は堺の町の中にある信徒の家で休息なさいました。こういう時、無理に押してはいけないということを、フロイス様は長年の布教の経験でよく御存知だったのです。

それにしても、パードレにはことのほか礼儀正しい筈の船長が、あのような態度に出るとは何かよほど気に入らないことがあったのに違いありません。

「フロイス様、どうしたらよいのでしょう」

と同行していたローレンソ修道士も困り果てた口調で尋ねられました。

「案ずることはありません」

とフロイス様は自信有りげにおっしゃいました。



フロイス様はそのまま夜まで待ちました。

そして、あたりが暗くなり妓楼や酒場など水夫相手の店が開いたころ、おもむろにそれらの店に向われました。

「ベネチア号の乗組員はいないかね？」

フロイス様は荒くれ水夫どもを相手に、そう訊いて回りました。つまり、搦手から事情を確かめようというのが、フロイス様の作戦だったのです。

乗組員は二軒目の店で見つかりました。その男は奥の席で一人ワインを飲んでおりました。フロイス様はローレンソ修道士を入口で待たせゆっくりと男のところへ歩み寄りました。

グラスを片手にいい気分になっていた男は、突然黒の修道服を着たパードレが現われたのを見て驚きました。

「私を知っているかね？」

とフロイス様は男にお尋ねになりました。

「へい、神父のフロイス様で――」

と男はグラスを置いて神妙に答えました。

この男からなら事情が聞けそうだ、とフロイス様はにっこりと微笑まれ、

「ここに座ってもいいかね」

と尋ねられました。

「どうぞ、お座り下せえ」

「ありがとう」

とフロイス様は男の横に腰をおろしました。

「君は名前を何という？」

「マルコって言いますだ」

「そうか、マルコか、いい名前だ」

とフロイス様は巧みに男の気持をほぐし、やがて本題に入りました。

「君の船長はなぜ急に信長様に銃を売らなくなったのかね？」

「へえ――」

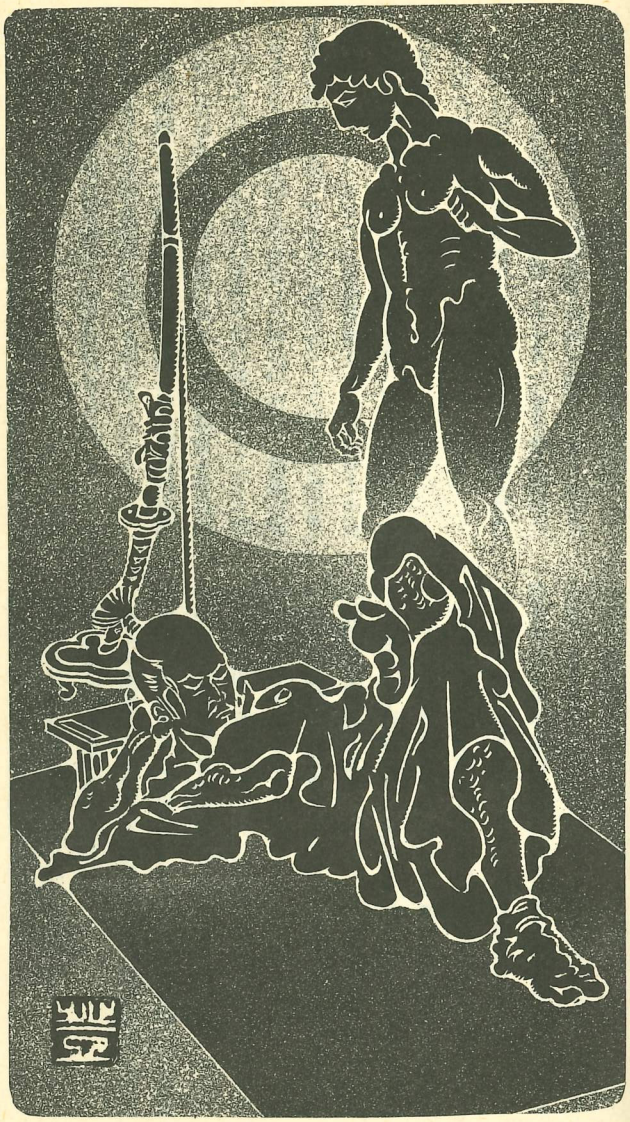
と男はしばらく沈黙していましたが、やがて決心した

のか顔を上げて、
「なんでも女を殺されたのが気に食わねえとか――」
と重い口を開き始めたのでございます。

## 七

「女？」
と信長様は不思議そうな顔をされました。
フロイス様は早速京に戻り、相国寺の信長様に事の次第を報告されたのでございます。
「女とは誰のことだ？」
「楓と申す侍女のことらしいのですが」
とフロイス様は申し上げました。
信長様はようやく思い出され、
「あの楓のことか、しかし、それが何故気に食わんと申すのだ」
「はい、その水夫の申し立てによりますと、楓殿とカピタンは互いに思いを寄せる仲だったそうでございます。ところが楓殿が不慮の死を遂げられたので――」
「しかし、それはわしのせいではないぞ」
「わかっております」
フロイス様はおっしゃいました。
「ところが、カピタンは信長様がささいなことを理由に楓殿を手討ちになさったと信じておるのでございます」
「誰がそのようなことをカピタンに申したのだ？」
「それはわかりませぬ。残念ながらカピタン自身とは腹を割って話せませんでしたので」
「うむ――」
信長様は脇息に凭れかかり、天井の格子模様を見ながらしばらく考えておられました。
「パードレ、どうも話が妙だな」
「……」
「わしが楓の死を知ったのは、カピタンが銃を渡さぬと





の報告が届いて後のことだ。どうしてカピタンはわしより早く楓の死を知っておったのだ」

フロイス様もそれを聞いて首を傾げました。

確かにおかしな話なのでございます。

岐阜で楓殿と小竹殿が死に、その知らせが届いたのが二日後、それより一日ほど前に使者が堺に鉄砲を受け取りに行っているのでございます。

カピタンが引き渡しを拒否したのは、当然、楓殿の死の様子を詳しく知ってからだということになりますが、そう致しますと、カピタンは信長様より一日は早くそれを知っていたということになります。

「何者かが讒言したのであろう」

信長様の結論はそれでした。

「パードレ、もう一度堺へ行って、カピタンに話してくれぬか。わしは楓を手討ちにしたような覚えはない。このことをよく話して、約束通り鉄砲と硝石を渡すように説得してくれい」

「はあ、しかし、あの様子では」

フロイス様は口ごもりました。

信長様は微笑を浮かべると、

「わしは来年、京の近くに城を構えることにしておる。町も作る。おそらく本邦始って以来の大きな町になる筈じゃ。そこに教会と神学校を作ってもよいと思っておったのだが」

とおっしゃいました。

フロイス様もこうまで言われては嫌とは申せません。

「お引き受け致します」

と答え、その足で堺へ出立なされたのでございます。

そして翌日の昼過ぎ、フロイス様は再びベネチア号の停泊している波止場に足を運ばれました。

「パードレ、もう話すことはないと言った筈だ」

ジェベノーゼ殿は相変らず不機嫌な様子でフロイス様に言いました。

「待ってくれ、カピタン」



とフロイス様は、船室に入ろうとする船長に岸壁の上から声をかけました。

「君は、信長様のことを誤解している。あの方は楓殿の死とは何の関係もない。第一、あの方は楓殿の死んだ時に京におられたのだ」

「京に？」

初めて船長にフロイス様の言葉を聞く態度が生れました。

「そうだ。だから、まず私の話を聞いてくれ。その上で君の言い分も聞こう」

こうしてフロイス様はベネチア号に乗船することに成功したのでございます。

フロイス様とジェベノーゼ船長は、ベネチア号の船室の中でテーブルを挟んで向い合わせに座りました。

部屋の中は薄暗く鯨油のランプの煙がこもっていたそうでございます。

「船長。君がどこから楓殿の死を知ったか知らぬが、あの女は信長様が殺したのではない」

とフロイス様は話を切り出し、信長様から聞いたあの岐阜城での奇妙な出来事を詳しく語ってきかせました。

「それでは彼女はどうして死んだのだ？」

一通り話を聞き終ると、ジェベノーゼ殿は疑惑の目でフロイス様に尋ねました。

「それは――詳しくはわからぬ」

「ではノブナガが殺したのではないと言い切れまい」

「それは違う。信長様はその時、京におられたのだ」

「命令することはできる筈だ」

「――一体、君に楓殿の死を知らせたり、それが信長様のなされた事だなどとありもしないことを告げ口したのは誰なのだ？」

フロイス様はかねての疑問をジェベノーゼ船長にぶつけました。

「それは言えぬ」

「なぜ？」

「約束なのだ」
船長は一言そう言っただけで、決してその者の名を明かそうとはしませんでした。
フロイス様もそのことはあきらめざるを得ませんでした。
「ジェベノーゼ船長。悪いことは言わん。早く信長様に鉄砲と硝石を渡したまえ。それが契約ではないか」
「彼女がなぜ死なねばならなかったのか。殺されたのか病死なのか——それすらわからないのに、そんなことは出来ない」
「君と彼女は一体どういう関係なのだ」
「愛し合っていた」
とジェベノーゼ殿ははっきりと言いました。
「同じキリスト教徒として、将来は結婚する筈だった」
「待て、確か君が彼女と会ったのはこの前の岐阜訪問が最初ではなかったのか？」
「あれが初めてではない」
と船長は意外なことを言い出しました。
「彼女がもっと幼い頃、京の教会で会ったことが何度かある。その頃からの知り合いだ」
「彼女は京の出身なのか？」
「そうだ。なんでも貴族の娘だそうだ」
「しかし、その時から結婚の話が出ていたわけではあるまい」
「そうだ。それは岐阜で再会してからのことだ」
「何日も日はたっておるまい」
「日数など問題ではない」
ジェベノーゼ殿は興奮して言い返しました。
「愛情の深さが問題なのだ」
「それはよくわかった。だが、それと今回の契約とは何の関係もない。契約に従うのが義務ではないか」
フロイス様の説得にも、ジェベノーゼ船長は耳を貸さず、
「とにかく楓の死の原因が知りたい。——それがはっきりしない限り、品物を引き渡すつもりはない」
と言い張ったのでございます。



## 八

「はてさて、厄介なことよ。この信長が身のあかしを立てねばならんとはのう」
フロイス様の報告に、さすがの信長様も苦笑する他はなかったのでございます。
「殿、そのような無礼は許すべきではございません。即座に討ち果し、積荷を奪えばよろしいではございませんか」
そんな物騒な進言をした方もいらっしゃいました。
小大名のころの信長様なら、あるいはそうなさったかもしれません。
しかし、天下布武の志を公にされ、そのために着々と手を打ち地盤を固めている信長様にとって、今はそのようなことはできません。ジェベノーゼ殿を討てば、品物は手に入るかもしれません。しかし、外国商人に対する織田家の信用というものが無くなってしまいます。
それは信長様にとって、絶対に避けなければならない事態だったのでございます。
「——仕方あるまい。カピタンに楓のむくろを見せよう。そうすれば納得がいくかもしれぬ」
と信長様は考えた末おっしゃいました。
「それは難しいかもしれません。ジェベノーゼ船長は殿を疑っております。容易に船から連れ出せますまい。それに、楓殿の死体などもう腐っているのではございませんか？」
フロイス様がこうお聞きになりますと、信長様は、
「むくろを堺まで運べばよいではないか。塩漬にしてある。多分それほど見苦しくあるまい」
こうして前代未聞の死体運びが行なわれることになりました。

三月の中頃になっておりましたから、死体の痛みが早くなる恐れもあり、楓殿の体からは衣裳がはがされ、生れたままの姿で桶に入れられて塩が満たされました。

そして普段は戦の武具や兵糧を運ぶ足軽どもが、自慢の足にものを言わせて、岐阜―堺間を運んだのでございます。

そして、信長様御自身も三好攻めなどで忙しい中、時間を割いて堺へフロイス様ともども向われました。

こうまで丁重にされたのでは、ジェベノーゼ殿も船を下りないわけにはいきません。

そこで堺奉行の屋敷で、信長様とジェベノーゼ殿の会見が行なわれることになりました。信長様は奉行所の庭に楓殿の死体を置かせ、ジェベノーゼ殿にそれを見せたのでございます。

「どうじゃ、カピタン、体に傷などないであろうが」

信長様がおっしゃいますと、船長は涙にぬれた目をこぶしで拭き取りながら、

「――これは毒を飲まされたのです」

と思いもかけないことを言ったのでございます。

「何、まことか？」

さすがの信長様も驚かれました。

「船長、それは本当なのですか」

フロイス様も驚きをあらわにして尋ねられました。

「私は前に故国で見たことがあります。この死体に薄く紫色の斑点が出ているのが、その証拠です」

と船長は主張しました。

その言葉に信長様も座敷から庭へ降りて、楓殿の死体をしげしげと御覧になりました。

確かにその死体には薄紫色の斑点が出ていたのでございます。

「馬鹿者、どうして医者どもはこれを見逃したのだ」

と信長様は側近の方々にカミナリを落されました。

御家来衆が慌てて弁明につとめられました。

何でも、死してすぐの見立てでは、何の異常も見当らなかったということでございます。

「カピタン。当方の不手際であったようだ」

と信長様はすぐに非をお認めになりました。

「しかし、楓が殺されたのは、わしのさし金ではない」

「では犯人を捕えて下さい。犯人がつかまり、なぜ彼女を殺したのかわかるまでは、品物をお渡しするわけには参りません」

ジェベノーゼ殿の態度は相変らず頑なでした。

「わかった。きょうのところは引き取るがいい」

信長様もサジを投げた形で、そうおっしゃる他はなかったのでございます。

## 九

京の相国寺に戻られた信長様は、ちょうどやって来られた女婿の蒲生氏郷殿と、この件について話し合っておられました。

「そのような次第で、この信長ともあろうものが手も足も出ぬ始末よ」

信長様は蒲生殿に酒を勧めながら、珍しくも愚痴をこぼされました。

「殿、兵をさし向けジェベノーゼと申す者から荷物を奪い取ればよいではございませんか」

と蒲生殿は申されました。

この方は御年十九歳ながら、すでに武勇の誉れ高く、もともとは人質の身で織田家に預けられておりましたが、その器量を信長様に見込まれ、女婿となられたのでございます。

「それは出来ぬ」

「何故でございます。あのような南蛮人のわがままを許しておけば、殿の御名にもかかわります」

「それは些細なこと。それよりもわしは外国商人への評判が悪くなることを恐れるのだ」

と信長様は蒲生殿の方へ膝を乗り出すようにされ、

「鉄砲は我が国でも出来る。じゃが硝石だけはどうしても外国から買い入れねばならぬからの」
「それほど鉄砲が必要なのでございましょうか？」
蒲生殿の疑問に、信長様は大きく頷かれ、
「忠三郎、わしは武田を鉄砲で倒す心づもりでおる」
「武田を鉄砲で？」
蒲生殿は思わず聞き返されました。
「そうじゃ、あいにくわしの兵は弱いのでな。弱い兵で武田に勝つには鉄砲しかない」
「我が兵は強うございます」
と蒲生殿が反論なさいました。
「それにしても、武田の騎馬隊を相手にどれほどの戦さができるかのう。それよりも、直接干戈を交えず、遠くから鉄砲で狙い打ちにした方がよいとは思わぬか」
蒲生殿は近江の出身でございます。
本拠は日野という在所で、その御家来衆は強者ぞろいとの評判でございました。
と申しましても、近江・尾張・伊勢などの地は昔から兵が弱く、山深く雪多い越前・甲斐などの国々の兵は強いというのは事実でございます。特に、武田に対する尾張武士の恐ろしがりようといったら、笑い話にされるぐらいのものでございました。
それでも織田家が天下取りの道を着々と歩んできたのは、鉄砲など新兵器をどこよりも早く採用したことと、同盟軍の徳川家康殿率いる三河兵が精強であったことによります。
「忠三郎、わしはな、鉄砲三千挺で武田を討ち滅ぼすつもりだ」
「三千挺？」
蒲生殿は思わず訊き返されました。
これは驚くべき数でございます。
日本全国を見渡しても、これほど鉄砲を持っているのは、鉄砲衆として名高い紀州雑賀衆ぐらいのものでございましょう。



「それも数さえ揃えばよいというものではない。鉄砲も射ち手もえりすぐったものを選びたい」
この信長様の構想には、蒲生殿も度肝を抜かれたようでございます。
三千挺の鉄砲と射手をえりすぐるとなればその倍以上の鉄砲衆が必要でありましょう。
それでは、鉄砲はともかく硝石を押さえている外国商人たちを怒らせるわけにはいきません。
信長様はこういう点は実に忍耐強いのでございます。
「それで、どうなさるのです」
蒲生殿の問いに、信長様は、
「こうなったら、岐阜へたち戻り、楓殺しの下手人を捕える他はあるまい」
と苦笑いしながら、おっしゃったということでございます。

## 十

信長様が岐阜のお城へお戻りになったのは、それから間もなくのことでございました。
主人がいない間の不始末ということで、留守を預った滝川右衛門殿をはじめ恐縮して信長様をお迎えしました。
信長様は御家来衆に声もかけずに、さっさと奥の間に進まれました。
例の奥座敷で、あのアドニスの像は女二人が死んだことも知らぬげに微笑んでいたのでございます。
「憎い奴め」
と信長様は不思議にも笑顔を浮かべ、その像を撫で回しました。
そして、近習の方々に命じ、最初に楓殿が死ぬところを見た女中を呼ばせました。

その女中はすぐにやって来て信長様の御前で平伏しました。
「その方、名は何と申す？」
信長様はカン高い声でお尋ねになりました。
「桔梗と申します」
「よし、楓が死んだ時の様子を詳しく語ってみよ」
信長様の御命令に、桔梗は逐一申し述べました。
深夜、隠れるようにしてアドニスの部屋に忍んでいく楓殿を見かけたこと。入ってほどなく悲鳴と共に外へ飛び出して来たこと。抱き起してみるとほとんど息がなくすぐに事切れたこと――などでございます。
「その時、楓は何か申さなんだか？」
と信長様は桔梗にお尋ねになりました。
「はい、なにぶんすぐにお亡くなりになったものですから」
と桔梗は答えました。
「うわごとのようなことでもよい。何か申さなんだか？」
重ねて問われますと桔梗は何か思いあたるふしがあるのか、考え込むような表情になりました。
「何か申したのじゃな？」
「は、はい」
「何と申したのじゃ？」
「それが、ほとんど聞きとれませず、ただ、〝ばちを――〟とおっしゃったのでございます」
「ばちを――と申したのじゃな？」
「はい」
信長様は首をひねられました。
〝ばちを〟というのは何を意味するのか、或いは〝撥〟のことでございましょうか。
「楓は琵琶でも嗜むのか？」
「いえ、存じませぬ」
桔梗は答えました。
信長様はそのあと二、三の女中を呼び、楓殿の日常や



親しい人間のことを尋ねられたあと、今度はイルマン・ジュリアン殿を呼ばれました。聖職者は人に知らせたくない悩み事の相談を受けることがよくございますので、あるいはそちらから手がかりでも、という信長様の思し召しだったのでしょう。
ジュリアン殿はその整った顔立ちに緊張の色をにじませて、信長様の御前にまかりでました。
「イルマン、楓から何か特別な相談事を受けてはおらなんだか？」
信長様の問いにジュリアン殿は首を振りました。
「存じませぬ。まったく不幸な出来事でした」
「何か心当りがあるのか？」
「いいえ、ございません。それより殿、楓殿は、本当に病死ではないのでございますか？」
「楓だけならともかく、小竹も死んでおる。毒を飲まされたということも確かに考えられることだ」
「しかし、一体誰がどのような手立てでそんなことを、それに何のためです？」
ジュリアン殿は聞き返しました。
「それがわからぬから、こうして調べておる」
と信長様はいらいらした様子でおっしゃいました。
「イルマン、もう一つ聞く。楓はまさに息が絶えんとする時、〝ばちを――〟と言ったというのだが、何のことかわかるか？」
「残念ながら、わかりませぬ」
ジュリアン殿はすぐにそう答えたのでございます。

## 十一

「ばちを、ばちを――か」
信長様はそれから奥御殿にお入りになり、楓殿の漏らした言葉の謎をお考えになられておりました。
もう一つ、殺すなら、どうして毒を飲ますというまわりくどい手段に出たのでございましょう。もし曲者があ

の場におったのなら、一刀のもとに斬り捨てる方が簡単でございます。

しかし下手人の姿を見かけた者もおりません。あの奥の部屋では隠れる場所も逃げる場所もあろうとは思えません。

「では、やはり、あの場におったのはアドニスだけだったのだ」

信長様はそうお漏らしになると、立ち上って例のアドニス像がある部屋に入り、顎に手を当てて像をじっと眺められました。

アドニスは相変らず彫りの深い面貌で虚空をみつめております。

ほぼ等身大の像でございますから、ちょうど信長様と同じ高さのところに目や唇があるのでございます。

日本人の標準から言えば、アドニスの顔は鼻が高過ぎ髪も縮れ過ぎておりますが、それがまた異様な魅力をかもし出しているのでございます。

信長様は考え込むようにしてアドニスの前を歩き回られました。

そして、もう一度、部屋の中から外へ脱出する方法がないかどうか仔細に点検なさいました。

結論はやはり前と同じでした。

楓殿が死んだ時、この部屋の中に曲者がいたとしても、駆けつけてきた家来の目をかいくぐって、逃げられる筈がない、ということでございます。

失望して部屋を出られた信長様の耳に、御女中の方々の楽しげな笑い声が聞こえてきました。

そこで信長様はまた二階に上られ、その声のする部屋の障子を両手で大きく開け放たれました。

そこには大勢の御女中が集まって、イルマン・ジュリアン殿の説教を聞いていたのでした。

信長様の姿を見ると、御女中の方々は一斉に平伏されました。

その中で上座におられたひときわ美しい女性が、信長様の御正室美濃御前でございます。美濃御前はかつてこの城の城主であった斎藤道三の娘で帰蝶と申され、通称濃姫と呼ばれております。

「そのままでよい」

と信長様は部屋の中に入られ、濃姫様の隣りに座られました。

「イルマン、デウスの教えもなかなか繁盛で結構だな」

「はい、これも殿のおかげでございます」

ジュリアン殿は微笑を浮かべて答えられました。

もともとは京の堂上家の出身でいらっしゃいます。その挙措、言葉遣いの端々にもどことなく気品がございます。

「イルマン、デウスの教えで一番大事なことは何かな？」

信長様が突然そうお聞きになったので、濃姫様も他の御女中方も大変驚かれました。

信長様は普段から宣教師との付き合いは深かったものの、教えを聞こうとすることなど絶えてなかったことでございます。

神や仏など人を超越する存在を、信長様はお認めにならないのでございます。

ジュリアン殿も驚かれた様子でしたが、

「一番大切なものは愛です」

とお答えになりました。

「愛とは——男と女の間のことか？」

「いえ、そうではなく、神の人に対する愛です。神の愛は広く深く、人の愛のように偏りません」

信長様はそれを聞くと、にやりと笑って、

「では、あのアドニスとやらはどうだ。あれも神の愛を伝えるものなのか」

とおっしゃいました。

「あれは異教のもの。デウスの教えとはかかわりありません」

ジュリアン殿はきっぱりと否定しました。

「そうか、よし、ここで皆の者に申し渡す」
と信長様は何事かと聞き耳を立てる御女中衆に、あっと驚くようなことをおっしゃったのでございます。
「楓と小竹を殺した下手人はあのアドニスだ。従って、あの者を斬首の刑に処すことにする」

## 十二

世にも珍妙な斬首の刑が行なわれたのは、それから三日後のことでございました。
アドニスの像はその処刑の日まで、信長様の御命令で城内の牢に移され、厳重な監視を受けました。
そして当日は城内二の丸の広場に処刑場が設けられ、首斬り役として、城下に住む石工が鑿を持って馳せ着けたのでございます。
この処刑には堺からジェベノーゼ船長も呼ばれ、普段このような席には招かれることのないフロイス様や御女中衆までが臨席され、午後から始められたのでございます。
織田家の定紋である木瓜紋が大きく染めぬかれた幔幕の中で、床几に腰かけられた信長様の前に、アドニス像が運ばれて参りました。
なんといっても等身大の石像でございますから、人夫どもが輿のような台を作り、その上に像を乗せて四人でかついできたのでした。
アドニスが信長様の眼前に据えられますと、御家来の一人が像の前に立たれ、
「その方、魔力をもって女中二人を殺害せし段まことに不届き、よって斬罪を申しつける」
と誠に奇怪な罪状申し渡しを行なったのでございます。
そして、信長様が重々しく頷かれると、アドニスは大地に横たえられ、石工二人の槌と鑿によって首と胴体を引き離されたのでございます。



この一部始終を御家来衆の皆様方は呆気にとられて見ておりました。信長様の怒りが恐しくて、誰も口出しはしなかったのでしたが、内心あまりの馬鹿々々しさに苦々しい思いを噛みしめている方もいらした筈でございます。
信長様といえば、怪力乱神のたぐいが何よりもお嫌いで、一切の迷信をお信じになりません。その薫陶を受けた方も御家来衆の中には少なくないのでございます。
「殿のなされ方、今度ばかりは納得がいかん」
それが御家来衆の声なき声だった筈でございます。
もっとも御女中衆の方々は違っていたかもしれません。
信心と迷信は紙一重でございますし、デウスの教えを信じない方々にとって、アドニスが首を斬られたことは、ほっとさせる出来事であったのかもしれません。
等身大のアドニスが、石像とは申せ首を切断され、地面に転がっている様は何とも言えず奇妙な光景でございました。
御女中衆も目をそむける方と、胸を撫でおろされる方の二通りに分かれました。
デウスの教えを信ずる方々にとっては、いかに異教の石像と申せ、なんとなく気分の優れぬ出来事であったに相違ありません。
信長様はそのような人々の顔色を興味深げにごらんになった後、
「首をこれに持て」
と近習の方にお命じになりました。
石の首が信長様の前に据えられますと、ついに我慢が出来なくなったのかジェベノーゼ船長が立ち上がりました。船長はフロイス様やジュリアン殿と信長様のすぐ脇に控えておられたのでございます。
「何の茶番ですか、これは」
と船長は興奮して叫びました。
フロイス様が船長をなだめると、信長様は通訳される

までもなく船長の叫びの意味がおわかりになったのでしょうか、

「カピタン、よいではないか、少なくとも楓を殺した片割れの一人は罰したのだ」

とおっしゃいました。

フロイス様にその意味を告げられますと、船長は一旦興奮をしずめ、

「では、まだ他に誰かいるとおっしゃるのですか、それは誰です？」

と信長様に尋ねました。

「それはわしにもわからぬ。だが近いうちに必ず暴いてみせよう。それまでしばらくここにとどまらぬか？」

「いつまでございます？」

「十日もあれば充分じゃ」

船長はしばらく考えていましたが、やがて、

「お言葉に従いましょう。——ただし十日たって犯人がつかまらぬ場合は、城下を去らせて頂きます」

「よかろう。いずこへなりとも行くがよい」

この会話は御家来衆の方々にはよく聞き取れなかった筈でございます。

そして、信長様は今度は一段と声を張り上げられて、

「皆の者、よく聞け。この不届き者の首はわが寝所の近くの庭に曝すことにする。これにて一件落着とする」

と宣言されたのでございました。

## 十三

その夜のことでございます。

御殿の庭に作られた台の上のアドニスの首に忍び寄る影が一つあったのでございます。

首は庭園の山麓側、池の近くの桜の木の下に置かれてありました。庭には曲者に対する用心のため、ところどころに灯をともした石燈籠がありましたが、やはりそれだけでは暗く、人影といっても姿形はよくわかりません。



その人影は首のところへ歩み寄ると、かがみ込んで顔を寄せました。

ところが、その時、突然その者の肩を後ろから押え込んだ者がございました。

きゃあ——という悲鳴が庭に響きわたりました。

「なんじゃ、紫ではないか」

肩を押えた者が驚いたように言いました。

「あなたは万見様」

紫と呼ばれた御女中はそう言葉を返しました。万見殿は信長様のお側近くに仕える方でございます。

「こんなところで何をしている？」

万見殿は紫に問い質しました。

「万見様こそ、このような場所で」

「わしか、わしは殿の御命令を受けたのだ。今夜首を見に来る者があるやもしれぬ。そのような者が現われたら必ずひっ捕えよ、とな。まさか奥女中が網にかかるとは思わなんだ。さあ、殿のところへ参ろう」

万見殿が手を放し、そのように言ってきかせますと、紫も観念したように立ち上がりました。

すると突然、その場に信長様がわずかな供を連れてお出ましになったのでございます。

二人とも慌ててその場に平伏致しました。

「やはり網にかかったのう」

信長様は会心の微笑を浮かべておいでになりました。

「仙千代、でかした。わしは先程から向うでみておったのじゃ」

「これはお人の悪い」

と万見殿は苦笑しましたが、やがて表情を改めると、

「しかし、この女、何故このような夜更けに首のところへ参ったのでございましょう？」

と疑問を口にされました。

「その女に尋ねてみるがよい」

そこで万見殿は紫にその理由を尋ねました。

しかし、紫は固く口を閉ざし地面に手をついたまま顔

を上げようとも致しません。
「よい、わしが尋ねよう。何故この首のところへ参ったのだ？」
信長様のお尋ねにも紫の態度は変りませんでした。
「無礼者――」
と万見殿が紫を打擲しようと致しますと、信長様はそれを制止し、かわりにまたしても奇妙なことをお命じになりました。
「仙千代、その首を池に放り込んでみせい」
「は？　首を――でございますか」
「そうだ、早くやってみせい」
そこで万見殿はその重い石の首を持ち上げ、池の中に放り込んだのでございます。
すると、まことに不思議なことながら、池に飼われている鯉が数匹白い腹を見せて浮き上がってきたのでございます。
「紫、よく見るがよい」
信長様の言葉を待つまでもなく、紫の顔は蒼白となっておりました。
「わしの命にそむいてまで口を閉ざすのは誰に義理だてしてのことか見当はついておる。その者が何をせよと命じたかも、おおよその見当はつく。だが、もしその通りにしておったら、仙千代が止めなんだら、そちはあの魚のようになっておったのだ」
信長様は厳しい声でそう言うと、真っ青になって震えている紫に近寄り、
「包み隠さず申してみよ」
と今度はうって変って優しい声でおっしゃいました。
紫はわっと泣き崩れましたが、興奮がおさまると、信長様の質問に答えるようになったのでございます。
「このアドニス様に願をかけると、いとおしい人と添えると言われたのでございます。このアドニス様は愛の神だと」
紫は告白致しました。



「ジュリアンであろう。そちにそう言ったのは」
「はい」
信長様はすべておわかりになっていらっしゃるのか、慈悲深い色をたたえたお顔で、
「そのことを口外するなと申したのはジュリアンだな？」
と尋ねられました。
紫は涙に濡れた顔で頷くと、
「はい、もし他人に口外致さば、願いの筋は聞き届けられぬようになる。そうおっしゃったのでございます」
「なるほど、わかった」
信長様は溜息をもらされました。
祈りの最中に人と口を利いてはならぬ、とか、祈りの内容を人に漏らしてはならぬ、などという戒めは、古今東西宗教というものには付き物でございます。
ジュリアン殿は巧みにこの点を利用し、御女中衆をたぶらかしたのでございます。
すべてを聞くと万見殿は刀の柄に手をかけて立ち上がりました。
「仙千代どこへ行く？」
信長様がお尋ねになりました。
「知れたこと、あの男をひっ捕えるのでございます」
「待て、それはまだ早い」
と信長様はおっしゃり、
「それよりも仙千代。すぐに京へ参れ」
「京へ？」
意外な命令に万見殿は思わず言葉を返されました。
信長様は頷かれると、
「至急、調べてもらいたい、耳を貸せ」
と、万見殿に何事か耳打ちされたのでございました。

## 十四

それから五日後のことでございます。
あの夜の一件は固く秘せられ、家中の者で知っていた

のはほんのわずかの方々でございました。
濃姫様がいつものとおり、御女中衆を集められ、ジュリアン殿の説教を聞いていた時、突然信長様がこの前の時のようにお出ましになりました。
「そのままでよい」
信長様はそうおっしゃると濃姫様のとなりに腰をおろされ、ジュリアン殿の方を向かれました。
そして、
「イルマン、何か面白い祭りの趣向はないか？」
とお尋ねになったのでございます。
「――さあ、あまり、そういうことは存じませんので」
ジュリアン殿がそうお答えしますと、信長様は、
「それは残念じゃ。わしも当分息抜きをしたいと考えておるところでな。思いついたら、いつでも言ってくれい」
といつになく楽しげにおっしゃったのでございます。
「当分、息抜きをされるのでございますか？」
ジュリアン殿の問いに信長様はからからとお笑いになり、
「そうじゃ。わしは武田を攻めるつもりであった。じゃが鉄砲が揃わぬ。これでは武田と戦さは始められぬからのう。しばらくは息抜きじゃ」
「左様でございますか」
その時、何食わぬ顔をしながらジュリアン殿は内心喜びにうち震えていたのでございます。
信長様が去られると、ジュリアン殿は説教を早目に切り上げ、城下の宿舎に向いました。
ジュリアン殿は城下のはずれにある農家を改造した家に住んでおりました。
そこでジュリアン殿は大急ぎで手紙をしたため、それを持って外へ出たところを、織田家の御家来衆に取り抑えられました。
その指揮をとられたのは、この五日の間に京と岐阜の間を往復され、さらにジュリアン殿の身元を調べるという神業をこなした万見殿だったのでございます。



## 十五

「そうか、鳩を使うのか。これは面白い」
ジュリアン殿をしばり上げ、御殿の庭に引き据えた万見殿の報告を聞いて、信長様は感嘆の声を上げられました。
ジュリアン殿は密書をしたため、それを飼っている鳩の足にしばりつけたところを、万見殿に取り押えられたのでございます。
これは伝書鳩と申し、ローマでは悠久（ゆうきゅう）の昔から用いられている通信方法であることは御承知の方も多いかと存じます。
その庭にはフロイス様、ジェベノーゼ船長をはじめ、御家来衆、御女中衆の主だった方々が集められ、意外な事の成り行きに信長様の御解明を今や遅しと待っておられました。
縄をかけられたジュリアン殿は、静かに目を閉じ身じろぎも致しません。
「殿、これは一体いかなるわけで？」
とフロイス様がたまりかねて信長様にお尋ねになりました。ジュリアン殿は教会の一員です。何が起ったのか知ることはフロイス様の務めでもあります。
「パードレ、それにカピタン。よく聞くがよい。今度の一連の女中殺しはすべてこのジュリアンの仕業であったのだ」
ほおっという驚きの声が一座の人々すべてから上がりました。
「殿、それは本当ですか？」
「そうだ」
「何か証拠がございますか？」
フロイス様の問いに、信長様はジュリアン殿が鳩に託して送ろうとしていた密書を示しました。
「パードレ、これにはこう書いてある。織田方はいま鉄

砲の数が足りず武田を攻めることができない。戦いを挑むなら今だとな。――わかるか、ジュリアンは武田家の間者であったのだ」

フロイス様はまだ信じられない御様子でした。そこで信長様は万見殿の方をごらんになりました。

「パードレ、このジュリアンという男は京の三条家の出です。姉はずっと以前に武田家に嫁いでおり信玄公の正室となっております。かなり年は離れていますが、この男は信玄の義弟ということになります」

「では、この密書を甲府まで鳩で」

フロイス様が驚いておっしゃると、

「そうではあるまい。おそらく京までであろう。甲府はいかにも遠い。京におる仲間に知らせれば、そこから甲州まで使いが出る手筈になっておったのだ」

と信長様がおっしゃいました。

「それと、楓の死と、どういう関係があります？」

そう聞いたのはジェベノーゼ船長です。

フロイス様の通訳で、その意味を知ると信長様は、

「その方には気の毒であったな。詳しく話してとらせよう。このイルマンは武田の間者だ。この男の使命は織田家の武田に対する戦力を少しでもそぐことにある。そこで、この信長がカピタンから銃と硝石を買い入れるのを何としてでも防ぎたかった。そのためには手段を選ばぬ。たまたま、そちと楓が相思相愛なのを知ると、まず楓を殺害し、それをこの信長の指し金と偽ってそちを怒らせ、取引を中止させようとしたのだ。中止に腹を立て、わしがそちを斬るようなことがあればますます武田の思う壺じゃ。考えてみれば恐しい罠であった」

「一体どうして、彼はカピタンと楓殿の仲を知ったのです？」

フロイス様が尋ねました。

「それは簡単なこと、信者は心の秘密をパードレに話すというではないか。それを利用したのだ」

「神よ、懺悔を悪事に使うとは、この男の所業をお許し



下さい」

フロイス様は思わず神に祈られました。

「この男は悪知恵にたけておる。楓を殺したあと、すぐにそれを鳩で京へ知らせた。わしの使いが行く前に、楓の死の真相をゆがめてカピタンに伝えるためだ。おそらく京の仲間というのは教会の人間であろう。カピタンに楓の死は信長の命令だと偽りを教え込み、なおかつ自分の正体については口止めさせた者。――パードレの命令に反して伝えるのだから、内緒だとでも申したのだろう。カピタン、そうではないか？」

ジェベノーゼ殿もそれを認めました。

楓殿の死を知らせにきたのは京の教会の日本人修道士フェルド殿でございました。

フェルド殿は、このことはフロイス様に口止めされているのだが、と前置きして、その話をしたそうでございます。そして、自分がしゃべったことは絶対に秘密にしてくれと、それを神に誓わせたそうでございます。そのためにフロイス様がいくら問い詰めても、船長は相手の名前を言わなかったのでした。

このフェルド修道士、のちの調べで、やはり武田の間者と判明したそうでございます。

「信長様、ところで、この男はどうやって彼女を殺したのです。その方法は？」

ジェベノーゼ殿は、一番気になっていたことを尋ねました。

「ジュリアンは、そちの献上したアドニス像を、男女の仲を成就させる神だと偽ったのだ。そして、そのことを口外せず像に願をかければ、相手と添い遂げられると申したのであろう」

「……？」

「像には毒を塗っておいたのだ。そちの看破した通り南蛮渡来の猛毒をな」

「しかし、像に毒を塗っただけでは人は死にません」

ジェベノーゼ殿はさらに尋ねました。

「その通りだ。だから唇の部分に毒を塗ったのだ」
と信長様はにやりと笑うと、
「ばちを、バチオ――これは、そちの国の言葉ではないのか？」＊bácio（ポ）接吻
信長様のお尋ねにジェベノーゼ殿は頷くと、もどかしげにフロイス様に何か早口でいいました。
フロイス様が首をひねると、信長様はすかさず、
「男と女が口を吸い合うことであろう」
とおっしゃいました。
「だからこそ、唇に毒を塗っておいたのだ。そして、こやつはアドニスの唇を吸えば、バチオをすれば願いが叶うとでも申したのであろう」
信長様の明快な御説明に、一同は感服して頭を下げられたのでございます。
すべてが終り、ジュリアン殿が下手人として引き立てられたあと、後始末を終えられた万見殿は信長様にそっとお聞きになりました。
「殿、楓殿の死んだ理由はよくわかりましたが、小竹殿はどうしてあのような目に会ったのでございます。すでに死人が出ておりますのに、小竹殿や紫の所業は解せませぬ」
「それはな仙千代、女の業よ」
「は？　と申しますと？」
「紫はああ申しておったが、ジュリアンから直接アドニスの利益を聞く筈がない」
「それはまたなぜでございます？」
「きゃつは楓を殺せば使命は果せる。小竹や紫には用がない筈。おそらく二人はジュリアンがアドニスのことを楓に話している際、盗み聞きしたのであろう。そして、自分もアドニスの利益にあずかりたくなったのだ。二人とも好きな男がいたに違いない」
「されど、すでに楓殿が死んでいるではございませんか。自分たちも命が危ないとは思わなかったのでしょうか？」



信長様は苦笑されて、
「それが業じゃ。二人とも自分だけは危ない目に会わず、利益にはあずかれるものと信じておったのだ。――もし、わしがジュリアンなら、アドニスとは美しき女性の願いのみ聞き届け、そうでない女は殺すとでも言ったであろうよ」
と、おっしゃったことでございます。
その年の五月、織田と徳川の連合軍は三河国設楽原（みかわのくにしたらがはら）において、宿敵武田軍を鉄砲の一斉射撃で壊滅に追い込んだのでした。
世に云う、長篠の合戦がこれでございます。

作中、フロイス「日本史」からの引用部分は、松田毅一・川崎桃太両氏の日本語訳（中央公論社刊）を、また、安土城の構造については内藤昌氏の研究を参考にさせて頂きました。記して感謝の意を表します。　作者

初出誌一覧

| | | |
|---|---|---|
| 修道士の首 | 小説現代 | 昭和56年5月号 |
| 二つ玉の男 | 〃 | 昭和58年10月号 |
| 六点鐘は二度鳴る | 〃 | 昭和56年10月号 |
| 王者の罪業 | 〃 | 昭和57年12月号 |
| 身中の虫 | 〃 | 昭和58年3月号 |
| 不動明王の剣 | 別冊小説現代 | 昭和57年初夏号 |
| 裁かれたアドニス | 小説現代 | 昭和57年4月号 |



# 修道士の首

昭和五八年一二月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価六二〇円

著者―井沢元彦
©1983 MOTOHIKO IZAWA Printed in Japan
発行者―加藤勝久

発行所―株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二　電話東京(〇三)―九四五―一一一一(大代表)

振替東京八―三九三〇

印刷所―凸版印刷株式会社　製本所―大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

ISBN4-06-181087-1 (0) (文二)

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

金額はすべて定価です

長編本格推理
殺人行 おくのほそ道[上][下] 松本清張 各580円

長編サスペンス
湖底の光芒 松本清張 660円

長編本格推理
神より借りた砂漠 森村誠一 620円

長編本格推理
垂直の死海 森村誠一 640円

長編鉄道推理
特急さくら殺人事件 西村京太郎 580円

長編鉄道推理
四国連絡特急殺人事件 西村京太郎 680円

長編鉄道推理
寝台特急あかつき殺人事件 西村京太郎 600円

長編異色ミステリー
檻の中の被害者 佐野洋 680円

長編勝負師ロマン
ばいにんぶるーす 阿佐田哲也 640円

新たな旅立ちを描く長編
鳥の歌[上][下] 五木寛之 各660円

ユーモアミステリー
東西南北殺人事件 赤川次郎 580円

ユーモアミステリー
起承転結殺人事件 赤川次郎 580円

長編ユーモアミステリー
三姉妹探偵団 赤川次郎 580円

長編青春怪奇ミステリー
沈める鐘の殺人 赤川次郎 580円

性の遍歴を描く長編
背徳ごっこ 野坂昭如 680円

書下ろし都会派ハードボイルド
野獣駆けろ 大沢在昌 620円

書下ろしサラリーマン・サスペンス
誘拐者 諸星澄子 620円

書下ろし本格ミステリー
視聴率の身代金 阿井渉介 600円

書下ろし本格長編推理
卑弥呼殺人事件 阿井渉介 640円

歴史ミステリー織田信長推理帳
修道士の首 井沢元彦 620円

長編サスペンス推理
六歌仙暗殺考 井沢元彦 580円

新・大浪花諸人往来
蔵屋敷の怪事件 有明夏夫 620円

長編サラリーマン・サスペンス
明日なき巡礼たち 黒岩重吾 680円

書下ろし名探偵「陳展望」の推理
香港から来た男 伴野朗 620円

長編新探偵小説
敗北への凱旋 連城三紀彦 620円

書下ろし海洋冒険ロマン
裂けて海峡 志水辰夫 660円

書下ろし怪奇ミステリー
狂い壁 狂い窓 竹本健治 640円

書下ろし探険隊の黒い野望
シーラカンス殺人事件 内田康夫 640円

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

KODANSHA NOVELS 講談社ノベルス

長編ミステリー
**青春抒情死抄** 小峰元 580円

書下ろし穂高殺人事件
**赤い雪崩** 太田蘭三 620円

曾我佳城の名推理
**天井のとらんぷ** 泡坂妻夫 640円

書下ろし怪奇ミステリー
**斜め屋敷の犯罪** 島田荘司 640円

書下ろし時刻表ミステリー
**死体が飲んだ水** 島田荘司 680円

ハードボイルド・ロマン
**透明な牙** 生島治郎 680円

非情のハードボイルド
**兇悪の拳銃** 生島治郎 640円

長編青春サスペンス・ロマン
**国境の女** 夏樹静子 580円

書下ろし国際経済情報小説
**マネー危機** 安田二郎 640円

書下ろし銀座ママは名探偵
**知りすぎた女** 川上宗薫 620円

長編官能サスペンス
**復讐する女** 川上宗薫 640円

書下ろし海賊放送局ハワイ99
**殺しのヒットパレード** 喜多嶋隆 660円

書下ろしテレビ警察西北署
**刑事たちの伝説** 志津三郎 620円

書下ろしバイオレンス・ロマン
**殺人カーニバル** 醍醐麻沙夫 620円